TOTO 通信

2024年春号

Toward a Creative Architectural Scene

30周年記念

特集／時の積み重ねをデザインする

Special Feature As Time Passes

1994 1995

1997 1998

1999 2000 2000 2001

2003 2004 2004 2005

2007 2008 2008 2009

2012 2013 2013年夏号
『TOTO通信』
500号記念 2014

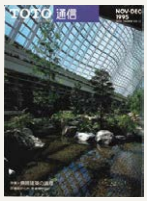
2016 2017年新春号
TOTO創立100周年 2017 2018 2018

2021 2022 2022 2023 2023 2024年春号
『TOTO通信』
30周年記念

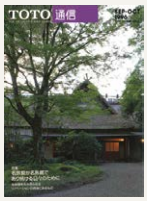
『TOTO通信』が30周年を迎えました。

1953年に『東陶ニュース』が社外報としてスタート、
56年にそれを母体として『東陶通信』が創刊しました。
そして94年に『TOTO通信』に改称してから今年で30年たちます。
30年、さまざまな建築の潮流を発信してきましたが、
今号の特集「時の積み重ねをデザインする」と同じように、
この『TOTO通信』自体も時を積み重ねてきたということでもあります。
読者のみなさまと、この取り組みの周年を記念したく、
浦一也さんの人気連載「旅のバスルーム」も特別復活版として掲載。
そしていつもよりボリュームアップした『TOTO通信』を、お楽しみください。

1994年1-2月号
『TOTO通信』へ
改称後、最初の号



1995



1996

1997

1998

1999

2001

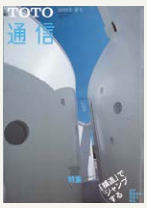
2002

2002

2003

2005

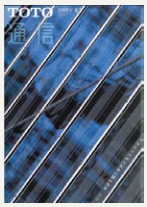
2006



2006

2007

2009



2010

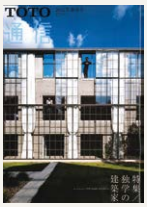
2010

2011

2011

2012

2014



2015

2015

2016

2019

2019

2020

2020

2021

Special Feature

As Time Passes

建築は数年、数十年、
あるいは数百年と立ちつづける。
その建築が使われ、
長い時間が経過するなかで、
材料の質感も変わり、
修復を繰り返しながら
改築も増築もなされ、
そこには多くの人々の痕跡が
刻まれていくだろう。
少し前のこと、懐かしい昔のこと、
そしてもはや歴史ともいえる時代のこと。
そうして建築はその時々の
さまざまな事情を乗り越え、
それをほのかに、
時には大胆に一身に携えている。
今は確かめるまでもなく、
リノベーションの時代。
中古とは感じさせない
まったく新しいデザインで
上塗りするものもあるが、
一方でせっかく時を積み重ねてきた
建築の味を隠すのではなく、
それを生かした方法もあるはずだ。
加齢を否定的にとらえてばかりでは
未来がないのだから。
時の積み重ねが表現された
デザインを探りたい。

TOTO 通信

Toward a Creative Architectural Scene
Number 535
Spring 2024

『TOTO通信』が30周年を迎えました。 2

インタビュー 6
建築も、時の流れに身をまかせ 加藤耕一

ケーススタディ1／花重リノベーション 14
木の履歴を鉄で継ぐ 高野洋平+森田祥子

ケーススタディ2／郭巨山会所 22
新しい部分も保存対象に 魚谷繁礼

ケーススタディ3／旧富岡製糸場西置繭所保存整備事業 30
国宝でも修復しきらない 齋賀英二郎／文化財建造物保存技術協会（当時）

ケーススタディ4／佳水園 ウェスティン都ホテル京都 38
建築家から建築家へ渡されたバトン 中村拓志（客室監修）

ケーススタディ5／千鳥文化 46
なんでもない庶民生活の積層も味わい深い ドットアーキテクツ

ケーススタディ6／スキマ 大阪 54
古いものに新しいものを「加装」 元木大輔

旅のバスルーム・特別編 62
レ・ザラ・ストラスブール（フランス・ストラスブール） 文・スケッチ／浦 一也

シリーズ
古写真でみる建築家のアトリエ6 チャールズ・イームズ 文／山村 健 64
現代住宅併走57 「歓帰荘」設計／白井晟一 文／藤森照信 66
最新水まわり物語63 敦賀駅 72
最新水まわり物語64 福岡大名ガーデンシティ 76
TOTOギャラリー・間で展覧会をします 魚谷繁礼展 84
News File TOTO News, Cera Trading News, Book 86

『TOTO通信』はインターネットでもご覧いただけます。

https://jp.toto.com/pages/knowledge/useful/tototsushin/

表紙／「花重リノベーション」の床の間。 撮影／藤塚光政
編集制作／伏見編集室 デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

特集／時の積み重ねをデザインする

Case 2
Kakkyoyama Common Center for Gion Festival

photo by Kawabe Akinobu

Case 1
Hanaju Renovation

photo by Fujitsuka Mitsumasa

photo by Sobajima Toshihiro

Case 4
Kasuien, The Westin Miyako Kyoto

photo by Kuwata Mizuho

Case 3
Conservation Work of the West Cocoon Warehouse of Tomioka Silk Mill

Case 6
sukima Osaka

photo by Yamauchi Norihito

Case 5
Chidori Bunka

photo by Sobajima Toshihiro

特集／時の積み重ねをデザインする　インタビュー

建築も、時の流れに身をまかせ

建築史家

加藤耕一

聞き手／伏見　唯

まとめ／植林麻衣　写真／山内秀鬼

Interview

建築をリノベーションするとき、新築のようにまったく新しい姿につくり変えてしまうのか。あるいは文化財のように つくられた当初の姿に復原していくのがいいのか。もちろんそれだけではない。時の経過のなかで培われてきた建築の魅力を手放すのは惜しい。加齢とともに帯びてきた味を生かす方法もあるはずだ。『時がつくる建築』(＊)を著した建築史家・加藤耕一さんに話を聞いた。

「花重」明治棟2階の和室にて。時が積み重ねられた床の間を見る加藤さん。今回の改修を経て、継ぎ接ぎの板張りとプリキ板での補修跡が現れた。

＊加藤耕一『時がつくる建築――リノベーションの西洋建築史』(東京大学出版会、2017年)。2017年サントリー学芸賞を受賞。

建築も歳をとることで価値を増す

――今やリノベーションも一般的になりましたが、中古住宅の市場では、古い建物をいかに新しく生まれ変わらせるかというある種の新築神話がいまだに根強く残っているようにもみえます。一方で文化財の世界では、つくられた時代の姿に戻す「当初復原」が長年にわたり重んじられてきています。

しかしながら、まったく新しい姿にはせず、かといって当初の原形にもとらわれすぎない、建物が積み重ねてきた時間を表現してデザインする手法もあるように思います。

加藤　それはまさに最近考えていることで、この特集についてご連絡をいただいてから、オーストリアの美術史家アロイス・リーグルの著書『現代の記念物崇拝――その特質と起源』（中央公論美術出版）を読み返しました。

１９０３年に書かれたこの本は、現在の文化財保護の考えの根本を示していますが、リーグルは「記念物崇拝における記憶の価値の位置づけ」という章で、「経年価値（Age Value）」と「歴史的価値（Historical Value）」という概念を示しています。「経年価値」は本特集で位置づけている「時の積み重ね」で、「歴史的価値」は瞬間の価値――古い建物が新築されたときにさかのぼって、それがどの様式で建てられたかということに重きを置くものの見方ですね。

建物の保存の歴史を俯瞰してみると、中世は再利用的な建築観が主流で、近世は再開発的な建築観がみられました。もちろん単なる修理や修繕もありましたが、それだけでなく、古いものに手を加えて更新し、時間を前に進める行為が営まれていたのです。

しかし19世紀になってから、文化財的な建築観とでもいうべき、時間を巻き戻す「修復」と、建築の時間を止める「保存」という手法が登場します。ヴィオレ＝ル＝デュクというフランスの建築家が、なかば廃墟と化していた数々のゴシック建築の当初復原を手がけ、時を巻き戻すかのような文化財的価値を重んじる見方が広まったのですね。一方、同時代のイギリスでは、美術評論家ジョン・ラスキンが建物の栄光は経年（Age）に存在すると断言して、廃墟の美学を唱えていました。

つまり、リーグルが「歴史的価値」と「経年価値」という概念を示したことにはそのような背景があったわけです。

――その経年価値の考え方は、なかなか日本の建築では理解されていませんね。

加藤　その背景には、西洋の石造りの文化と、日本の木の文化の違いがあると思っています。石造りの廃墟と異なり、湿度の高い日本で木の建築を放っておくと朽ちてしまいます。たとえば塗装をきちんとやり直さないと、水や虫害から建物を守れません。

日本でも近代以前の修理において時間を巻き戻す当初復原の手法は一般的ではなかったそうですが、近代の日本における修理はヨーロッパの修復の影響を受けました。日本で歴史的建造物に対する近代的な修理工事が始まったきっかけは、１８９７（明治30）年に制定された「古社寺保存法」ですよね。その成立には日本独特の木造文化という背景もあり、

ケーススタディ①

花重リノベーション

老舗花屋のリノベーション。8棟あった既存建物を4棟に整理し改修。花屋の裏にカフェを加え、その隣に鉄骨フレームを組み上げ外部テラスを設けた。

photo by Fujitsuka Mitsumasa

photo by Yamauchi Hideki

「経年価値」ではなく「歴史的価値」の方向に進まざるをえなかったのではないでしょうか。結果として、日本の歴史的建造物に対する考えが「当初復原」に寄ってしまったという気がしています。

しかし「経年価値」を無視した「歴史的価値」への偏重は、極端なオリジナル重視をもたらしてきました。部分的に残った当初材料にまで「歴史的価値」が適用されがちです。しかし素材の「経年価値」に目を向けると、建物に積み重ねられてきた時間の可能性がみえてくるように思います。

直して残すもの取り去るもの 新しく加えるものを吟味する

――実際に古い建物を改修する場に直面したときに、新しい材料を付け加えることもあるでしょうから、その扱いに頭を悩ますと思います。新旧を対比的に扱うのか、グラデーショナルになじませるのか。

加藤　少し前までは新旧を明確に対比させることが多かったように思います。その背景にも文化財の存在があり、1964年に制定されて、国際的な文化財保存の基本的ルールとして知られる「ヴェニス憲章」の影響がありました。古いものは古く、新しいものは新しく見せて差異をつけ、後世に付け加えたものをわかりやすく示す、という考え方ですね。

言い換えれば、新しいにもかかわらず古く見せることが虚偽であると示唆されているようにもとらえることができます。ただ、今、建築家はそこからも自由になっているのではないでしょうか。

今、お話をしている「花重（はなじゅう）リノベーション（14〜21ページ）」もその好例ですね。直して残すものと取り去るもの、そして新しく加えるものが横溢しながら刺激しあい、響きあっている印象です。

――「花重」は1870（明治3）年に東京・谷中で創業した老舗の花屋で登録有形文化財になりました。建物は事業拡大や時代の変化に応じて増築を重ね、江戸長屋、明治棟、つなぎ棟、戦前棟などそれぞれの建物が並び立ち、まさに時の積み重ねを体現した複合体です。

今回さらにカフェを併設して、街に開く場所としてリノベーションされました。古い建物に新設の鉄骨フレームを付加してテラスと階段を組み上げています。

加藤　鉄骨フレームが溶接ではなく木造の仕口・継手のように組まれているのが構築方法的にもユニークですし、将来的な変化を許容しやすいのも印象深いですね。もし将来、本当に組み替えられたら、再利用された古い木材のようにホゾ穴があいた鉄骨フレームもぜひ見たいです。

新旧の対比では、新しく加えたものが瞬間のデザインで終わってしまい、味気ない時の重ね方をしてしまうことが多々あります。しかしここでは鉄をクリア塗装にして、錆による味わいが時間の積み重ねを感じさせてくれる。今後、長い時間のなかで、新旧部分は同じように歳を重ねていくと思います。

建築の歴史は様式や形態に基づく「点」ではなく、長く持続する時間を内包する「線」で書き換えられる可能性があります。リノベーションの場面でも、過去から現在までが「線」でも、最先端が「点」で

22~29 pages

ケーススタディ②

郭巨山会所

開発が進む京都の中心地、四条通沿いに残る祇園祭のための会所の増改築。既存の母屋を鉄骨で補強しつつ、蔵とのあいだに屋根をわたして増床した。

photo by Kawabe Akinobu

は意味をなさない。「花重」には、未来に延びていく線を見ているような印象を受けました。

新しくつくるところも一緒に大切にされるように

——新旧の材料の使い分けは「郭巨山（かっきょやま）会所（22～29ページ）」でも特徴的です。京都の祇園祭で巡行する築100年ほどの山鉾を保存・運営するための会所を増改築したものですが、鉄と本来の架構である木を独特の発想で使い分けています。構造補強のために使う鉄骨の寸法を既存の木材に合わせることもあれば、寸法は違えど木材によって構造補強をすることもある。材質や寸法などをすべて既存に合わせるわけではなく、各所の特性に合わせて部分的に既存に合わせようという発想です。

加藤　町家の中が仄暗いこともあり、材寸が同じだと鉄と木の柱の区別が見た目にはつかないですよね。独立した柱も鉄という大胆な使い方をされています。素材は変えてもスケールで操作するというのは、興味深い手法であると思いました。

——また未来に延びていく線としても好例で、なんと計画段階でこれからつくる予定の増築部分も含めてその歴史的文化的価値を認めてもらっている。保存建築物としての指定を受けることで、建築基準法適用除外として、地震・火災に対する法同等以上の安全性を確保する計画を、建築審査会に通したとのことでした。

自分が付け加えた部分も大切なものだと、自ら未来に投げかける意気込みを感じました。

加藤　ヴェニス憲章を引き合いに新旧の材料を分けるという話をしましたが、そこにはオリジナルに戻しやすくするための「可逆性」という意図が込められています。古いものが本物で、新しいものはあくまで仮設、そして不要になったら壊してしまう、ということですね。しかしそのように加えられたものは、しょせん「点」でしかなく、未来において「線」とはなりえません。新しくつくるものも線として保存する、という発想を実現させるスキームは、今後のリノベーションを考えるうえで貴重なケーススタディとなるのではないかと思います。

時間の痕跡を見せていくデザイン

——建築が完成したときと現在の2点が重要なわけではなく、完成したときから現在に至るまでの経過を重要視するのが、建築を「線」としてとらえることなのだと思いますが、その経過を物理的にはどのように見せていけばよいでしょう。

加藤　時間の痕跡を見せやすい素材があると思うのですが、たとえば煉瓦造のような近代建築の時間デザインにも注目しています。木造とは異なり、多少穴があいていたり、削れていたりしていても、構造的に安定した状態を保ちやすいので、使われていた履歴、いわば時間の痕跡を残しやすいのではないでしょうか。

——「旧富岡製糸場西置繭所（30～37ページ）」が

ケーススタディ③

旧富岡製糸場
西置繭所
保存整備事業

国宝建築の保存改修。できるだけ既存をそのままに、1階に鉄とガラスによるボックスを挿入することで耐震補強とした。ボックス内部は新たな活動の場となる。

30~37 pages

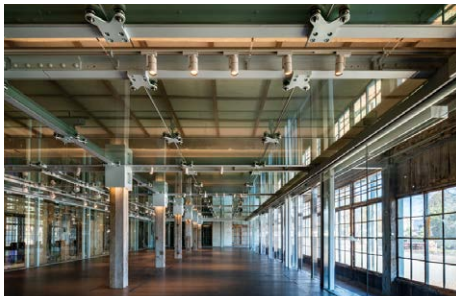


photo by Kuwata Mizuho

1872（明治5）年につくられた木骨煉瓦造の建物です。近代建築、しかも国宝のリノベーションという観点から、どのようにご覧になられましたか。

加藤　国宝であるにもかかわらず、鉄とガラスを多用して堂々と現代的なデザインをしたことに素朴に驚かされました。また当初復原をせずに、使われていた履歴を重視して残していますね。落書きや貼り紙の類いはもちろん、天井の漆喰が剝落した跡も塗り直さずに、観光客のために網まで張っています。近代建築のリノベーションの、これからの手法のひとつになると感じました。

――工場としては器となる建築だけでなく、そこで行われた近代黎明期から続く人々の労働を見せたいでしょうから、人の営みの跡を残すことにも説得力がありますね。文化財でも当初復原をしないことが魅力的な建築を生むこともあるという一例になりそうです。

「建築家の名作」においても オリジナルの呪縛あり

加藤　文化財とは異なりますが、近代の建築家が手がけた著名な建物のリノベーションも、「オリジナルを尊ぶ」という文化財的な発想が根強い傾向があるように思います。

――「佳水園 ウェスティン都ホテル京都（38～45ページ）」は、1959（昭和34）年に建築家・村野藤吾が設計した数寄屋風ホテルで、代表作のひとつといわれています。内装は傷みもあり、村野藤吾のボキャブラリーを参照しながらも全面的に刷新しています。建築家は悩まれたでしょうね。

加藤　相当、腐心したのではないでしょうか。ただ滞在者や運営サイドなど、この建築を使う人たちにとって喜ばしい結果をもたらしているのなら、オリジナルの呪縛にとらわれなくてもよいのではないかと思います。

――佳水園では、庭園を近代造園の先覚者として知られる七代目・小川治兵衛の長男である白楊が手がけ、村野も庭を参照しながら設計したと思われます。庭があり、数寄屋がつくられ、さらにそれを現代の建築家がリノベーションする。上の句を受けて下の句が詠まれる連歌のような関係性も、時間の積み重なり方として興味深いものがあります。

加藤　そうですね。私自身は最近、こうした内装を肯定的にとらえています。時間の積み重ね方を考えるうえで、「ラグジュアリー」という概念を掘り下げたいと思っているからです。単にお金をかけた意匠ということではなく、その建築を使っている人に素材なり手触りなり、心に響くものを生み出すことがラグジュアリーと呼べるのではないか。それがあれば一般の人にも愛される建築になると思います。

モダニズムはラグジュアリーなものを装飾的にも経済的にも批判して、ローコストでありながら質のよい建築を目指すべく、抽象的な空間設計に舵を切りました。はたしてそれだけでよいのか。その価値観のなかでは、時を積み重ねてきたものの魅力をとらえきれないのではないか。使う人たちが喜びをもって、時の積み重ねに接近するときに抱く感性があるとすれば、それも「ラグジュアリー」と呼びうる

38～45 pages

ケーススタディ④

佳水園 ウェスティン都ホテル京都

村野藤吾の名作・佳水園を、中村拓志さんが客室監修をつとめ内装を全面的に改修。2室を1室にまとめ、現代のホテル需要に適したスイートに再生した。

photo by Sobajima Toshihiro

のではないかと考えています。

古い建物を生かすのに理論などいらないことも

加藤　素材について考えるとき、「マテリアリティ」という言葉に注目しています。これは人文系では、単に物質だけのことではなく、物と人の関係性を含んだような意味ももっています。そう考えると、時間を積み重ねるというテーマを、人が使ってきた痕跡も物質に刻まれていく、という観点で考えてみるのもおもしろそうです。

――その点でいえば、人の営みの痕跡を如実に生かしたのが「千鳥文化（46～53ページ）」で、痕跡だらけの築60年ほどの住宅をリノベーションしたものです。これまでは文化財的な建築の話でしたが、こうした町場の無名な建物を残すことについて、どのようにお考えですか。

加藤　この建築を歴史的価値や芸術的価値で説明できないこともないと思いますが、しかしそもそもそのような観点から語ること自体が違う、と思わせるような魅力にあふれていますよね。

せっかく残ってきたものを現代の建築家がこれほど楽しそうに生まれ変わらせることができるのは、時間を積み重ねたデザインとして、すごくいいなあ、と率直に思わされます。新築では出せない時間の魅力が随所に表れていて。残すという行為をとっても「保存」ではなく「継承」と呼ぶのがふさわしいのではないでしょうか。「保存」といってしまうと、このリノベーションの本質を損ねてしまうような気がします。

――土壁の竹小舞が謎のボードで補強されていたり、さらに新聞紙で継ぎ接ぎされていたりするなど、混沌とした時間の積み重ねの痕跡に建築家も好意をもっていると思います。外観にはほとんど手を触れず、モルタルの端が欠けていたり室外機に巻き付いた枯れた蔦もそのままに。物と人が絡みあってきた関係性を楽しんでいるという印象を受けました。

加藤　ただ一方で、「千鳥文化」に見られるような営みの痕跡は魅力的ですが、そうした魅力ある痕跡がすべてとは限りません。人の気持ちをとらえる手がかりを見出しにくい建物を手がけるときには、どのような手法がとれるか考えさせられます。

――「スキマ 大阪（54～61ページ）」は、取り壊しを免れた築60年ほどの木造平屋を靴のショップに活用したケースです。平屋のスケルトンはなんとなくいい感じではありますが、構造用合板で割とぶっきらぼうに補強されていたようです。その既存の状態に手を加えずにレイヤーを足していく「加装」という手法がとられています。

加藤　もとの状態がなんであれ、それを受け入れる姿勢ですね。

――建築家自身のデザインとしては白い棚を取り付けていますが、そこには時間をかけて硬化する塗料を使っていて、ゆっくり垂れる塗料が「つらら」のような状態になり、時が止まったかのようです。

加藤　現代アートのような操作ですね。人の営みの痕跡とは、また異なる時間のデザインがなされているように思います。

46～53 pages

ケーススタディ⑤

千鳥文化

築60年ほどの旧千鳥文化住宅を、アートや地域交流の場として再生した。地元の船大工による増改築の痕跡を引き継ぎ、部材ごとに合わせた補強や改修が行われた。

photo by Sobajima Toshihiro

古いところも あなたのデザイン

——既存部は、建築家個人というよりも、時の経過のなかでさまざまな人や状況、時には偶然が生み出してきたものの集積だと思います。改修を手がける建築家は、その既存部の魅力をどこまで引き受けるべきでしょうか。

加藤　ぜひ「自分がやりたかったから残した」と堂々と言ってほしい気もしますね。文化財だからアンタッチャブルなものとして残した、という説明で思考停止してしまったら、建築はおもしろくなりません。残すにせよ壊すにせよ、自分のデザインとして責任をもってやったとポジティブな姿勢を期待したいところです。

——文化財の場合には建築史研究が背後にあるなど、残すべきものに一定の理屈を見出しやすいと思いますが、アノニマスな建築の場合には、渾然一体としたものを選り分けて残すか残さないかを判断するのは難しいですね。

加藤　それこそが今の時代における建築家の重要な役割だと思っています。たとえば増築を重ねて建て込んでいくような古い木造では、地場の大工が注文に応じて建て増しをしていったわけですよね。その時間や素材、構造のもつれを解きほぐして新たな魅力を創出するのは、建築家でないとできないことだと思っています。

もちろん場合によっては歴史的建造物に造詣の深い専門家のサポートを入れて、手がかりを得るという方法もあるでしょう。ただオリジナルだから、あるいは歴史的価値が認められているから、という理由で無条件に残すのではなく、あくまで建築家がおもしろいと判断して残すか残さないかを決めてほしいと思います。

新しい部分に責任をもつのは当然として、古いところも自分ごととしてコントロールできるととらえることで、時を積み重ねたからこそ醸し出される、豊かな表現を得られるのではないでしょうか。

Kato Koichi

加藤 耕一

かとう・こういち／1973年生まれ。95年東京大学工学部建築学科卒業。2001年同大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。東京理科大学助手、近畿大学講師を経て、11年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授。18年より教授。おもな著書＝『近代建築理論全史1673-1968』（監訳、丸善出版）、『時がつくる建築——リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会）、『リノベーションからみる西洋建築史』（共著、彰国社）など。

54~61 pages

ケーススタディ⑥

スキマ 大阪

木造平屋を改修した革ブランドの店舗。既存建物とはあえて無関係に白い什器を重ねることで、背景化した既存の魅力を引き出し、新たな価値を生み出すデザイン。

photo by Yamauchi Norihito

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❶

作品　花重リノベーション　　設計　高野洋平＋森田祥子

木の履歴を鉄で継ぐ

創業明治3年、老舗の花屋「花重」のリニューアル。
設計を担った高野洋平さんと森田祥子さんは、木造の履歴を残しながらも、
そこに現代の技術で組まれた鉄骨フレームを継ぐことで、
未来にわたって使いつづけられる保存のかたちを目指した。

取材・文／杉前政樹　写真／藤塚光政

老舗の花屋の裏側に延長したカフェの屋外テラス。無垢鋼材で格子状に組まれた鉄骨フレームに不定型なスラブがのる。

Special Feature
As Time Passes
Case Study

01

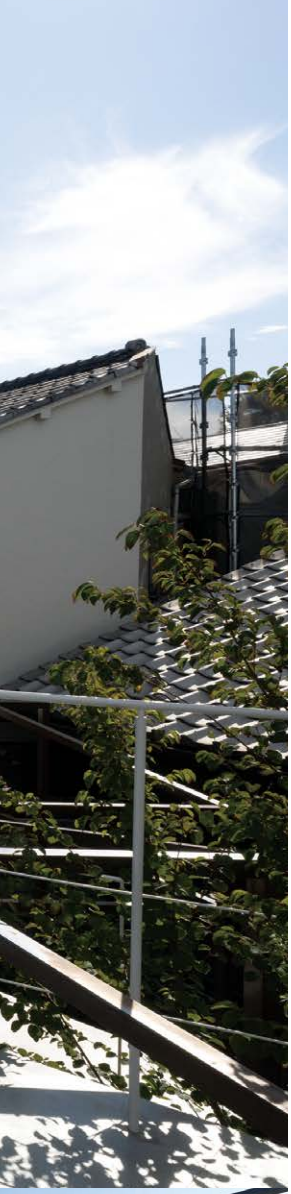
06 02
05 03
04

Hanaju Renovation

文化財の花屋を保存し、同時にカフェとテラスをつくる。建物の調査から、度重なる改築の履歴が明らかに。

ＪＲ山手線日暮里（にっぽり）駅の南口改札を出て、ひっそりとした細い小径を抜けると、都立谷中霊園が広がる。周囲に高い建物はなく、都心とは思えないほどのんびりした道を進んだ先に、古い家屋が立ち並ぶ一角が現れる。この一帯は谷中の「いろは茶屋」と呼ばれ、江戸時代に「富くじ」でにぎわった天王寺への参拝客を目当てにした茶屋町であった。東京空襲で焼け残った重厚な建物のなかでも、ひときわ目立つ「花重（はなじゅう）」は創業１８７０（明治３）年。初代の関江重三郎が創業した老舗の花屋である。

その建物の左脇、紫色に染められた暖簾をくぐると、納屋のようなスペースに、とつぜん現代的なカフェのテイクアウト窓口が現れ、旗竿状の裏庭が奥へと広がっている。庭には既存建物から突き出すかのように、茶色い鉄骨フレームが家型に組まれており、改修前の裏庭スペースには古い木造家屋が立っていたというから、屋根や壁面を取り払って柱梁の軸組みだけを残した「建物の残影」のように見えなくもない。だが２階の現代的なテラスの床面は鉄骨フレームから斜めに大胆にはみ出し、白い階段で既存建物と庭をつないで自由に回遊できる。ここでは木造家屋のほっこりした昭和感と、令和のカフェの居心地のよさがごく自然に共存している。



撮影／山内秀鬼

↑鉄骨フレームは日除けのための布タープを引っ掛けるための拠り所にもなる。

写真上／右が花屋（明治棟）で、左の暖簾をくぐると裏手にカフェと庭。中／元作業場（江戸長屋）を一部解体、架構を現しカフェへと続く路地の入口とした。下／江戸長屋から花屋を見る。左のカウンターからカフェのテイクアウトも可能。

何を壊して何を残すか

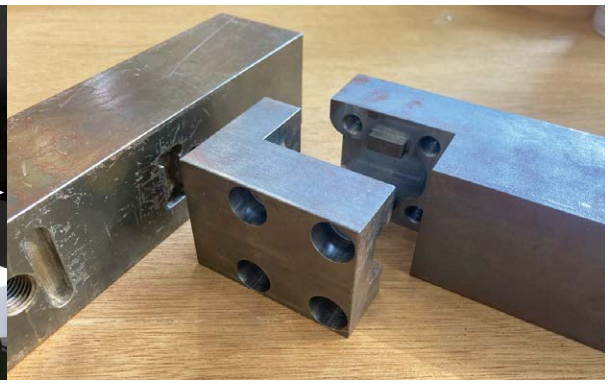
三代目の故関江重三郎氏はフローリスト養成学校を設立するなど、生花業界を牽引してきた重鎮であり、昭和期の花重は多くの従業員を抱えて多忙をきわめた。だが２００８年に三代目が亡くなり、四代目を継いだ中瀬いくよさんは２０２０年６月、経営難から店を閉じることを決めた。

その話を聞きつけたのが、上野桜木を中心に不動産事業を展開している山陽エージェンシー。地域への貢献ができるのならばと、土地建物から事業会社まで花重をまるごと買い取って新オーナーとなり、中瀬さんは従業員となって店を切り盛りするかたちで、事業再生をスタートした。

まずは既存建物の調査。ＮＰＯ法人の「たいとう歴史都市研究会」に依頼したところ、すでに登録有形文化財となっている花屋店舗のスペースは１８７７（明治10）年の築

Hanaju Renovation

提供／MARU。architecture



↑屋外テラスとカフェ（戦前棟）。戦前棟の木造の柱梁を延長するように組まれた鉄骨フレームと、そこに取り付くテラスや階段。

←写真左／60㎜角の無垢鋼材で組まれた鉄骨フレームの接合部。右／柱、梁受、梁に分解でき、将来的には解体や再構築も可能。

で、左隣の作業場兼倉庫のほうがさらに古く、江戸時代の長屋の架構であると判明。その奥に大正末期から昭和初期頃に建てられた戦前棟があり、一番奥の昭和30年代の住居棟と社員寮が最もひどい状態で放置されていた。

このリニューアル工事の設計を手がけたのが、高野洋平さんと森田祥子さんが共同主宰する「MARU。architecture」。

「われわれの事務所がちょうど新オーナーの会社と東京藝術大学のあいだにありまして、古い作業所をリノベーションして、道路から内部が見える開放的な造りなので、こんな感じがいいんだよ、とお声がかかったようです」と高野さんは言う。オーナーからの要望は主にふたつ。明治に建った店舗棟を地域の文化財として守ること。そして地域住民が集えるカフェとテラスをつくること。オーナーとしては、明治棟が保存できれば後はすべて壊してもかまわないという立場だが、歴史都市研究会としては、なるべく壊さずに保存したい。何を壊して何を残すべきか――三者での議論が続いた。

森田さんが振り返る。

「建物調査がとてもおもしろくて、とくに戦前棟の間取りの変遷を四代目に聞くと、戦後の住宅難の時代に親類が入れ替わり住んだので、階段の位置や間取りが何度も変わって、柱のホゾ穴にその都度の改築の痕跡が残っているんですよ。こうした木造家屋のフレキシブルな連続性を、その履歴も含めて〝動的に〟保存するのがおもしろいのではないかと思いました」

そこで戦前棟を残すことにして、ホゾ穴のある柱梁の構造体を露出させた2層吹抜けのイートインスペースに。さらにはその

写真右／リニューアルした花屋（明治棟）。カウンターテーブルは新しくデザイン・製作された。下／明治棟と戦前棟に挟まれたつなぎ棟。現在は花屋の作業場として使用。左／大谷石で囲われた地下倉庫。天井はガラスに変更された。

Hanaju Renovation

柱梁より細い鉄骨フレームを組んで、半屋外のボリューム空間を架構した。冒頭で触れたように、「建物の残影」にも見えるのだが、壊された住居棟や社員寮の輪郭を象っているわけではなく、むしろ空間が外へと新たに拡張していくイメージである。

「ヨーロッパの建築のリノベーションでは、古いオリジナル材と新たな建材がはっきりと別物になりますが、木造の場合は場所を変えて古材を転用したり、朽ちた部分だけ根継ぎしたりと、部材が常に動きつづけている感覚があります。花重の場合も、単に150年前の状態に戻して凍結させるのではなく、時間を止めないことが大切。いつでも〝使い方を変えられる〟状態にしておくことが、建物を履歴ごと保存することになると考えたのです」と森田さんは言う。

無垢鋼材を使った組み替え可能なフレーム

鉄骨でフレームを組むにあたって、単管パイプのような仮設的なものを避けつつも、組み替え可能な接合にできないか。この難しい課題を抱えて、東京藝術大学の金田充弘教授に構造設計を相談したところ、60㎜角の無垢の鋼材を使ったまったく新しい工法が採用された。接合部は溶接ではなく、柱にホゾ穴を切削して梁受けを挿し、ボルトを締めて柱梁を接合する乾式工法。つまり、将来的な用途変更の際には脱着可能なのである。誤差0.1㎜という高精度の機械加工技術を使って、まるで伝統木造建築の継手のように部材を削り出し、鉄骨はクリア防錆塗装のみとした。時間経過によって錆びてゆくことは織り込み済みであったが、想定以上に錆びるスピードが速く、部分的にタッチアップをして、最近になってようやく落ち着いてきたという。

「鉄を白く塗って抽象的にするのではなくて、錆びた素材感が古い木造軸組みの延長となることで〝背景化〟する。背景はあくまで垂直水平のグリッドにすることで、そこに新しい要素が自由な幾何学造形で入っていけるように考えたのです。蔦が這い、木が育ち、鳥が集まってくることで、少しずつ隙間が埋められていく。常に隙間で何かが動いている状態が目標ですね」と高野さんは言う。

まだオープンから半年ほどだが、日差しを和らげる布タープを掛けるといった改良が加えられており、使い手側の自由なアイデアで、プランターやハンモックを吊るしたり、2階のテラス席が人気のため、テラスを拡張する計画もすでに検討が始まっているという。

シンプルな原理は時代を超えて残る

今回のリノベーションにおいて、鉄骨フレームはあくまで「工作物」扱いとなるため、このフレームに屋根や壁をつけて建築空間を増築することはできないが、日本人が見慣れた細いプロポーションの鉄骨フレームは、大きな可能性を秘めているように感じた。

「中空のパイプではなくて、無垢であることが重要なんですよ。解体して運ぶこともできますし、ホゾ穴の位置を変更しても部材をそのまま使えて、履歴が残ります。遠い将来この建物が解体されるときに、〝この仕口は令和時代の高度な精密加工技術を今に伝える遺構です〟というふうに言われるのかもしれませんね」

大切なのは、その時代に即した「大きな原理」を組み込んでおくことだと高野さんは言う。木造仕口のようにシンプルな原理は、時代を超えて残る。そこに現代の精緻な金属加工技術を用いることで、鉄骨造を木造のように扱う建築表現の新たな可能性が広がっている。

使いつづけることで価値を生み出す動的保存へ

「文化財的な古い家屋を個人で維持しつづけることの息苦しさから、少しでも解放することができれば」と森田さん。個人に大きな負担を強いる静的保存から、使いつづけることで価値を生み出す動的保存へ。谷中の古い街並みに現れた「鉄で木を継ぐ」テラスは、まだ日本に数多く残る木造家屋の未来像に、ひとつの大きな技術的選択肢を与えたといえるであろう。

カフェ（戦前棟）２階から屋外テラスを見る。戦前棟から屋外へフレームが連続していく。

Special Feature
As Time Passes
Case Study

01

06 02
05 03
04

Hanaju Renovation

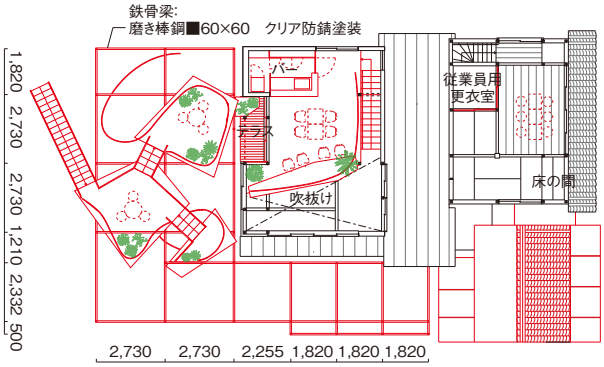
木造建築のように
組み替えられる鉄骨フレーム。
いつでも使い方を変えられる状態が、
建物を履歴ごと保存することにつながる。

カフェ（戦前棟）１階。度重なる改修の履歴が刻まれた柱梁を現し、カフェへとリニューアルした。

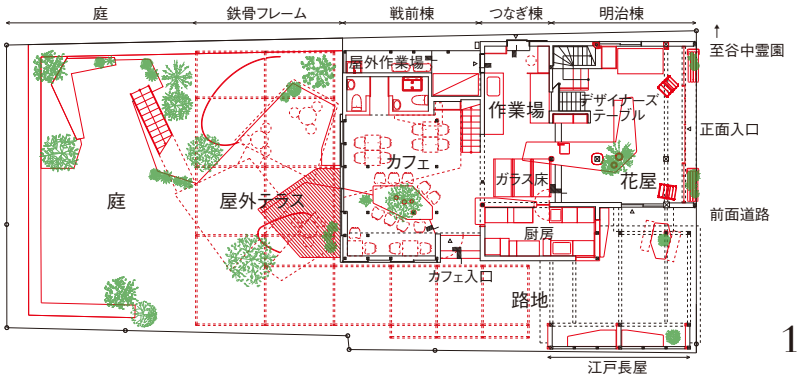
平面図

0 2 4m
1/200

赤線：改修箇所



2F

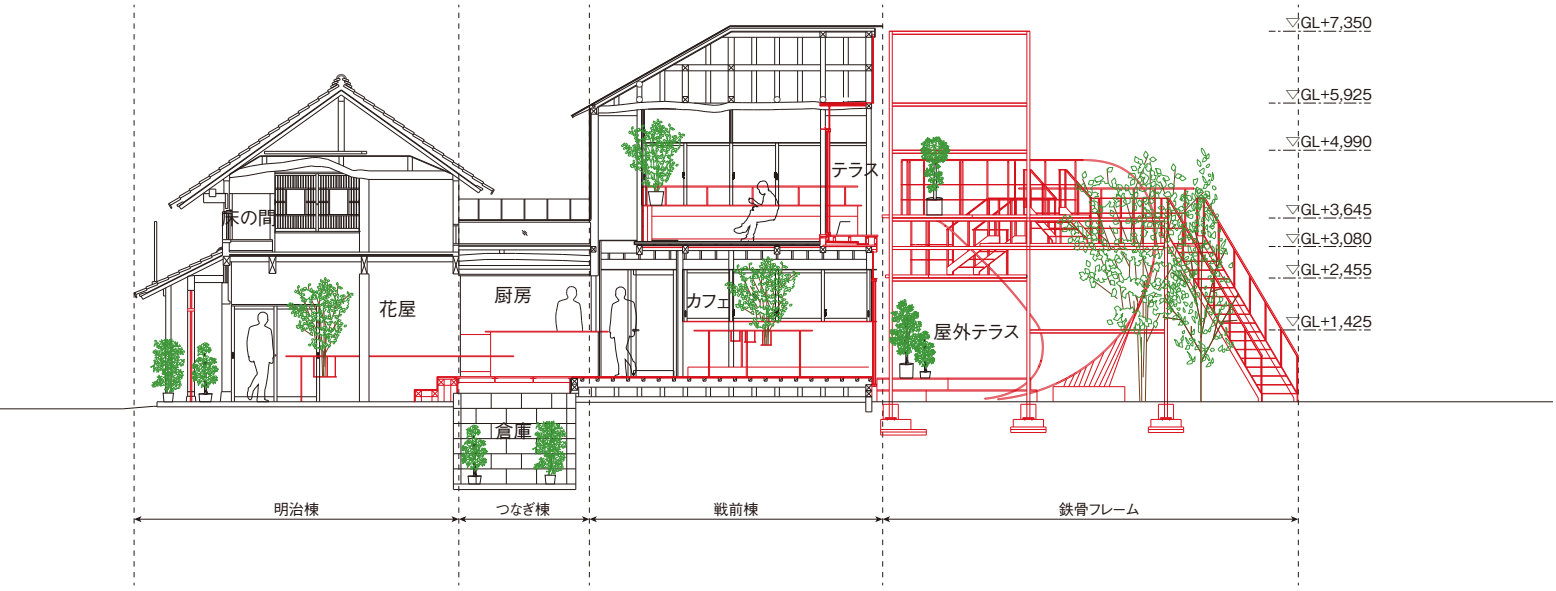


1F

断面図

0 1 2m
1/150

赤線：改修箇所



庭から屋外テラスを見る。

花重リノベーション

建築概要	
所在地	東京都台東区
主要用途	花屋、カフェ
設計	MARU。architecture
構造設計	川端建築計画（既存部）、テクトニカ（新設部）、東京藝術大学（新設部）
施工	ヤマムラ（既存部）、雄建工業（新設部鉄骨）、紀陽工作所（新設部機械加工）、ビーファクトリー（新設部テラス、階段、手すり）
階数	地下1階、地上2階
敷地面積	329.58㎡
建築面積	134.97㎡
延床面積	193.11㎡
設計期間	2020年11月〜2021年12月
工事期間	2022年4月〜2023年5月
おもな外部仕上げ	
屋根	瓦、ガルバリウム鋼板
壁	下見板張り、左官（あじま漆喰）、ガルバリウム鋼板
開口部	木製建具（製作）
外構	コンクリート洗い出し舗装、土系舗装
鉄骨フレーム	磨き棒鋼 クリア防錆塗装（柱・梁）、ZAM鋼板ZC処理 防滑性塗料（床プレート）
おもな内部仕上げ	
明治棟1階	
床	樹脂モルタル
壁	荒壁パネル両面張り 漆喰塗り
天井	既存材 古色塗り
明治棟2階	
床	畳敷き、転用古材板張り
壁	PB 漆喰塗り、スギ板 古色塗り
天井	既存材 古色塗り
つなぎ棟・戦前棟1階	
床	樹脂モルタル
壁	PB 漆喰塗り、PB EP塗装
天井	ラワン合板 OS塗装、既存梁 古色塗り
戦前棟2階	
床	ラワン合板 OS塗装
壁	PB 漆喰塗り
天井	ラワン合板 OS塗装、既存梁 古色塗り

MARU。architectureのおもな作品=「土佐市複合文化施設」（2019）、「松原市民松原図書館」（19）、「生態系と共に生きる家」（21）。

高野洋平 Takano Yohei

たかの・ようへい／1979年愛知県生まれ。2003年千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻修了。03年佐藤総合計画。13年MARU。architecture共同主宰。16年同大学院博士後期課程修了、博士（工学）。22年高知工科大学特任教授。

森田祥子 Morita Sachiko

もりた・さちこ／ 1982年茨城県生まれ。2008年早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻修了後、佐藤総合計画。10年NASCA。10年MARU。architecture設立、13年から共同主宰。

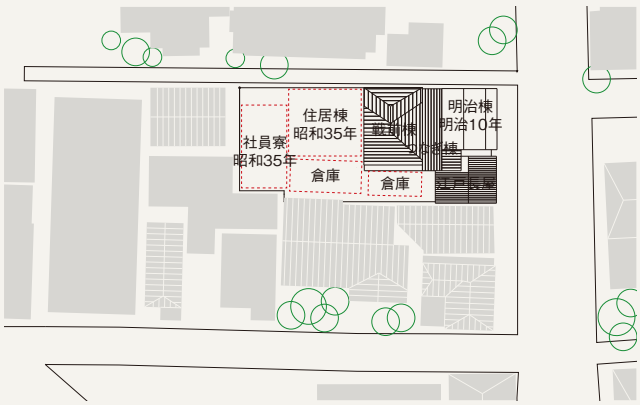
明治棟２階の和室。奥の六畳間には床の間がある。

before

改修前配置図

0 4 8m

1/800



2点ともに提供／MARU。architecture

工事中のつなぎ棟と地下倉庫。

改修前の花重。左が作業場として使われていた江戸長屋。

花重の動画をご覧いただけます Check! →

https://jp.toto.com/tototsushin

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❷

作品　郭巨山会所　　設計　魚谷繁礼

新しい部分も保存対象に

京都祇園祭で巡行する山鉾の拠点となる会所建築。
そのひとつである郭巨山会所は築後100年以上たち、手狭で不便な状況が長らく続いていた。
京都で数多くの町家を改修してきた魚谷繁礼さんは、
既存の会所を保存しながら増築を施し、法規上の困難もクリアしながら、
会所建築の伝統的な形式や意匠を継承するに至った。

取材・文／伊藤公文　写真／川辺明伸

Kakkyoyama Common Center for Gion Festival

東側外観。瓦屋根の母屋（右）と土蔵（左）を残し、あいだに新たな架構を構築した。増築部の屋根にはガルバリウム鋼板を採用。

京町家存亡の危機のなかで

京都市街地の町家が存亡の危機にあることはたびたび報じられている。

ここでいう京町家とは、1950（昭和25）年以前に建造の伝統的な構法による平入り屋根の木造で、通り庭、火袋（台所の上につくられた吹抜け）、通り庇など、京町家に特有の形態をひとつ以上有するものを指す。

2016年度の調査によると市内に残る京町家は7年間で5600軒ほど減って4万軒。そのうち空き家が14％強で、空き家の比率は加速度的な増加がみられた。

危機に面して保全、継承に向けた官民一体の対策が粘り強く続けられているが、何よりも効果的なのは利活用のよき実例にちがいない。その建築設計面での先導者のひとりが魚谷繁礼さんである。2006年、コンペで獲得した「京都型住宅モデル」をデビュー作とする魚谷さんはことさら改修を志向したわけではないが、町家の改修を次々に手がけ、市内だけでも100軒を超す。自他ともに許す町家改修のエキスパートである。

京町家を末永く継承するには街区や町割りのパターンにこそ視点をすえるべきで、伝統的な意匠にこだわりはないとする魚谷さんの手がけた改修事例は幅広く、その手法はまことに融通無碍、変幻自在で多彩をきわめる。

たとえば、床、壁を取り払いスケルトンにして新規にプランニングする、減築して坪庭、吹抜け、ベランダなどを新設する、平屋の住宅と二軒長屋を1軒にまとめる、大規模町家1軒を6室のシェアハウスにする、路地に面する11軒を外形はそのままにそれぞれ1棟貸しのひとまとまりの宿泊施設にする、築100年の長屋を残して上方に鉄骨を架け渡し中古のコンテナをのせて部屋とする、大正後期の数寄屋の料亭を11室の高級ホテルに蘇らせる。

四条通からの外観。左の小径が膏薬辻子。周囲には中高層建築が立ち並ぶ。

京都の市街地に立つ町家の改修となれば、さまざまな条例の遵守、近隣との調整、防火や耐震性能の確保、防音、遮音、腐朽した部材の取り換えほか、山のような厄介事を前にして誰もが尻込みしてしまいそうだ。だが魚谷さんは「すこぶる自由に設計が可能です。石造や煉瓦造に比べると木造は柱梁で構造が成立しているし、新しい材と交換が可能なのではるかに改修が容易です。寺社建築と同様、町家もそのようにして長いあいだ住み継がれてきたのです」と事もなげに言う。

既存不適格の建物のなかでも1950年の建築基準法制定前に建てられたものは、大規模な修繕や増築がない場合には、現状より改悪しない限り現行法への遡及がなされない。すなわち新築では法規上は建てられないような建築が改修では可能になる、ということである。増築など遡及がかかる場合は、歴史的文化的価値の認められる建築に対して基準法適用除外とできる制度の存在が大きい。この制度では、基準法の現行基準と同等以上の地震や火災に対する安全性が担保される。

そこからさらに一歩踏み出した事例が、ここで紹介する郭巨山（かっきょやま）会所である。

これからつくる部分も保存対象

7月に行われる祇園祭には34基の山鉾が巡行する。山または鉾を出す町それぞれには準備組織があり、会所と呼ばれる専用の施設が設けられているが、開発の波が押し寄せる中心市街地に会所を維持するのは難しく、今では多くが建て替えなどによりビルやマンションの一部に組み込まれている。

郭巨山会所は1864年に焼失し、その後に再建されたが、1907（明治40）年、前面の四条通が市電敷設のために拡幅された際、表の間と中の間が削られてしまった。それでも会所建築の伝統を残す希少な建築であるが、いかんせん祭礼時に山車をはなやかに飾り立てる懸装品（けんそうひん）を展示するのに十分なスペースを確保できない不便を長く強いられてきた。

そこで建て替えも視野に京都市景観・まちづくりセンターとも共同で、調査・検討が重ねられた結果、会所建築の伝統的な形式を継承するために既存をそのまま残しつつ増築するという方策をとることになった。既存は表の2階建ての母屋、奥の2階建ての土蔵、それら2棟をつなぐ塀で、塀の内

失われゆく会所建築を継承すべく、
安全性を満たしたうえで、
増築部分をあらかじめ保存建築物に。

１階土蔵から板間を見る。祭礼中には御神体や懸装品を陳列するお飾り場となる。

Kakkyoyama Common Center for Gion Festival

１階板間から土蔵を見る。構造補強には125㎜角の鉄骨柱が使用され、既存の木柱（105㎜角）と存在感を近づけた。

↑２階相の間から座敷を見る。欄間や座敷の格天井は会所建築の意匠を残すものとして保存された。

↓２階相の間から土蔵を見る。土壁の左官は保存会関係者らによって行われた。

↓２階相の間。既存土蔵の瓦屋根を一部取り込んだような内観。

側の幅４ｍ強、奥行き５・４ｍのスペースが増築の対象である。

会所の東側の膏薬辻子（こうやくのずし）はいわゆる二項道路（幅４ｍ未満の道路）で法規に則せば道路の中心線から２ｍの後退が必要とされる。それを回避しつつ既存建屋を残し、大規模な増築を成り立たせるために、建築基準法適用除外とし、増築部分を含む全体についてあらかじめ保存建築物の指定を受け、火災や地震に対する安全性を満たした計画としたうえで建築審査会に諮り、承認を得て実現に至っている。いまだ姿を現していない部分を含めて保存建築物に指定するというのは目から鱗のような「合法的な離れ業」である。

魚谷さんが考えた増築案のなかには長い柱の上に小屋をのせ、高みの見物のような情景を生む奇想もあったが、母屋の構造の補強とそれに要する費用などを考慮した結果、ふたつの棟のあいだに大屋根を架け、全体がひとまとまりの建築に見える案に落ち着いた。

木材と鉄材が溶けあう構造と空間

既存の母屋は桁行方向には十分な壁量があるものの、懸装品を展示するスペース確保の必要などから間口方向の壁量は決定的に不足していた。そこで間口方向に２層の鉄骨の柱と梁のフレームを設けて既存の柱に寄り添わせ、増築部の間口方向も同様に鉄骨の柱梁とし、桁行方向はどちらも木の梁として新旧の２棟を一体化している。

黒皮鉄に蜜ろうが塗布された鉄骨柱の寸

法は125㎜角のH型鋼で、百年の時を刻んだ105㎜角の既存の木の柱と容易に区別がつきがたい。鉄骨梁については、既存部の1階は現しとして鉄骨フレームを強調する一方、2階では天井裏に通して会所建築の特徴である格天井に触らないようにし、増築部では鉄骨梁の上に木の床をのせて異種の素材の衝突を避けている。

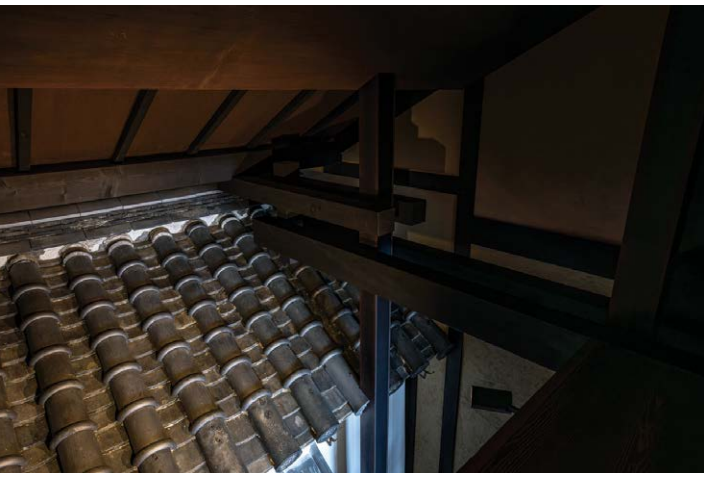
壁量の十分な土蔵と増築部は構造上の縁を切り、また土蔵の各部を傷めないように増築部の軒先を2段の桔木（はねぎ）で土蔵の上に差し掛け、床に段差を設けて土蔵の下屋庇にも当たらないように配慮している。

こうした周到な計画による全体構成は、部材を箇所別に木材と鉄材を使い分けるハイブリッドとは異なり、木構造を鉄材で補強した状態ともいえず、両方が溶けあうように共存する固有の姿になっている。

Kakkyoyama Common Center for Gion Festival

↓3階板間から土蔵を見下ろす。間口方向に組まれた鉄骨フレームを木造の梁で桁行方向に連結している。

↑2階座敷の鉄骨補強。既存の木造柱梁に沿わせるように鉄骨フレームを配置。



Special Feature
As Time Passes
Case Study
01 06 05 04 03 **02**
Kakkyoyama Common Center for Gion Festival

時を刻んだ木構造と新たに加えられた鉄骨造。両者が対比することなく融合し、全体として風格をまとう。

増築部の2階に上がると天井が高く、ロフトもあって、吸い込まれそうな闇が隅々に宿っている。どこもかしこも明るくて奥行き感に乏しい今の世の一般的な空間とは対極にある。そこから表通りの方向を望むと既存の母屋の屋根、小壁、柱、その先に二重菱の欄間、格天井、長押、縦格子が現れ、振り返って反対方向を望むと、鉄骨フレームに枠取られて土蔵の屋根、漆喰壁、開口とその庇がやはり既存のままに現れる。百年の時の流れが暗がりのなかに立ち現れる、穏やかだがシュールな情景だ。たたずめば屋内でありながら、外部にいるような不思議な感覚に襲われる。

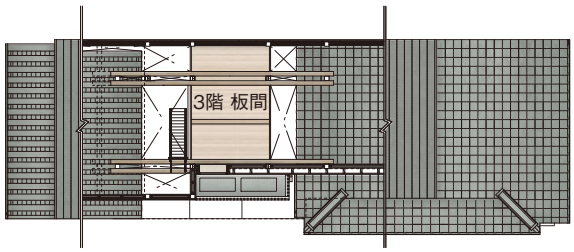
保存と開発の狭間

膏薬辻子は120m四方の街区の中央を南北に通り抜ける細街路で、両側には町家が多く残り、途中のクランク状の折れ曲がりも効果的で、市内でも有数の京町家の風情が残る道として知られる。その辻子の入口に位置する郭巨山会所は、向かいが駐車場となっていることもあって東側のファサード全体が一望できる。寄棟風の母屋、段差のある塀、切妻の土蔵、背後に控える大屋根、各所の庇と異種の形態と素材のパッチワーク。それらはそれぞれに存在を主張し、全体を統合するひとつのフレームに収まろうという気配はない。にもかかわらず全体は自然な姿で一片の違和感も覚えさせず、改修後1年余りですでに風格さえ漂わせている。おそらくそこには地層に比せられるような時の積み重ねによって形成された揺るぎない安定感があって、それが人々の心と共鳴するのだろう。あり余る経験を糧としつつ、常に前向きに改修案件と取り組む魚谷さんの姿勢が引き起こす共鳴にちがいない。

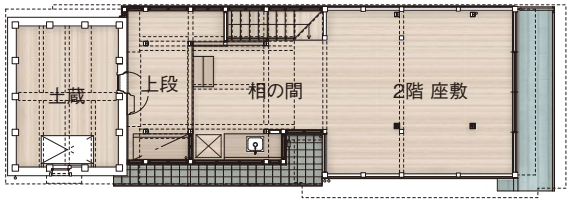
膏薬辻子の並びの町家は所有者が代わり、高級料理店、宿泊施設、物販店などへ用途が変わっても、風情はひとまず保たれていた。しかし近年、その一角が表通りに面する土地と合わせて再開発され、街並みが大きく崩れてしまった。保存と開発の狭間にあって激動を繰り返してきた京都の市街地で、それは今も少しも鎮まってはいないが、郭巨山会所の保存と継承に集約されたような熱意と知恵がある限り、荒波を乗り切った先には静穏で安定した水面が現れるのではないか。魚谷さんたちの活動に希望を託したい。

平面図

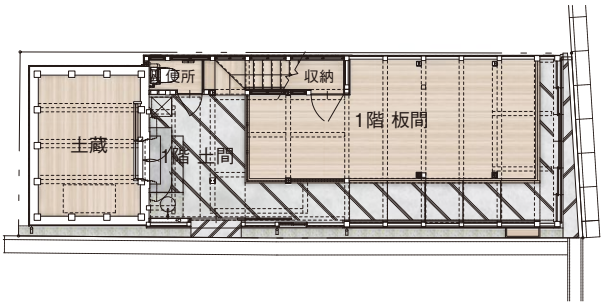
0 1 2m
1/200



3F



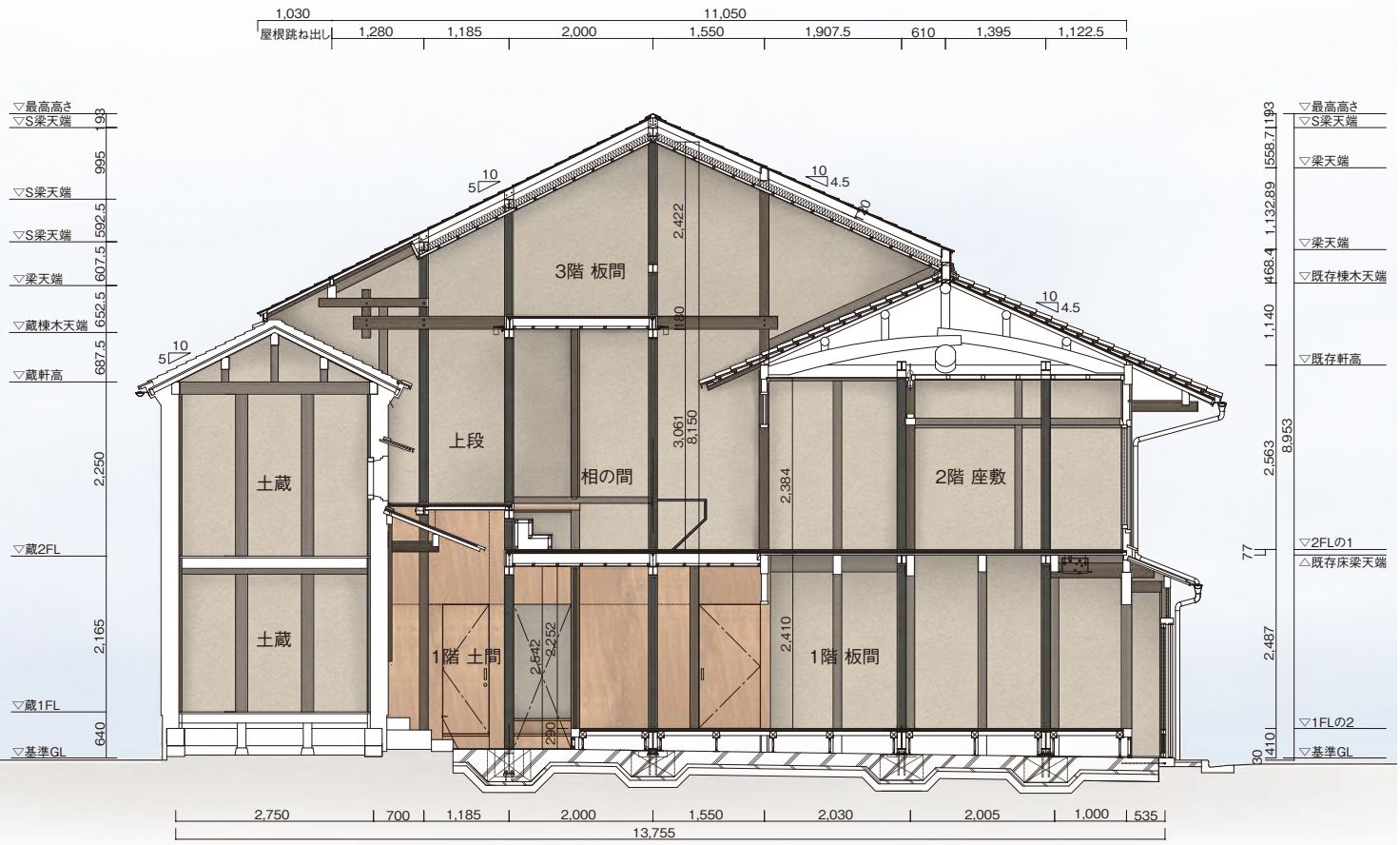
2F



1F

断面図

0 0.5 1m
1/100



四条通からの外観。

郭巨山会所

建築概要	
所在地	京都市下京区
主要用途	町会所
設計	魚谷繁礼建築研究所
構造設計	柳室純構造設計
施工	竹田工務店
階数	地上3階
敷地面積	58.42㎡
建築面積	58.06㎡
延床面積	119.02㎡
設計期間	2020年5月〜2021年9月
工事期間	2021年10月〜2022年6月
おもな外部仕上げ	
屋根	瓦葺き、カラーガルバリウム鋼板
	横段葺き
壁	既存土壁、既存漆喰、
	カラーガルバリウム鋼板張り、
	焼杉板張り
開口部	木製建具 着色塗装
外構	モルタル金ごて仕上げ、
	黒砕石敷き
おもな内部仕上げ	
1階板間	
床	スギ板張り
壁	既存土壁、土壁中塗仕上げ、
	漆喰仕上げ、
	ラワン合板張り 着色塗装
天井	既存天井現し、
	ラワン合板張り 着色塗装
1階土間	
床	モルタル金ごて仕上げ
壁	既存土壁、既存漆喰、
	土壁中塗仕上げ、漆喰仕上げ、
	ラワン合板張り 着色塗装
天井	ラワン合板張り 着色塗装、
	スギ板庇現し 着色塗装
2階座敷	
床	スギ板張り
壁	既存土壁、土壁中塗仕上げ
天井	既存天井現し、スギ板張り
2階相の間	
床	スギ板張り
壁	既存土壁、土壁中塗仕上げ
天井	ラワン合板張り 着色塗装

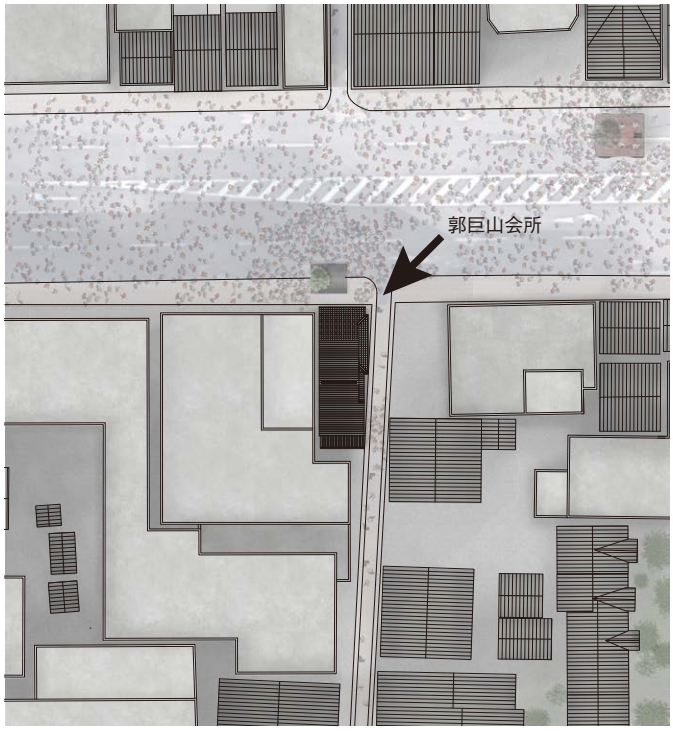
魚谷繁礼 Uoya Shigenori

うおや・しげのり／ 1977年生まれ。兵庫県出身。2003年京都大学大学院工学研究科修了。魚谷繁礼建築研究所代表。20年京都工芸繊維大学特任教授。おもな作品=「京都型住宅モデル」(07)、「防空壕跡のある宿」(17)、「コンテナ町家」(19)。

配置図

0 4 8m N

1/800

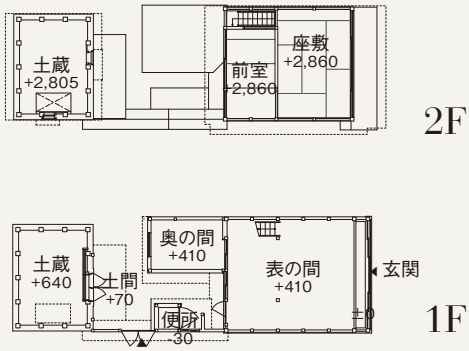


before

改修前平面図

0 2 4m N

1/300



提供／魚谷繁礼

改修前の外観。母屋と土蔵、それらをつなぐ塀からなる。

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❸

作品　旧富岡製糸場西置繭所保存整備事業

設計担当　齋賀英二郎／文化財建造物保存技術協会（当時）

国宝でも修復しきらない

世界文化遺産であり国宝でもある旧富岡製糸場西置繭所。
115年間の操業の歴史をもつこの建築には、増改築や使い込まれた痕跡が色濃く残されている。
そうした建築に刻まれた情報をできるだけ消さないよう、保存整備事業は慎重に進められた。
挿入されたガラスボックスは構造補強であると同時に、内側を新たな用途で利用でき、
かつ建物の履歴を鑑賞するためのスクリーンにもなる。

取材・文／橋本 純　写真／桑田瑞穂

Conservation Work of the West Cocoon Warehouse of Tomioka Silk Mill

１階ホール。建物の履歴を色濃く残す既存建物の内部空間を、ガラス越しに鑑賞することができる。

旧富岡製糸場は、1872年に官営の製糸場として操業を開始し、93年に民営化されたのち、1987年に閉鎖されるまでの115年間、製糸工場として稼働しつづけた産業施設である。操業停止後も所有者だった片倉工業は維持管理を続け、2005年に富岡市に寄贈、同年、国の史跡指定を受け、翌06年、史跡内の11の施設および遺構が国指定重要文化財となる。市は08年に富岡製糸場総合研究センターを設置して調査研究を開始、その成果が実り、14年に「富岡製糸場と絹産業遺跡群」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。同年、繰糸所、東置繭所、西置繭所の3棟が国宝の指定を受ける。12年、市は「史跡・重要文化財旧富岡製糸場整備活用計画」を作成。15年に西繭置所の保存整備工事に着手、20年に工事が完了する。同建物は22年度、国宝建造物としては初めて日本建築学会賞「作品賞」に選出され、当時、文化財建造物保存技術協会に在籍し、西置繭所の保存整備事業に携わった齋賀英二郎さん、斎藤英俊さん、木村勉さんの3名が「設計者」として受賞し、同時にその事業も業績賞を受賞している(*)。

国宝で世界文化遺産となった旧富岡製糸場は、法隆寺や姫路城などと並んで、日本の文化財建造物の「最高位」に名を連ねることとなった。しかし、保存整備工事を終えた西置繭所の内部では、漆喰の剝落や操業時の落書きがそのまま残され、構造補強の鉄骨を現しにしてそこに見学者用のガラスのボックスを挿入するという、「最高位」の文化財建造物としては類例のない改修、いや設計がなされた。こうしたことはかつてはいわば禁忌であった。本稿はその禁忌を端緒とした考察である。

西置繭所全景。1872年に建てられた木骨煉瓦造の国宝建築。全長が100m以上あり、製糸場における繭の保管倉庫として使われてきた。

時間の塊を解きほぐす

外貨獲得のための主力産業として位置づけられた近代製糸業の、品質向上と量産化に向けた技術発展には目覚ましいものがあった。旧富岡製糸場においては、たとえば繭乾燥に関する分野でそれが著しく、最初期の計画案にはなかった繭の乾燥工程が加わり、両置繭所のあいだに乾燥場が建設されて作業工程や動線などが変化し、それに合わせて置繭所における繭の収蔵場所や方法も変化した。その後も製糸技術の発展に伴う建物の改造は繰り返された。

一般的にはスクラップアンドビルドで対応しそうなところを、旧富岡製糸場では、更新されつづけていく内容に対して、建物を建て替えだけではなく増改築も行い対応していった。国宝指定を受けた最初期の3棟が象徴的な建造物として残されたわけではなく、その後に建設された簡素な乾燥場などの建物も、壊されることなく延々と改修されながら使いつづけられ、「そのままの状態」で残され、その一部が国宝に指定されたとみていい。

今回の西置繭所の保存整備工事は、「そのままの状態」、つまり操業停止時点の状態で保存されることになった。明治初期に竣工した建物ではあるが、目の前にあるのは操業を停止した1987年昭和末期の姿、115年間使いつづけた時間の塊であり、その状態のまま開示し、観光資源としても活用するための改修が施されたのである。

訪問者は、その折り重なった時間の塊の表面を、ガラスボックスに入り込んでタイムトリップを楽しむかのように眺めることができるようになった。一方で保存工事においては、その時間の塊の解体過程で各部分の来歴を精査し、その箇所にふさわしい納まりをひとつずつ考案し積み重ねていくという、気の遠くなるような作業がなされていた。たとえば西置繭所では、用途変更に伴って2度ほど床のかさ上げ改造が加えられていたが、その際に用いられた床材は厚さも樹種も異なり、その都度加工の痕跡も残されている。それらを一つひとつ丁寧に確認し、そこに積み重ねられた時間の意味を損なうことなく構造補強を施していく、といったことである。

つまり、齋賀さんたちの仕事は、西繭置所という時間の塊の解きほぐし、編み直すような作業、あたかも無数の繭から生糸を紡ぐような作業であったといえるだろう。その成果は、齋賀さんたちが富岡市の人たちとともに作成した、改修作業そのものを反映させた展示計画でみることができる。

実の時間と虚の時間

さて、使い込まれ、度重なる改造を経て残された工場群の「そのままの状態」の、どこに価値が見出されたのだろうか。

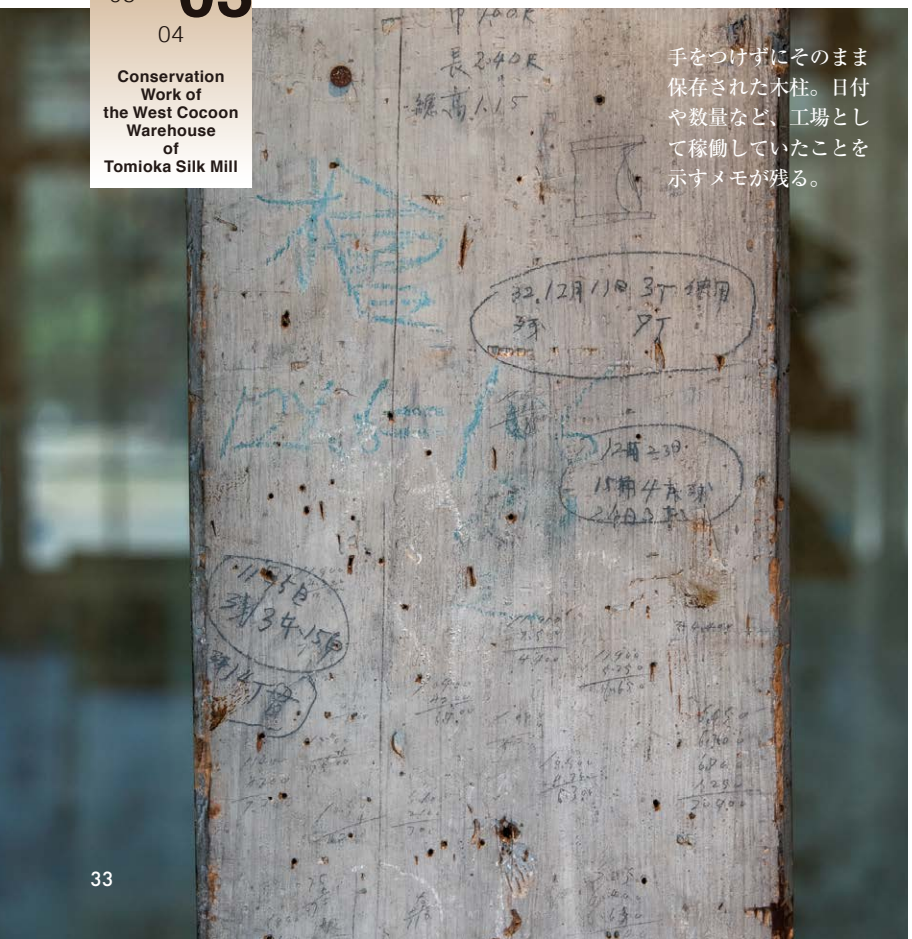
国宝建造物の一覧を見ると、大多数は変化を前提としない宗教施設である。それらについて建築史家が記した解説文を読むと、意匠・工法などの点でその時代の建築様式の特徴をよく示すものである、といった記述が多いことに気づく。つまりその時代の様式を代表する建築が選ばれているのである。そしてそれらは時間軸上に点々と並び、その点の集合と配列によって日本建築史が描かれていることがわかってくる。つまり国宝建造物とは、日本建築史という時間軸を強化するための構造であり、その表現媒体でもあったわけである。そこでは個々の建物に存在する固有の時間は捨象され、想像的復原を経て初源と仮定される状態で凍結された標本として扱われる。建物固有の時間を捨象・凍結し標本として配列することで描かれた時間。そこに見出されるのは、近代的な建築史観が生み出した虚の時間である。

しかし現実の建物はみな実の時間を生きている。日々の営みに対応するためにつくられてきた庶民住宅や生産施設、商業施設などでそれは顕著である。そこで時間を凍結すれば、それは誤読となる。

「近代の建築」とは、そうした住宅や工場をはじめとする人間の日々の活動に近接したものが大半である。そして近代とは、連綿と続いてきた市井の人びとの日常を最上位に定義した時代であり、それは民主的な

天井の漆喰塗りの剝落に対しては、落下防止ネットのみで対応。建物が積み重ねてきた履歴を可能な限り保存しようとする試み。

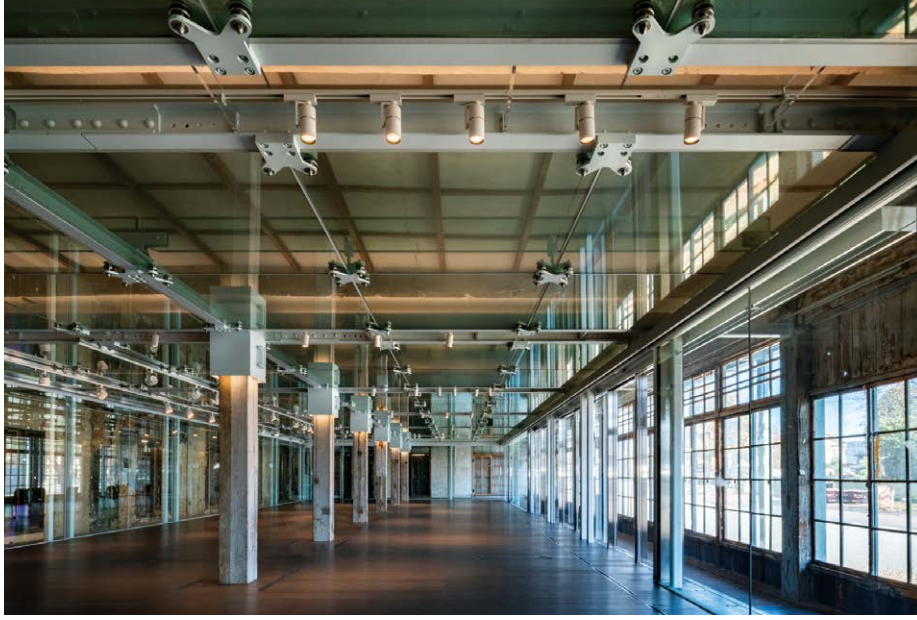
115年間の痕跡こそが遺産の価値ととらえ、これまでの姿のまま維持することを目指した。



手をつけずにそのまま保存された木柱。日付や数量など、工場として稼働していたことを示すメモが残る。

後からの改造で貼られた新聞紙が剝がれて、当初の漆喰壁が見えている。

痕跡を消さないよう
内側に設けられたガラスボックスは、建物を支えながら、
新たな活用や活動を可能にする。



↑1階の構造補強には鉄骨とガラスで組んだボックスを挿入。ガラスの内側は新たな用途（ホールやギャラリー）として活用している。

↓1階ギャラリー。製糸場が保管していた資料を中心にその歴史が展示される。展示計画やデザインもプロジェクトチームが主導した。

Conservation Work of the West Cocoon Warehouse of Tomioka Silk Mill

社会の構築と表裏一体であった。「近代の建築」とは、そうした社会を支えるために生まれたものであり、そこにおいて時間の凍結は意味をなさない。

したがって、今回の西繭置所の保存整備事業計画がこのようなかたちで実現した背景には、なんらかの史観の転換があったのではないかと感じている。それを前提とすれば、齋賀さんたちが施したさまざまな保存処置も、富岡製糸場の遠い未来において、過去の改修の一部として歴史に参加することを許されることになる。

しかし、ここでまた疑問が生ずる。近代の産物としての建築史観は、「建築」の、そして「近代の建築」の、本来の姿をなぜこれまで評価できなかったのか、という点である。

近代の建築
——オブジェクトから フィールドへ

近代黎明期の産業遺産への関心が高まると、世界文化遺産への登録が増えた。その特徴として関連して稼働した施設群が一体で指定されている例が多いことは注目に値する。そこには近代の遺産は活動と一体となった群で定義したほうがよいのではないかという見解がみえるからである。活動と一体となった群としての近代の遺産とはいかなるものか。旧富岡製糸場がそれを体現していた。旧富岡製糸場は、史跡指定を受けた敷地内に立つ建物すべてが関連しあいながら操業されてきて、その営みのすべてが文化財として指定されたからである。つまりこの敷地全体が「近代の建築」であっ

床下には新たに鉄骨梁を配置し、構造補強と緊結しながら、床下空調など新たに必要とされる設備類を収めた。

たのである。

「近代の建築」=Modern Architectureとは、本来は近代的な活動を支える構築物のことであり、それは近代的な社会理念に基づいて人びとが活動する場=フィールドであったということだ。

それは建物の形ではなく営みの場を指していた。時間の凍結された抽象的物体ではなく、動きつづける時間の連なりを包摂する場であり、近代以前の建築の定義とはまったく違うものであるがゆえに、近代は過去との概念的切断を必要とした。一部の近代の建築家たちの思考が、都市=フィールドへと向かったのは、それこそが「近代の建築」であると悟ったからである。そこでは、アーキテクチャーはフィールドのほうであり、個別の建物はそこでの人びとの自由で多様な活動を支援するアイテム群として位置づく。それこそが「近代の建築」の本質であり、それは無限に広がりうるフィールドとして構築されるべきものだった。

しかし目の前に実存する物体が建築と呼ばれることを否定するかのようなパラダイムシフトは容易に受け入れられるはずもない。近代とはそれほど強烈な社会概念の転換だったのであり、完全なる近代への移行は果たされることなく歴史上にみられるような妥協点を見出し、着地した。それが私たちの知る「近代建築」である。したがっていわゆる「近代建築」とは理念と実体の乖離した矛盾の上を当初から歩くことになった。その暴露と超克が、ここで見出されたことの本質、禁忌の正体であると私は考える。

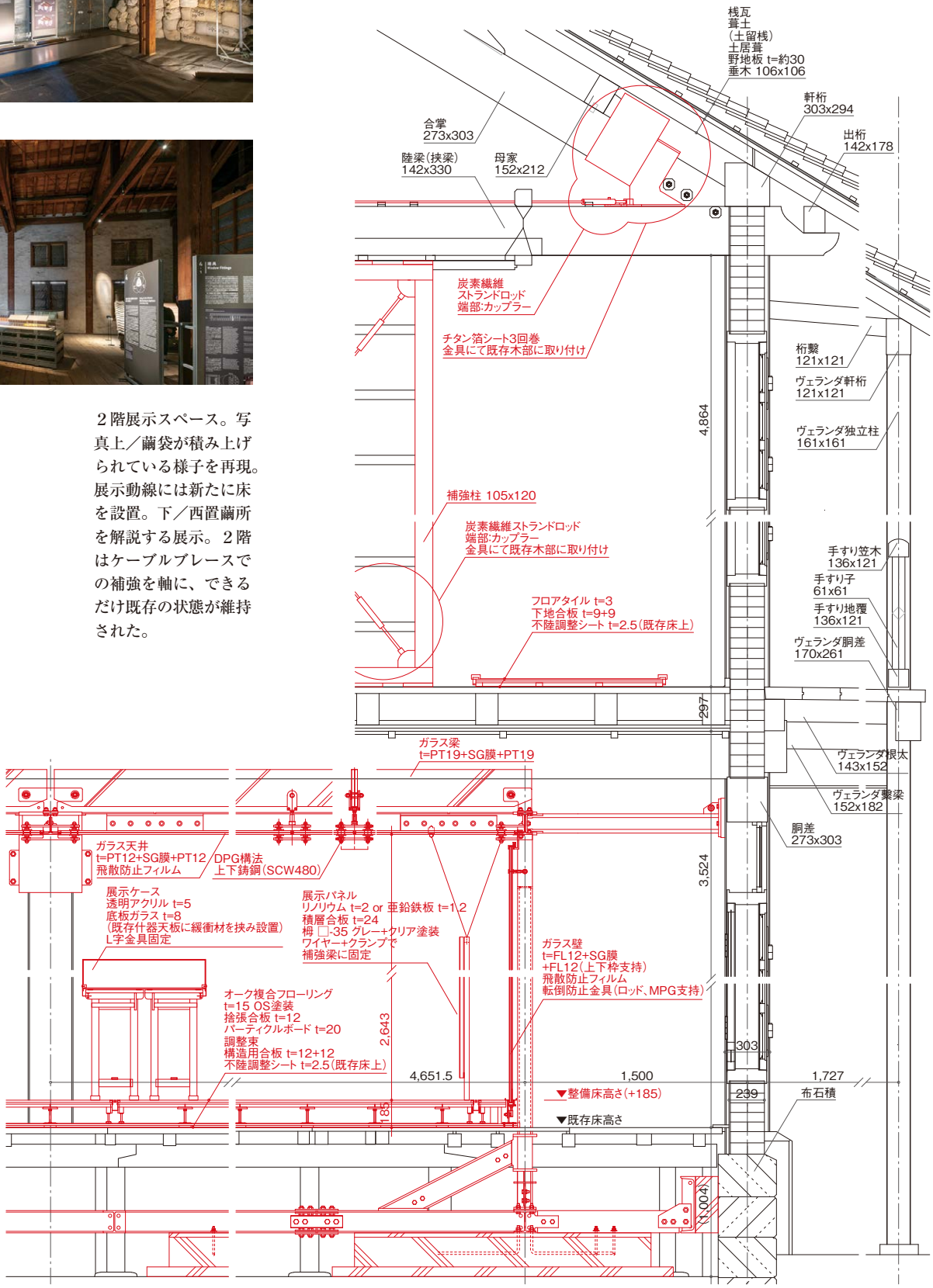
＊業績賞の受賞は、富岡市／富岡製糸場保存修理委員会／富岡製糸場整備活用計画実行委員会／公益財団法人文化財建造物保存技術協会／有限会社江尻建築構造設計事務所／

断面詳細図

0 25 50cm
1/40

赤線：改修箇所

２階展示スペース。写真上／繭袋が積み上げられている様子を再現。展示動線には新たに床を設置。下／西置繭所を解説する展示。２階はケーブルブレースでの補強を軸に、できるだけ既存の状態が維持された。



東側外観。

旧富岡製糸場 西置繭所保存整備事業

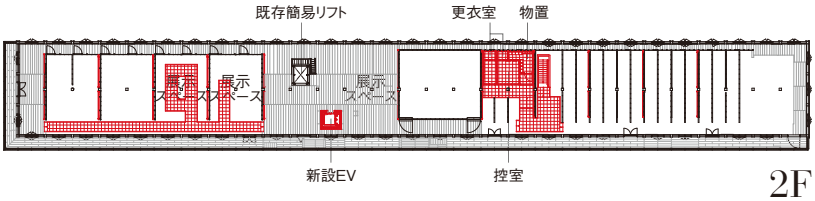
建築概要	
所在地	群馬県富岡市
主要用途	倉庫／展示・ホール・見学施設
設計	文化財建造物保存技術協会
構造設計	文化財建造物保存技術協会、
	江尻建築構造設計事務所
施工	竹中・タルヤ共同企業体
階数	地上2階
敷地面積	55,391.4㎡
建築面積	1,486.6㎡
延床面積	2,973.2㎡
設計期間	2015年2月〜2018年3月
工事期間	2015年1月〜2020年5月
おもな外部仕上げ	
屋根	桟瓦葺き
壁	煉瓦積み、木造（軸部）
開口部	木製外開き戸（亜鉛鉄板張り）、
	木製内開きガラス窓（亜鉛鉄板張り）、
	木製欄間ガラス窓（亜鉛鉄板張り）、
	木製引き違いガラス窓
外構	モルタル叩き、煉瓦敷き
おもな内部仕上げ	
1階既存部分	
床	床板（スギ・クリ・マツ）
壁・天井	漆喰塗り
2階既存部分	
床	床板（スギ・マツ）
壁	漆喰塗り
天井	小屋組み現し
1階整備部分	
床	オーク複合フローリング
	オスモカラー塗装
壁	ガラス MPG、ブナ練付合板
天井	ガラス DPG、PB EP塗装
2階整備部分	
床	フロアタイル
壁	ブナ練付合板
天井	岩綿吸音板 EP-Ⅱ塗装

平面図

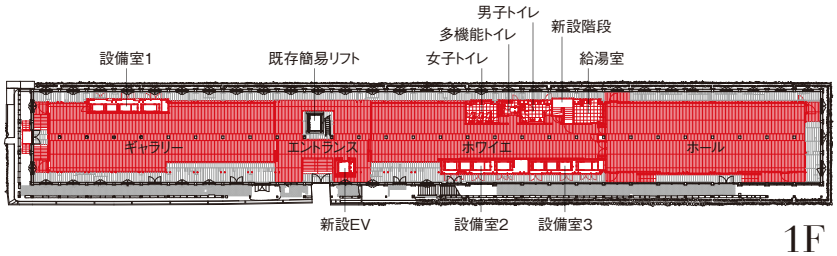
0 5 10m N

1/1,000

赤線：改修箇所



2F



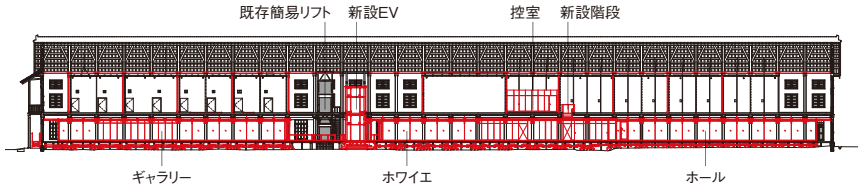
1F

断面図

0 5 10m

1/1,000

赤線：改修箇所



before

改修前の２階。繭の保存状態維持のため、壁には亜鉛メッキ鋼板が張られていた。

改修前の外観。東側１階の開口部が煉瓦と建具で塞がれていた。

2点ともに提供／公益財団法人文化財建造物保存技術協会

齋賀英二郎
Saiga Eijiro

さいが・えいじろう／ 1983年東京都生まれ。2008年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。10年文化財建造物保存技術協会。23年wyes architects。おもな作品=「重要文化財旧佐渡鉱山採鉱施設保存活用計画」「重要文化財北海道庁旧本庁舎保存活用計画」。

左に村野藤吾の枯山水、右に小川白楊の岩盤の庭を見る。軒下から建物に入り、庭をひとまわりして登ると客室の月7（右上）へと至る。

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❹

作品　佳水園 ウェスティン都ホテル京都　　客室監修　中村拓志

建築家から建築家へ渡されたバトン

村野藤吾の傑作として知られる「佳水園」。
完成から60年を経て、近年の顧客の要望に応えていく必要があった。
建て替え案もあがるなか、関係者らの村野建築への理解も深く、大規模リニューアルが決まる。
経年の傷みがあるなかで、内装については全面的な更新が求められた。
客室監修をつとめた中村拓志さんは、
「村野だったらどうしたか」を考え抜き、現代の技術・デザインで応答した。

取材・文／大井隆弘　写真／傍島利浩

「一口にいうとしたら、この建物は日本人の『すまう』ということのなかにあるたのしみの要素だけを抽出してまとめたものではなかろうか」(＊)

建築史家・浜口隆一は、かつて佳水園をそう評した。いっときとはいえ、宿は暮らしの場である。また、数寄屋のルーツである茶の湯は、庶民生活を切り取って芸術の域まで昇華させたものだといわれるから、言いえて妙だ。数寄屋の宿というものには、時代の暮らしやその感性が色濃く表れよう。

ウェスティン都ホテル京都の数寄屋風別館・佳水園。村野藤吾の傑作とされるが、この頃リニューアルオープンした。そこでは、どのように時の積み重ねがデザインされたのか。客室監修をつとめた中村拓志さんに話を聞いた。

小川白楊の庭と村野藤吾の建築

佳水園は、東山三十六峰のひとつ、華頂山の麓に立つ。京都を一望する高台に立ち、ホテルの7階から一度屋外に出てアプローチする。ここは、1890(明治23)年に琵琶湖疏水が引かれ、各界の著名人がこぞって別荘を建設したエリア。ホテルのルーツも琵琶湖疏水の通水式を機に開業した「吉水園」という遊園にある。開園以来、富岡鉄斎が「吉水八景」を選定するなど、多くの文人たちが愛した名所だ。1899(明治32)年に宿泊施設が建設されると、翌年には名も「都ホテル」となった。

もともと佳水園の高台には、大正期に首相をつとめた清浦奎吾(きようらけいご)の「喜寿庵」と呼ばれる別邸が立っていた。庭は七代目・小川治兵衛の長男・白楊の作。赤松の生える自然の岩盤を生かしたふた筋の滝の流れが現在も残る。清浦の没後、ホテルへ寄贈され、1959年に新しく別館が建設された。これが佳水園。村野は、新しく枯山水の中庭をつくり、白楊の庭にかけて計20の客室を設計し、その後もホテルの増改築を手がけた。しかし、建築から60年を経ると老朽化が進み、構造的にも機能的にも更新が望まれた。そこで、130周年を機に、ホテル全体で2018年から約3年にわたる大規模なリニューアルが行われることになった。

Special Feature
As Time Passes
Case Study

01 02 03 04 05 06

Kasuien,
The Westin Miyako Kyoto

既存の和室2室を1室にまとめ、現代のスイートをつくる。
一室は畳のままリビングに、一室は板敷きにベッドを置き寝室に。

白砂の中庭

村野の枯山水から白楊の岩盤の庭を経て月7を望む。山水画に描かれる仙郷のような構成。

①耐震改修を行い、②約500客室を2室を1室にまとめスイート中心の構成に。そして、③新たに天然温泉を引きスパやトリートメント施設を新設、という現代のニーズに合わせた3つの方針が立てられた。

社会の変化に合わせ客室をリニューアル

中村さんは、2016年頃から全体計画に携わっていたが、最終的に佳水園の客室リニューアルという大仕事を任されることになった。「ホテル側は村野建築への理解が深く、佳水園をとても大切にしていました。ただ経営上あらゆる検討が必要で、なかには解体して似たものを新築する案まであったんです。そこで、村野の傑作を未来に継承するために、ぜひ佳水園を担当したいとお願いしました。ただ、内心は恐々。村野建築を改修したら建築界で生きていけなくなるかもしれない。村野に詳しい研究者にまで相談に行きました」と中村さん。相当の覚悟で設計に臨んだ。

ホテル側や施工者との検討を経て、佳水園もホテル同様、①耐震改修を実施し、②客室を2室を1室にまとめ、③温泉を引き浴室まわりを充実することとなった。ただし、外観と共用部は徹底して保存。加えて、佳水園最高の一室「月7」も可能な限り保存することとし、ほかにも村野の書籍や、京都の文化・歴史に関する資料を中心としたライブラリも設けた。また、ホテル南館の耐震性向上のため、8～11階が減築されることになり、京都市内への眺望が再現されたことから、元大広間を「東山」の名を冠した客室とし、計13室の設計がスタートした。

「村野が設計した客室は、いわゆる古い旅館のスタイルで、椅子を置く縁側付き6～8畳を基本としていました。以前は仲居さんが布団を敷いたわけですが、プライバシーの考え方は変化していますし、オペレーション上も大変です。そのため、一室は畳のままリビングとして残しつつ、もう一室は板敷きにしてベッドを置きました」と中村さん。縁側に椅子を置くスタイルは、明治期以来よく見られるもの。改修後は、椅子座と床座が共存する格好になり、とくに

「東山1」などは段差を付けて接続する大正期以来のスタイルになった。建設から60年経過して、伝統への眼差しも時代が進んだのか。起居様式の変化を感じさせる構成になった。

「時代が進むなかで、客室の使われ方も変わり、テレビや空調が床置きになり、水まわりも現代では狭いなど、今の生活様式に合わせる必要性を感じました。訪日客の大きな荷物には収納量が足りず、床の間を荷物置きにする様を目の当たりにしたときはショックでした」と中村さん。耐震改修のため、構造壁、火打ち梁の新設、さらに空調の工事のため、天井もすべて剝がす必要があった。残ったのは、窓と障子くらいのものだった。

障子に刻まれた村野の重心

しかし中村さんは、障子のデザインの魅力を語る。「低い位置にアクセントがあり、これが空間の重心をぐっと下げ、落ち着いた雰囲気を生み出しています。障子に村野の考えが刻まれていると思いました」と言う。そのため、文房（書斎）の机、敷居、腰紙の高さ、家具の高さなど、村野の障子を手がかりに設計が進められた。天井も同じで、たとえば「東山1」では、吊束の位置で化粧垂木をダブルに配り、欄間障子の桟と垂木のピッチを完全に一致させた。

村野だったらどうしたか

共用部では部材を寄せ集めて家具の補修を行ったが、客室の家具や照明は新たに設計した。村野のオリジナルの照明は、まだLEDがない時代のもの。和紙の照明は、熱を逃がすためある程度の大きさになり、骨組みも必要になる。だが、もし村野の時代にLEDがあったらどうしたか。中村さんらは村野財団に許可をとり、思い切って小型化。吹付け和紙の技術で骨組みのない照明を考案した。もとの照明も残してあるので、比べることもできる。新しく必要となったベッドサイドの照明は、茶道具をくるむ七宝編みの伝統技術を用いてガラスを包むデザインとした。ほかにも、竿縁に直径2㎝の極小ダウンライトを仕込んだり、傷みの激しかった下地窓の小舞を真鍮で表現し直したりして、新しい技術や材料を積極的に用いた。

変わらぬたのしみ庭を通じた連歌

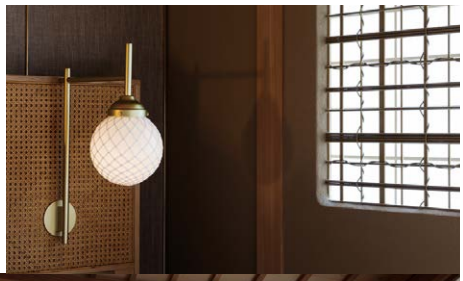
ところで、佳水園は建物をたのしむ宿泊客が多く、滞在時間が長い。そのため、中村さんは部屋にいながら周囲の環境をたのしめる要素をちりばめた。たとえば、腰紙

Kasuien, The Westin Miyako Kyoto

元大広間を客室に改修した東山1。隣接する南館を減築したことにより、京都市街への眺望が再現された。

客室

東山1



写真右／ベッドサイドの読書灯。京都の職人による七宝編みでガラス球を包んだ照明を新たにデザイン。下／リビングと寝室。竿縁には直径2㎝の極小ライトが埋め込まれている。

は琵琶湖疏水をイメージさせる淡い青色の和紙を採用。部屋が暗くなると、襖の唐紙に庭先の木々と対応して、雲母で摺ったサクラ、モミジ、ウメなどの花や葉が、観世水模様の水面にはらりと落ちる情景がうっすらと浮かび上がる。襖の引き手金物は舟のオール形にした。文房には、手紙やスケッチをたのしめるよう、美しいガラスの万年筆のセットを置いた。

じつはこうした工夫は、白楊や村野の庭園と関係している。「たとえば、山水を描いた水墨画の掛け軸を想像してください。下から上へ目を移すと、山の麓から滝などを経由して深山へ分け入り、やがて小さな庵へとたどり着く。白楊の庭は、おそらくこうした文人画の世界観を表現しています」と中村さん。一方、村野の庭はというと、「アイレベルでは白砂の海に芝生の島が浮いているように見えますが、『月7』まで登るとちょろちょろとした滝の音とともに、瓢箪と盃の形が現れるわけです。仙人が深山の庵で月や松と語らい酒を呑むという、神仙思想に通じる暮らしの感性が表現されている。だから村野は醍醐寺三宝院の『酒づくしの庭』を模した。まるで白楊と村野が時代を超えて連歌をたのしんでいるようです」と分析する。中村さんは、白楊と村野の感性を継承し、客室側で応えたというわけだ。

Special Feature
As Time Passes
Case Study

01
06 02
05 03
04

Kasuien,
The Westin Miyako Kyoto

時の積み重ねのなかで
先人たちがつくったものを
受け継いでいく。

中村さんも連歌に続いた。

新しい佳水園は、私たちの暮らしやその感性、さらに技術が時代とともに進んでいくことを教えてくれる。庭園で展開した白楊と村野の連歌は、客室まで聞こえるようになり、「すまう」ことのたのしみはますます充実したように思う。

「時の積み重ねのなかで先人たちのつくったものを受け継いでいく。あらゆる建築という行為が、そうした普遍性をもつことに佳水園は気づかせてくれました」と、中村さんは最後に述べた。

＊浜口隆一「都ホテル――佳水園〈典雅〉の造形化」（『新建築』1960年7月号、15～16ページ）

客室
月1

広々とした浴室には高野槇の円形バスタブが置かれ、新たに引かれた天然温泉がそそぐ。

客室
月1

デイベッド（右）と押し入れを改修した文房（左）。デスクには万年筆とインクが置かれる。

Kasuien, The Westin Miyako Kyoto

↓和室。既存の障子を再利用。中桟の高さに合わせて疏水を想起させる青い腰紙がまわる。

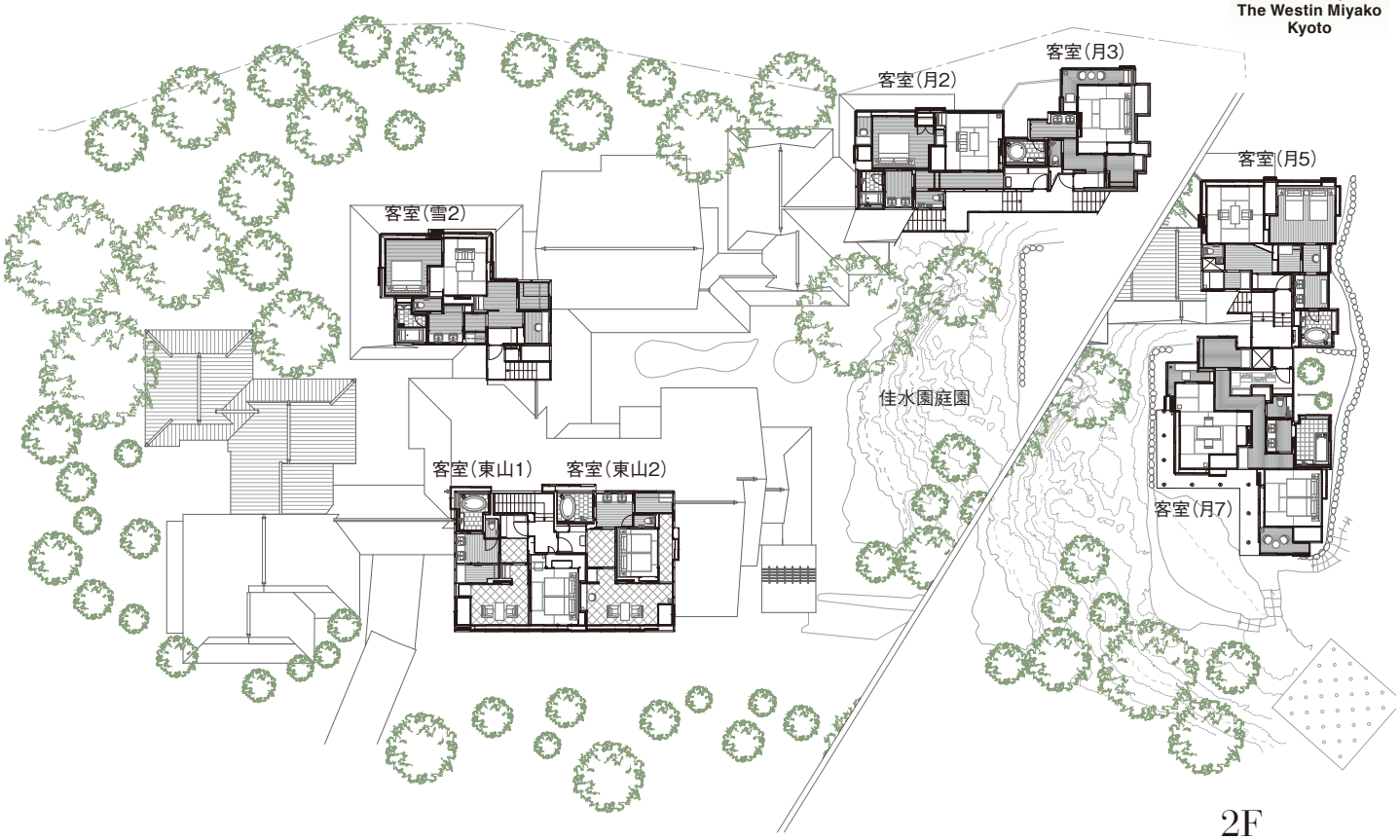
客室

月1

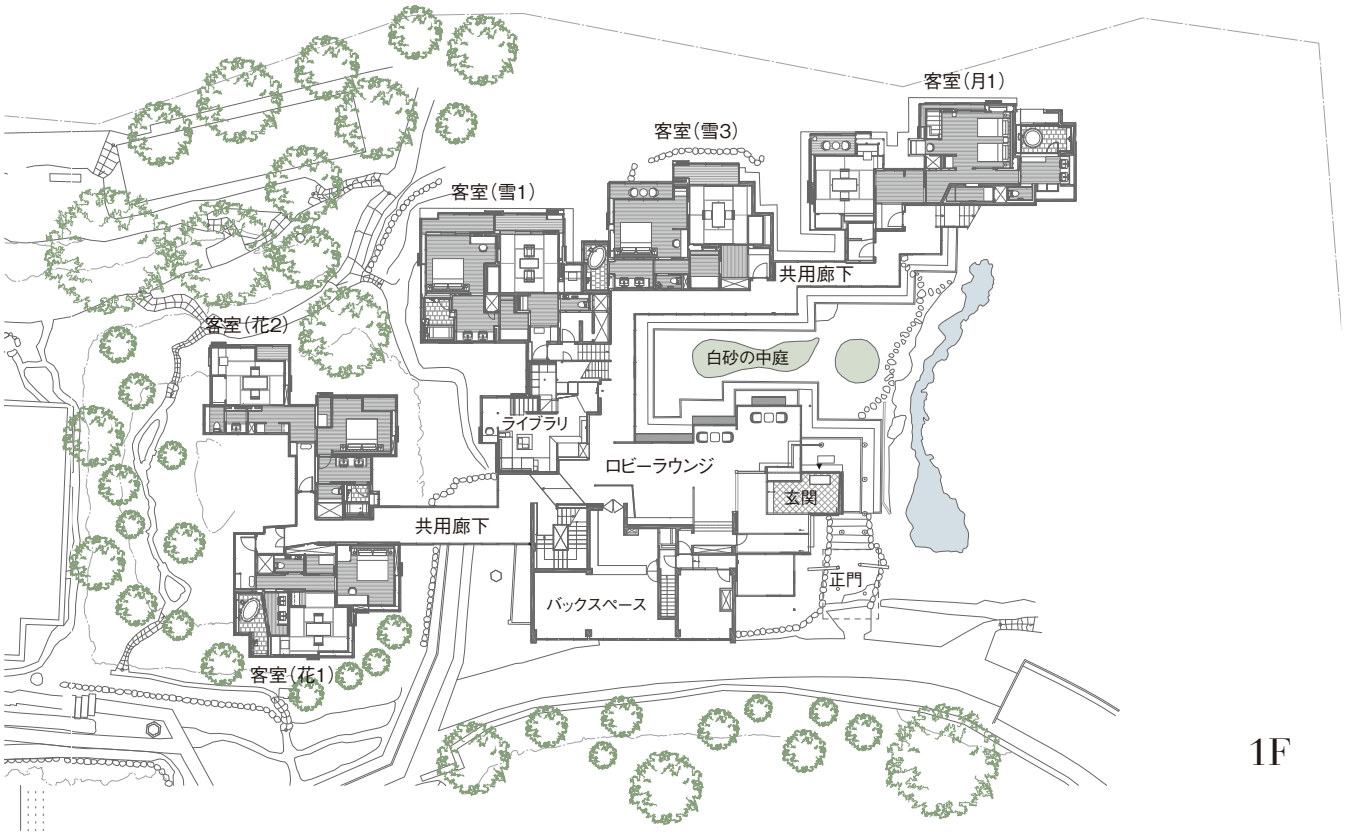
↑寝室。小舞を金属にすることで大きな下地窓が可能に。空間に開放感や奥行きを与える。

平面図

0 2 4m
1/500



2F



1F

44～45ページ図面提供／大林組

佳水園全景。

佳水園
ウェスティン都ホテル京都

建築概要	
所在地	京都市東山区粟田口華頂町1
	(三条けあげ)
主要用途	ホテル
全体改修	大林組
構造改修	全日本コンサルタント
客室監修	中村拓志&NAP建築設計事務所
施工	大林組
階数	地下1階、地上2階
敷地面積	約54,800㎡
建築面積	1,171.34㎡(佳水園)
延床面積	1,617.50㎡(佳水園)
設計期間	2017年3月〜2018年9月
工事期間	2018年10月〜2020年6月
おもな外部仕上げ	
屋根	銅板一文字葺き新設、
	平56版面取り瓦葺き新設
壁	聚楽調塗壁左官仕上げ新設
開口部	木製建具補修後再取り付け
外構	瓦四半敷き新設
おもな内部仕上げ	
ロビー	
床	絨毯敷き
壁	聚楽調塗壁左官仕上げ
天井	不燃スギ柾練付底目貼り、
	不燃スギ柾網代貼り、
	木製吹出し口・照明BOXとも
	補修後再設置
客室	
床	畳敷き、アカマツ縁甲板、フローリング
壁	聚楽調塗壁左官仕上げ
天井	竿縁、不燃スギ柾練付底目貼り、
	不燃スギ柾網代貼り
浴槽	高野マキ、石+ヒノキ

photo by KEI Tanaka

中村拓志
Nakamura Hiroshi

なかむら・ひろし／ 1974年東京都生まれ。99年明治大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。隈研吾建築都市設計事務所を経て、2002年NAP建築設計事務所設立。明治大学理工学部特別招聘教授。おもな作品=「Ribbon Chapel」(13)、「上勝ゼロ・ウェイストセンター」(20)、「地中図書館」(22)。

断面図

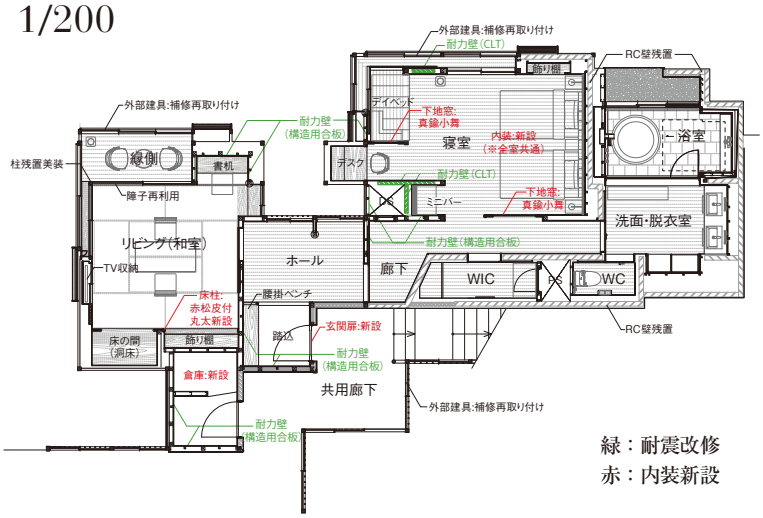
0 4 8m

1/600

月1平面図

0 1 2m

1/200

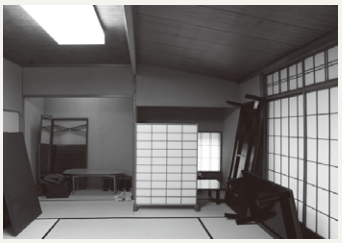


緑：耐震改修
赤：内装新設

軒先の薄い屋根が幾重にも重なる佳水園の印象的な外観。

木造を鉄骨で補強することで軒先の薄さを実現している。

before



改修前の客室。質素な造りの客室であった。

改修前の浴室。風呂桶は木製。

2点ともに提供／ NAP建築設計事務所

西側外観。1階は基礎を打ち直し、全面的に構造補強を行い、2階はあまり手を加えず活用している。中央は玄関を兼ねた吹抜けのアトリウム。

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❺

作品　千鳥文化　　設計　ドットアーキテクツ

なんでもない庶民生活の積層も味わい深い

昭和30年代、造船業で栄える大阪・北加賀屋に、廃材のブリコラージュで
船大工たちが建てたとされる文化住宅。その後も増改築は繰り返され、あたかも迷宮のような状態だった。
ドットアーキテクツは、その迷宮のなかに庶民生活の積層を見出し、
できるだけ既存を残しながら、文化施設として再生することに決めた。
現在も、施設の運営にもかかわりつづけながら、
大工が積み重ねてきたブリコラージュに参加しつづけている。

取材・文／贄川 雪　写真／傍島利浩

Chidori Bunka

造船から アートのまちへ

大阪の南西部を流れる木津川の河口付近に広がる北加賀屋は、今やすっかり〝アートのまち〟として浸透した。かつてこのエリアでは造船業が盛んで、川沿いに立ち並ぶ工場や倉庫群が日夜稼働し、高度経済成長期には2万人以上の労働者がいたといわれている。おかげで近隣の商店や飲食店もたいへん繁盛し、まちは毎日活気に沸いたそうだ。

しかしその後、産業構造の変化や高齢化が進み、1988年には世界の物流事情の変化に伴い名村造船所大阪工場が撤退し、活気は急速に失われた。その土地の所有者が、大阪を中心に不動産賃貸業を展開する千島土地だった。

千島土地は2004年にこの工場跡地で「NAMURA ART MEETING '04-'34」を開催し、まちの産業遺産の価値を再認識する。そして09年「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」を提唱し、かつての〝ものづくりのまち〟を芸術の発信拠点として再生するプロジェクトを開始した。

「千鳥文化住宅」が「千鳥文化」になるまで

昭和30年代に建てられた「旧千鳥文化住宅」の再生も、その取り組みのひとつだ。1階は労働者向けの飲食店、2階は彼らの住居として使用されてきたが、14年に最後の住人が退居したのを機に、小商いや地域交流を育む場所「千鳥文化」へと再生するプロジェクトが始まった。そこに建築家として参画したのが、dot architects（以下、ドット）だった。

ドットの家成俊勝さんによると、増改築による複雑な構造と積年の激しい傷みから、改修に多額のコストがかかるのは明らかだったという。そのため、工事は2期に分けられた。

第1期（14〜17年）ではA棟を改修し、1階にアトリウムや食堂やバー、2階にはかつての居室群をそのまま生かしたギャラリーが設えられ、ドットはこれらの運営にもすすんで携わった。第2期（18〜19年）では、B棟に新しく大屋根を架け、ホールを設置した。南西側の長屋は、8室のテナントスペースと階段室に変更した。現在は理髪店や喫茶店が入居し、以前の路面店の雰囲気を現代らしく取り戻しつつある。

写真上／南側外観。下／西側バーの玄関。ひび割れや蔦にも手を加えず、そのままに。

廃材のブリコラージュ

旧千鳥文化住宅は、地元の船大工たちが、船や廃屋からかき集めてきた廃材をブリコラージュしながら建てたといわれている。場当たり的な増改築が繰り返された結果、プランや構造は複雑怪奇なものになった。設計図はもちろんなく、改修するにもどこに耐震補強をすべきか見当もつかない。構造補強を相談した満田衛資（みつだえいすけ）さんにも、当然ながら「現状では的確な判断はできない」と言われたそうだ。

そこで家成さんたちは、壁や天井を部分的に剝がしながら既存軀体を実測し、構造模型を制作することから設計を開始するが、その調査だけで約1年もの歳月を要した。「天井を見れば、2本の細い柱材を抱き合わせ、上から板を打ちつけてつくった梁みたいなものが現れる。壁を剝がせば、どこかの家の鴨居らしきものが下地材として現れる。ありものの資材でこしらえた大工の〝間に合わせ仕事〟の数々には、驚きの連続でしたね」。柱の足元や柱梁の接点を撮影して番号を振り、満田さんと「この柱は残すべきか、残すならどのような対処をすべきか」を、本当に1箇所ずつ検討していった。

改修にあたって大きく手を入れたのは、この構造と動線だという。「全体を可能な限り残すことを前提に、1階は既存壁の内側に基礎を含む新しい木フレームを挿入しています。そして必要な箇所には構造壁を設けて全体を補強し、土間も打ち直しました。既存梁と新設梁とが交差するポイントでは、新設梁に欠き込みを設けて下からあてがっています。2階の壁はほぼそのままですが、床を合板で固めました」。

「動線は、既存の部屋割り自体は踏襲しつつ、アトリウムを幹ととらえ、そこから食堂やバーやホール、2階へと枝を伸ばすよ

残せるものは全部残しておこう。
あくまでボロくいきたい。
つくり込むほど地価や家賃が上がり、
地元の生活者が離れて
しまわないように。

アトリウム。既存の柱梁を残しながら、構造補強を施しアトリウムとした。屋根材は網入り波板ガラス。

うに計画しています。第2期では階段室を新設し、正面のアトリウムを通らずとも路地から2階のテナントやギャラリーにアクセスできるようにしました。室内のパスや要所ごとの抜けはかなり意識的にデザインし、全体の回遊性を高めています」。こうして千鳥文化は、往時の素材や空気感を強く残しながらも、明るく風通しのよい空間へと生まれ変わった。

残すもの 剝ぎ取るもの 加えるもの

何を残して、何を剝ぎ取り、何を加えるか。建物を改修するにあたって、建築家は必ずこの問題と向き合わなければならない。千鳥文化の〝残しっぷり〟は、頑なにもみえる。なぜ、これだけの労力を割いてまで既存部を残したのか。

家成さんからは「当時、僕たちの仕事はリノベーションがほとんどで、当初、千島土地から『新築でもいいよ』と言われたときは、正直ちょっとクラッと傾きかけて(笑)。満田さんからも『どうしてわざわざ残すのか』とシビアに問われつづけました」と、率直な答えが返ってきた。しかし、構造やファサードに現れる当時の資材の継ぎ接ぎや、大工さんのイレギュラーな施工のおもしろさに触れるなかで、やっぱり残すべきだという気持ちを再確認したという。

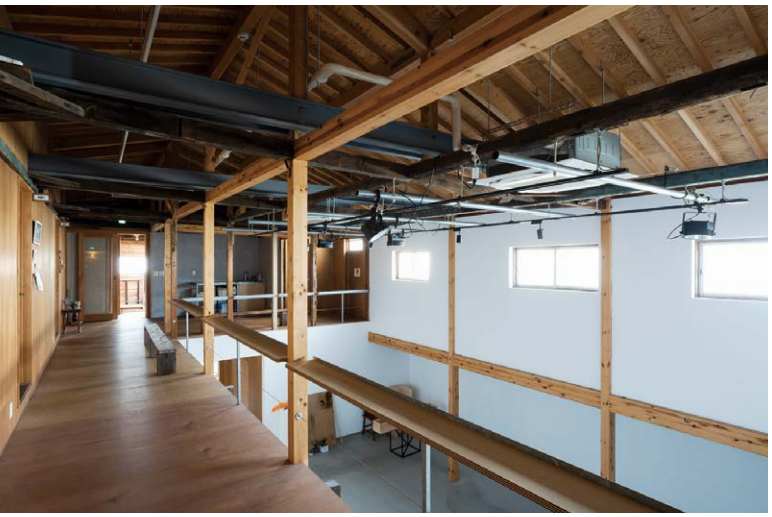
「千鳥文化住宅は、歴史的になんの価値もない、吹けば飛ぶようなボロ屋のひとつです。立派な重要文化財であれば適用されるような残すべき理由は、ここにはまったくない。でも、むしろこういうものほど、一度壊したら二度と取り戻せないんじゃないかと思うんです」。とくにファサードは、必要な開口の設置や修繕以外はもはや整理しないという姿勢を貫いた。「ボロボロのシャッターや『TEA ROOM まき』の庇テントも、残せるもんはもう全部残しておこうって。ある意味では、判断を放棄しています。でも、当然なんでも残そうと思っているわけでもないんですよ。建築の来歴を理解しつつ、現在の暮らしに合わせていきいきと使っていくことが大前提にある。その暮らしや活動に必要な設えなら、やってもいいんちゃうかな」。

また「あえていえば、あくまでボロくいきたいという気持ちもありました。つくり込むほど地価や家賃が上昇し、結果的に自分たちがジェントリフィケーションに加担してしまうことへの危惧もあったんです」。改修が原因で、地元の生活者がその場所を離れざるをえないような事態を招くかもしれない。同じ北加賀屋で設計事務所を構える家成さんたちは、そうした当事者意識ももっていた。

1階食堂・商店の壁。既存壁の内側に新しい木造フレームを挿入。壁厚増を利用して小物を置き、背後には既存の壁面がのぞく。

生活史の 一部に溶け込む

また、自分たちの手跡を残したいという欲求もあまりないという。「幾多の増改築のなかで、この建物にはすでに何種類ものボキャブラリーが入り混じっている。僕たちがやった改修や、ほかの運営者やテナントのみんなのDIYもそのひとつとして加わり、50年先には、再びどこがオリジナルかわからなくなるかもしれない。それに対しても、僕らはものすごく肯定的なんです」。「千鳥文化のよさは、ただ古いからではなく、この北加賀屋の来歴が積層した感じがあるから。まちの成り立ちとリンクしたジャンクな適当さに、これでよかったんや、と思わされる」。はなやかな経済成長を足元で支え、それが衰退した後も今日まで粛々と続いてきた、大文字の歴史にはのることのない庶民の生活史。それを伝えるひとつが、千鳥文化住宅だった。家成さんたちは、そこに、かつての人たちがしたのと同じ態度で、建物を継ぎ、ほころびに仕事や材を接いだように思われた。



2F

共用廊下からホールを見る。第2期として完成したB棟は、この吹抜けのホールと9つのテナントからなる。

ホール。アートイベントなどを開催。2018年の台風で既存屋根が飛び、小屋組みは新たにつくり直した。

1F

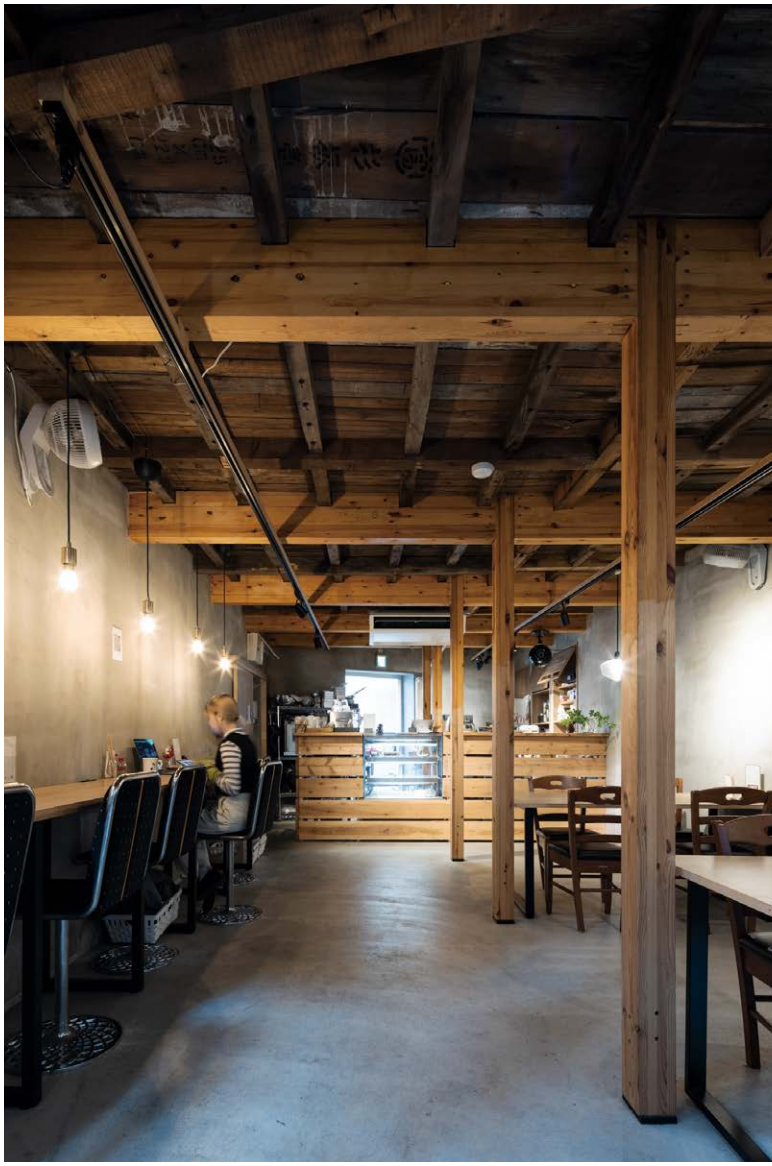
千鳥文化の魅力はジャンクな適当さ。
度重なる増改築によって
さまざまなボキャブラリーが混在する。
ドットによる改修も、
入居者たちによるDIYも、
そのひとつ。

アトリウムの渡り廊下。壁面にはかつての船大工たちによる増改築の痕跡が数多く残る。

食堂・商店。構造補強の柱梁が並ぶ。新設梁を上端を切り欠いて既存梁にはめ込むことで下から支える構成。

2F

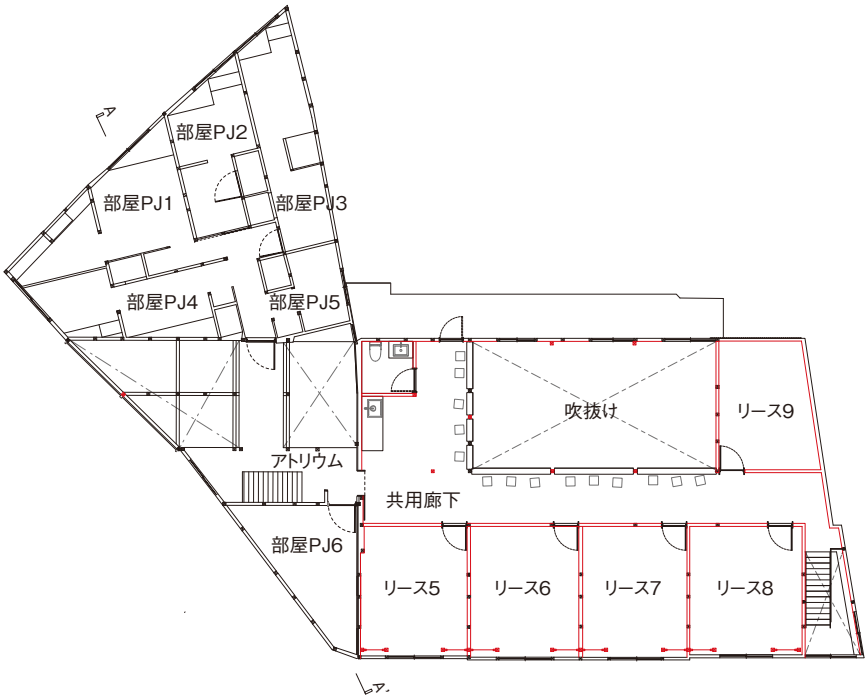
1F



平面図

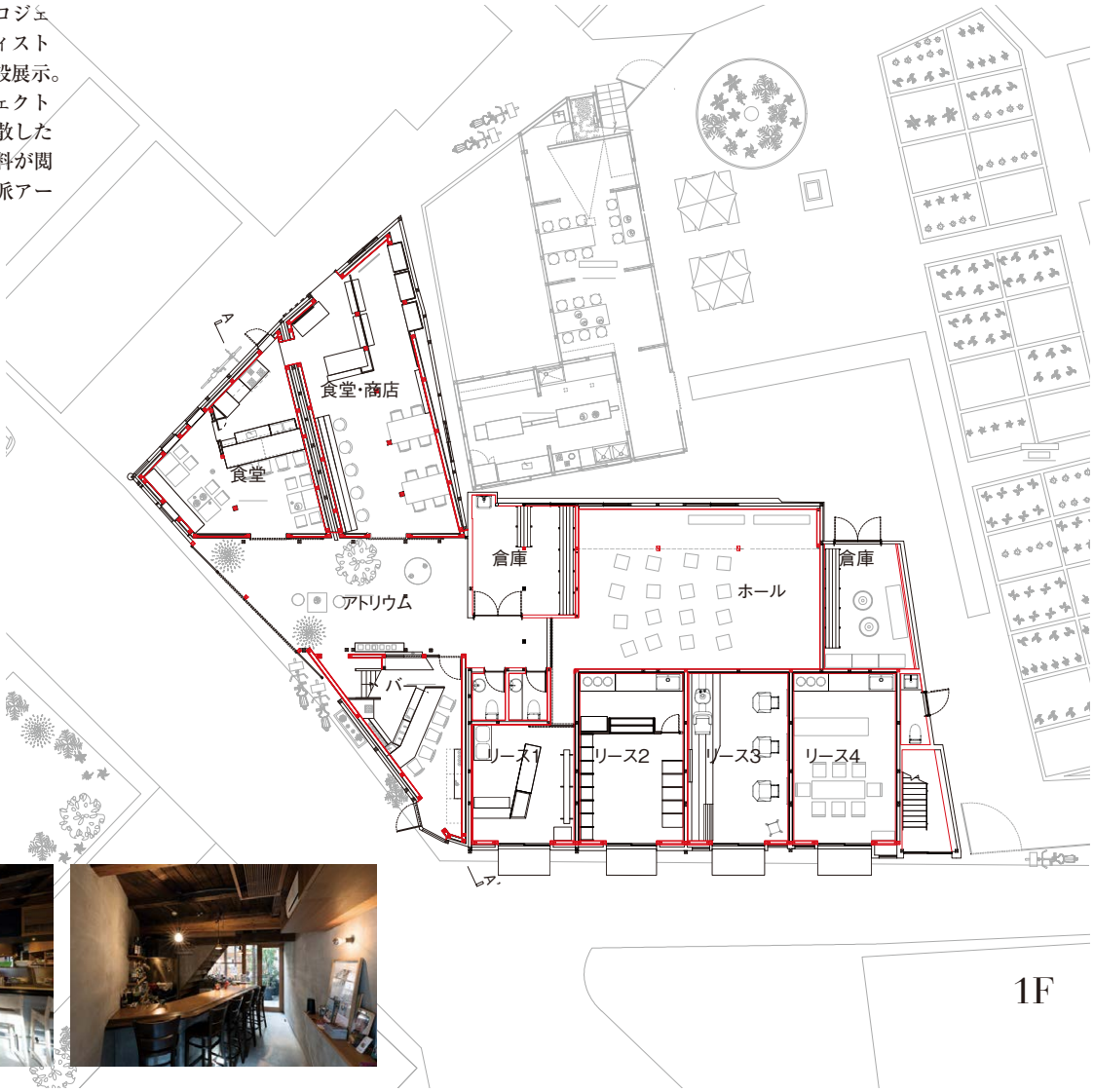
0 2 4m
1/250

赤線：改修箇所



2F

写真上／部屋プロジェクト1。アーティスト・金氏徹平の常設展示。下／部屋プロジェクト6。2017年に解散した劇団維新派の資料が閲覧できる「維新派アーカイブス」。



1F

写真左／1階食堂。バックヤードを隣の食堂・商店と共有し、客席も拡張した。右／バー。かつてはドットのメンバーで運営していた。

千鳥文化全景。

千鳥文化

建築概要	
所在地	大阪市住之江区
主要用途	飲食店、店舗、共同住宅
設計	ドットアーキテクツ
構造設計	満田衛資構造計画研究所
施工	和建築
階数	地上2階
敷地面積	746.70㎡
建築面積	310.44㎡
延床面積	573.48㎡
設計期間	1期:2014年9月〜2017年5月、
	2期:2018年6月〜2019年5月
工事期間	1期:2017年5月〜8月、
	2期:2019年3月〜11月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板瓦棒葺き、
	スレート屋根葺き、網入り波板ガラス
壁	既存まま
開口部	アルミサッシ
おもな内部仕上げ	
食堂・バー	
床	モルタル金ごて押え 撥水剤塗布
壁	構造用合板 カチオンしごき仕上げ
天井	既存天井材撤去のうえ清掃
アトリウム	
床	コンクリート研ぎ出し仕上げ
	撥水剤塗布
壁	既存まま
ギャラリー	
床	構造用合板張り
壁	既存壁清掃
天井	既存野地板清掃
ホール	
床	モルタル金ごて押え
壁	構造用合板 EP塗装
天井	小屋組み現し

ドットアーキテクツ
家成俊勝
Ienari Toshikatsu

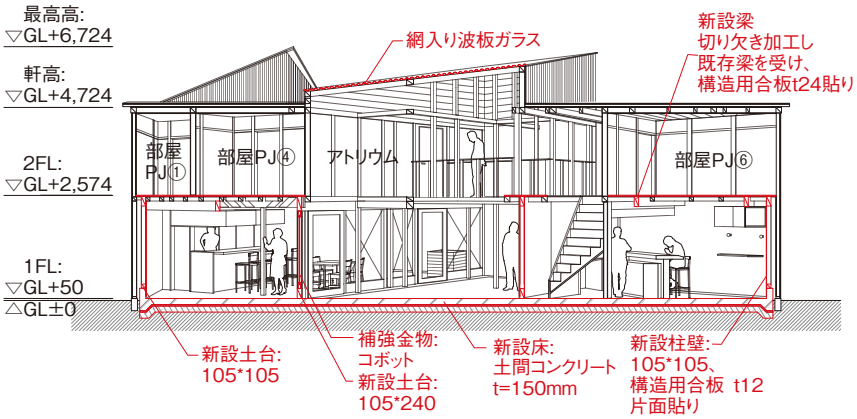
いえなり・としかつ／ 1974年兵庫県生まれ。98年関西大学法学部法律学科卒業。2000年大阪工業技術専門学校夜間部卒業。04年ドットアーキテクツ共同設立。京都芸術大学教授。ドットアーキテクツのおもな作品=「馬木キャンプ」(13)、「No.7」(18)、「仮の家」(22)。

AA′断面図

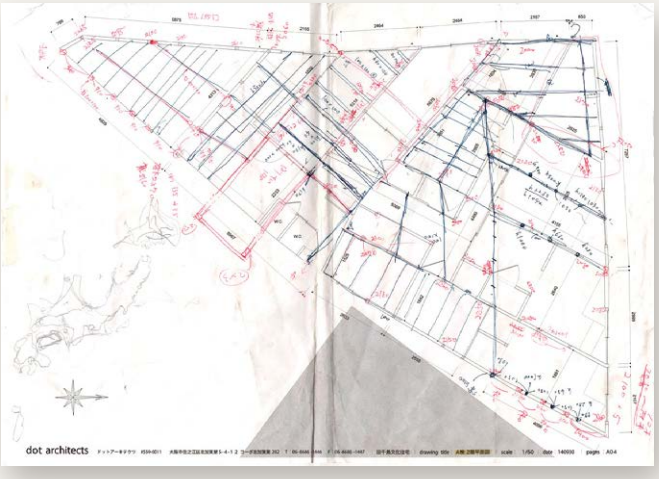
0 1 2m

1/200

赤線：改修箇所



before



↑第1期A棟改修に向けた手書きのスケッチ。柱梁の位置を細かく確認した形跡や、接合部についてのメモなどが残る。

↓施工中のアトリウム。部分的な補強で支えながらコンクリートを打ち直している。

2点ともに提供／ドットアーキテクツ

店舗の什器。特殊な塗料を使うことで、滴り落ちる時間を含ませたような、つらら状の塗装となった。

店舗の壁面。既存の壁はそのままに、新たに什器を上から重ねるだけ。このような手法をクライアントは「加装」と名づけたという。

特集／時の積み重ねをデザインする　ケーススタディ❻

作品　スキマ 大阪　　設計　元木大輔

古いものに新しいものを「加装」

革製品を展開するブランドHender Schemeの店舗「スキマ 大阪」。
改修の対象となった築60年ほどの木造平屋には、すでに構造補強が施されていた。
デザインを手がけた元木大輔さんは、既存にはほとんど手を加えず、
新たに什器のレイヤーを加えるだけ、という手法を思いつく。
できるだけ少ない手数で新たな価値をつくる試み。

取材・文／市川幹朗　写真／山内紀人

「手つきが似ている」相思相愛の関係

JR、阪急、阪神に地下鉄も乗り入れて、多くの人でにぎわう梅田駅周辺から歩いて10分少々。駅近くの雑踏とはかけ離れた静かな公園の前にその建物は立っていた。遠目には古い日本家屋にしか見えない。ここがHender Schemeのフラッグシップストア「スキマ 大阪」だとは、事前に知らなければ気づくことなく通り過ぎてしまいそうだ。

Hender Schemeは2010年にデザイナーの柏崎亮氏が立ち上げたブランドで、靴職人としてスタートした柏崎氏が革の可能性を模索し、工業製品であるスニーカーを革靴の製法で職人がつくるというオマージュラインは注目を集めた。商品ラインナップは靴だけでなく、財布やバッグなど革製品が多いが、革のよさを生かしたオリジナル商品にとどまらず、ザ・ノース・フェイスなどさまざまなブランドとコラボレーションすることにより既存の製品から似て非なるものをつくり出すことでも知られている。そんなHender Schemeの関西でのフラッグシップショップとしてオープンしたのが「スキマ 大阪」である。

改修のデザインを依頼されたのは元木大輔さん率いるDDAA。元木さんがHender Schemeとかかわるのはこれが2軒目で、2021年にHender Schemeを運営するライコスのショールーム・オフィスの改修を手がけている。元木さん自身は、仕事でかかわるようになる前からHender Schemeのファンだったといい、それは「ジャンルは違うけど、手つきが似ている」と感じていたからだそうだ。オマージュラインやさまざまなコラボのなかで、既存のものを違う視点で見つめ直したり、わずかにレザーを加えることでまったく新しいものに変えたりするようなHender Schemeのものづくりの姿勢が、自分たちの考えていることと共通する、ということ。そんな相思相愛の関係のうえ、2度目の依頼。1度目の案件でお互いの目線合わせ、価値観のすり合わせは終えているから、それぞれの信頼感も高まり、設計作業もよりスムーズに進んだことは容易に想像できる。

上書きすることで新しい価値をつくる

建物は築60年超の木造平屋。住宅としての役目を終えた後、地域の人たちの集会所などとして使われていた。当初建物を壊して駐車場にすることも検討されていたこの物件は、最低限の耐震補強を施して、既存を生かして次の使い手が探された。その段階でHender Schemeが建物を借りたため、元木さんが初めて訪れたときにはすでに床や天井は撤去され、構造用合板や柱の交換などの補強が行われたがらんどう状態だったという。しかしこれが元木さんにとっては魅力的に映る。

「力が抜けていて、いい意味で適当というか、厳密な計画性のないところがよかった」

内装計画は、その状態からスタートするが、これを元木さんは3つのレイヤーでとえる。第1のレイヤーは最初の住宅としての状態、第2のレイヤーが構造補強のなされたがらんどう、そして今回、と。

「Hender Schemeのものづくりのように、新しいレイヤーを重ねたり、視点を上書きすることで、既存の建物はできるだけそのままに、新しい価値をつくることはできないか」

これがテーマとなる。そして、要素を増やすことなくもともとそこにあった素材だけを使う、ただし第2レイヤーで加えられた合板は使わない、といったルールが加えられていく。

とはいえ、店舗として求められる機能は当然あって、なかでも大きな問題は商品を並べる棚。展示するアイテム数は決まっていたため、必要な棚面積も決まる。そこで、気に入っていた古い型ガラスの入った西側の窓なども含めて、一度既存の状態を気にせずに什器計画を検討していった結果、「白」が新たなテーマとなる。

「モダニズム以降の建築にとって、ユニバーサルな色という意味で白は特別だと思いますし、白く塗るという手法が広く一般化しているので、これまで白の扱いには慎重でした。今までは素材の色をそのまま生かして使うことが多く、白をテーマにつくることを避けてきました。ただ今回は、プロダクトを見せる背景をつくる必要もあり、白について考えてみることにしました」

そこで踏み込んで検討して、出てきたのが特殊な塗装による「見たこともない白」。具体的には、エポキシ樹脂と白の顔料を混ぜ合わせてざらつきを出し、硬化速度を遅くした塗料を棚に塗る。1〜2日かけてゆっくり硬化する塗料は、垂れる過程でつら状となって独特の風合いを醸し出す。つまり遠くから見れば古い土壁や柱とは無関係に伸びる一本の白い線となり、近づくとそれ自体に意味があるような「白」が見えてくる、というわけだ。古い木造家屋内部に白はない。土色の背景のなかに白が浮かび上がり、それがまたプロダクトの背景となる。

「たとえば赤の隣に黄色があるのと青があるのでは赤の意味が変わってきます。同じように、立体がどう並んでいるかによっても、あるいは同じ並びでもディテールが違うと意味が変わる。そういうつくり方はつねに意識しています」

現状をできるだけ受け入れながら、どこ

南側外観。鏡面仕上げの大きな玄関スライドドアが前面に植えられた植栽を映し、不思議な遠近感を生む。

sukima Osaka

すでに構造補強されていた
木造平屋のがらんどう。
そこに第3のレイヤーを加えるだけで
見え方を変えていく。

写真上下／床に置いたコンクリートの什器と、既存の壁面に加えられた白い什器で全体が構成される。

にどういう「句読点を打てば」もとの空間がさらによくなるか。これを元木さんは「何も足さないで、足そうとしている」と表現する。そして「何を足したらギリギリ成立するか」のスタディを繰り返す。

古さを反転させて新しさを「加装」する

竣工した「スキマ 大阪」の入口は、建物正面の大きな鏡面の引き戸。閉めていると前にある公園の風景を鏡面が映し出し、オープン時には3分の2ほど開けられて、ぽっかりとあいた穴から内部の様子が道路へと流れ出る。入口の前には、前の公園を座って眺めるのにちょうどよさそうな新しくつくったコンクリートの塊が2本。建物の外まわりはほとんど手を入れていないが、このなんでもないような新設のコンクリートが店舗と道路のバッファーとなって、適度な距離感をつくっている。

内部に入ると大きな吹抜けのがらんどうに、手前から奥に向かって少しずつ高くなるこれまたコンクリートの箱が規則的に6つ配され、その上に商品となる靴と小物類が並べられる。壁際には左右と奥に、先ほどの「白」をまとった棚があり、ここにも靴。そのほかのバッグや小物は白いボードを背景として展示される。第2レイヤーまでの状態をできる限り保ったまま、新たなレイヤーとして加えられた「白」と土間床が盛り上がったようなコンクリートの箱だけに展示が集約されている。クライアントは、元木さんのこの提案を「加装」と呼んだ。最小限の新たなレイヤーを「加」えて「装」うことで、古い建物の内部を最新の空間にするという意味の反転。元木さんは「見たことがあるものの、見たことのない使われ方」を求める。そして「すでにあるものをできるだけ簡単にひっくり返せたら、社会的にもよくなると思うんですよ」とも。

反転といって思い出すのは、かつて藤森照信氏が語った利休の茶室と壺中天。一般的に壺中天は「俗世間とは異なる壺の中の別天地」と説明されるが、藤森氏は「ゴムマリに小さな穴をあけ、そこからズルズルと中を引き出すとまたマリに戻るが、しかし同じではなく内と外が反転している」とし、「(内部に入れば)世俗の物と力と富が茶室という茅屋の内に封じ込められ、極小が極大を含み、極小の中に極大もまたあることになる」と利休の茶室を読み解いた。店に入る直前まで鏡面が俗世間を映し出しつつ、中に入ると時の流れを超えた別天地。過去と現在を分断させることなく、古いもののなかに新しいものを生み出す元木さんの試みは、かたちを変えた壺中天といえる。そう考えると、道路に向けてぽっかりと開いた「スキマ 大阪」の入口は、時空を超えるための少し大きめの躙り口にも見えてくる。

新たな意匠で改める
「改装」ではなく、
既存を受け入れ手を入れず、
新たなレイヤーを加える「加装」。

↑建物の履歴が刻まれた独立柱。床は研磨して骨材を現している。革製マットの上は試着スペース。

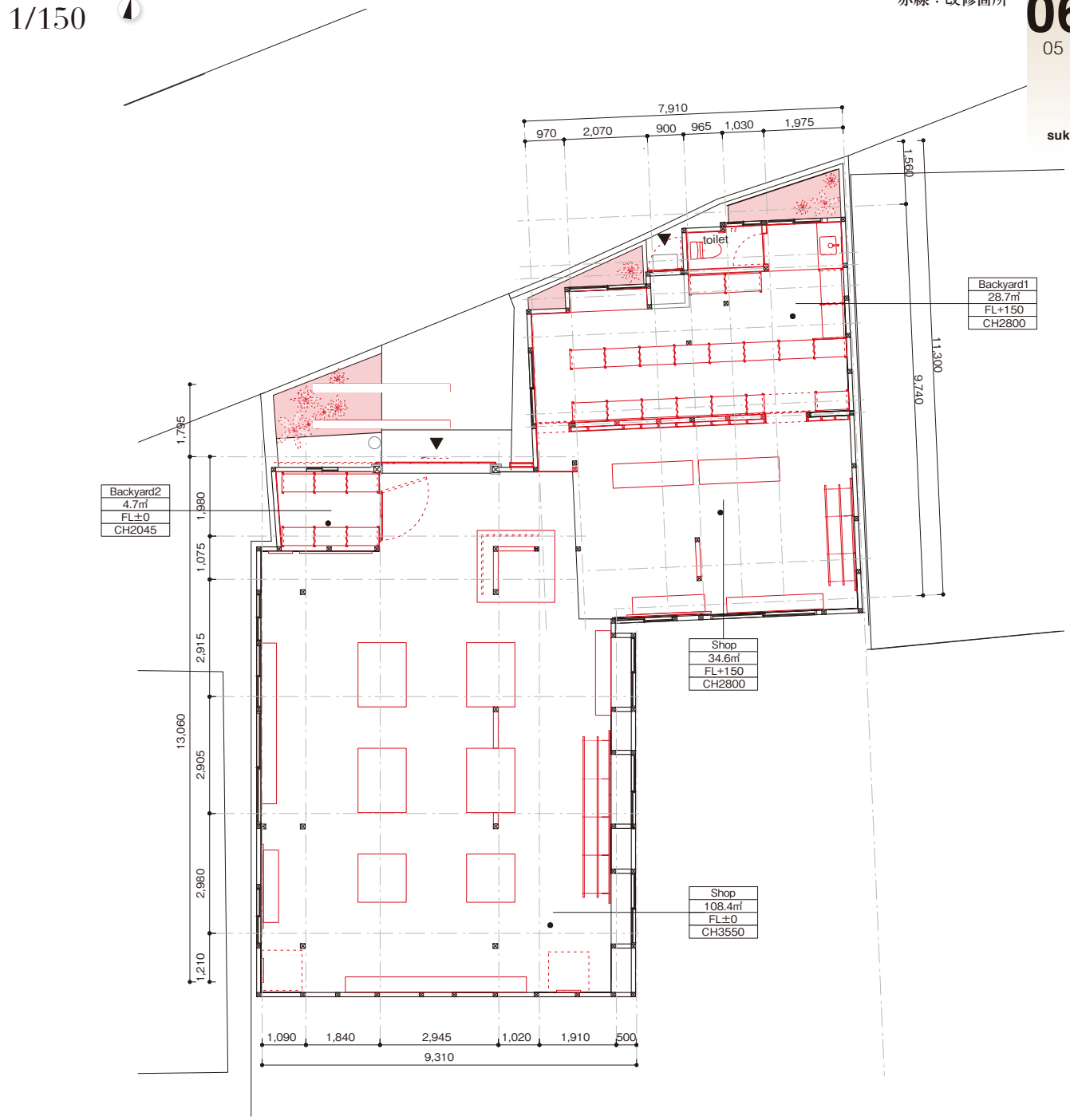
↓什器塗装のつらら。白い顔料にエポキシ樹脂を混ぜてムラを出し、固まるスピードを調整した。

壁面に現れる3つのレイヤー。手前から新設の什器、構造用合板による補強、そして窓を含む既存の壁。

平面図

0 1 2m
1/150

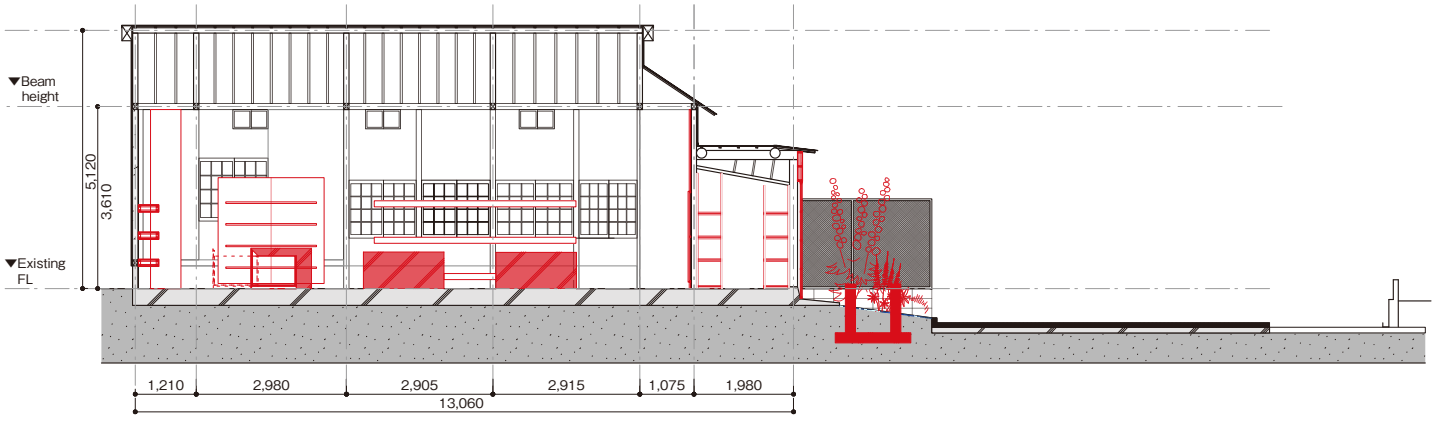
赤線：改修箇所



断面図

赤線：改修箇所

0 1 2m
1/150



南側全景。

スキマ 大阪

建築概要	
所在地	大阪市
主要用途	店舗
設計	DDAA
特殊塗装	Nakamura Painting Co., Ltd.
植栽	Yard Works Inc.
照明設計	BRANCH LIGHTING DESIGN
施工	SET UP
階数	地上1階
敷地面積	不明（立ち入れない部分があり、かつ古い建物で既存資料もないため）
建築面積	175.5㎡
設計期間	2022年4月〜9月
工事期間	2022年7月〜10月
おもな外部仕上げ	
屋根	既存まま
壁	既存まま
開口部	ステンレス鏡面仕上げ（エントランス）
外構	コンクリート打放し
おもな内部仕上げ	
床	既存土間コンクリート研磨 防塵塗装
壁	既存 ウレタンクリア艶消し
天井	既存まま
什器	コンクリート打放し、メラミン合板、針葉樹合板 特殊塗装（エポキシ樹脂+顔料）

↑会計カウンターのまわりには鞄や小物類が並ぶ。

写真右／床が盛り上がったかのようなボックス型の什器。左／カウンター裏のバックヤードへの出入口。ビニールカーテン用の金物を転用してレザーで制作した。

before

提供／DDAA

改修前の内観。ところどころに構造用合板と柱による補強が施されていることがわかる。

元木大輔
Motogi Daisuke

もとぎ・だいすけ／ 1981年埼玉県生まれ。2004年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、スキーマ建築計画勤務。10年DDAA設立。19年、コレクティブ・インパクト・コミュニティを標榜し、スタートアップの支援を行うMistletoeとともに、実験的なデザインとリサーチのための組織DDAA LABを設立。21年 第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展参加。おもな作品=「OUCHI」(21)、「HIROPPA」(21)、「all day place shibuya」(22)。

旅のバスルーム

文・スケッチ　浦 一也

LES HARAS STRASBOURG（レ・ザラ・ストラスブール）

所在地：フランス・ストラスブール

昨年海外ホテルの視察に出られた浦一也さんより、コンバージョンホテルのスケッチが届きました。特集の特別編として、久々の「旅のバスルーム」をご覧ください。

復元した厩舎をホテルに

久しぶりのホテル旅。最近コンバージョンに目が留まる。

ストラスブールはドイツとの国境に近いフランスの都市。近くを流れるライン川は古くから交通の要衝とされ、その領有を巡って争いが絶えなかった。砂岩の壮麗な大聖堂、クリスマス・マーケットなどでも知られ、今やEUの欧州議会本拠地でもある。

旧市街から700mくらい離れたところに瀟洒な建物の一群がある。低層で5、6棟はあろうか。ホテル名が小さく表示してある。

1621年にフランス人とドイツ人の学生たちに乗馬を教えるために室内乗馬場が建造された。1752年から市の要請により市民のための乗馬アカデミーになり、2005年まで馬を飼う厩舎として利用されてきた。10年から政府の要請で改築改装開始。15年からブラッスリー（＊1）棟の改装開始。21年115室のホテルとしてオープン。

改築改装をした現場の写真集を見ると建物は相当傷んでいたことがわかる。屋根を構成する登り梁や方杖（ほうづえ）などの老朽化した部材を取り替え、新たな垂木を並べ屋根を葺き直している。いわば「復元」に近い工事。それから内装・外装工事にとりかかったのだ。屋根やドーマー窓（＊2）はほとんど新装であり、外装も補修している。しかし空間の骨格は変わっていない。コンバージョンに先立って進められた復元は敬服に値する。新しい建築にはしなかったのだ！

中庭から建物外観を見る。右のブラッスリー棟の外壁は砂岩。

小さなエントランスを入るとコンパクトなロビーがある。その中央には玩具の木馬や鞍のような家具が置いてあって笑わせる。ちなみにharasとは「種馬飼育場」のこと。

新設された階段まわりなどは丁寧な仕事を施している。屋根裏につくられたベッドルームやバスルームには勾配天井に登り梁や方杖が顔を出し、窓は小さい。バスルームのタイルワークはきちんと割り切れている。手に触れるワードローブの扉引き手や、ベッドのヘッドボード、ブラインド、鞍を連想させるスツールなどには馬の革のいわゆるコードバンがさりげなく使われていて「ウマい」。

デザインのレベルが高い。これは政府主導が徹底し、デザイナーのPatrick Jouin（パトリック・ジュアン）とSanjit Manku（サンジット・マンク）（＊3）が明快なものにしたからにちがいない。

ブラッスリーとなった棟。大きなまわり階段の曲木手すりこそ現代デザインだが、古い部分と絶妙に調和している。

中庭にはパドックのような馬場が残り、馬の像が鎮座している。

シャトー、館、修道院などのコンバージョンはよくあるが厩舎は珍しい。それも400年前の建物を復元してから美しく用途変更するという手法を高く評価したい。

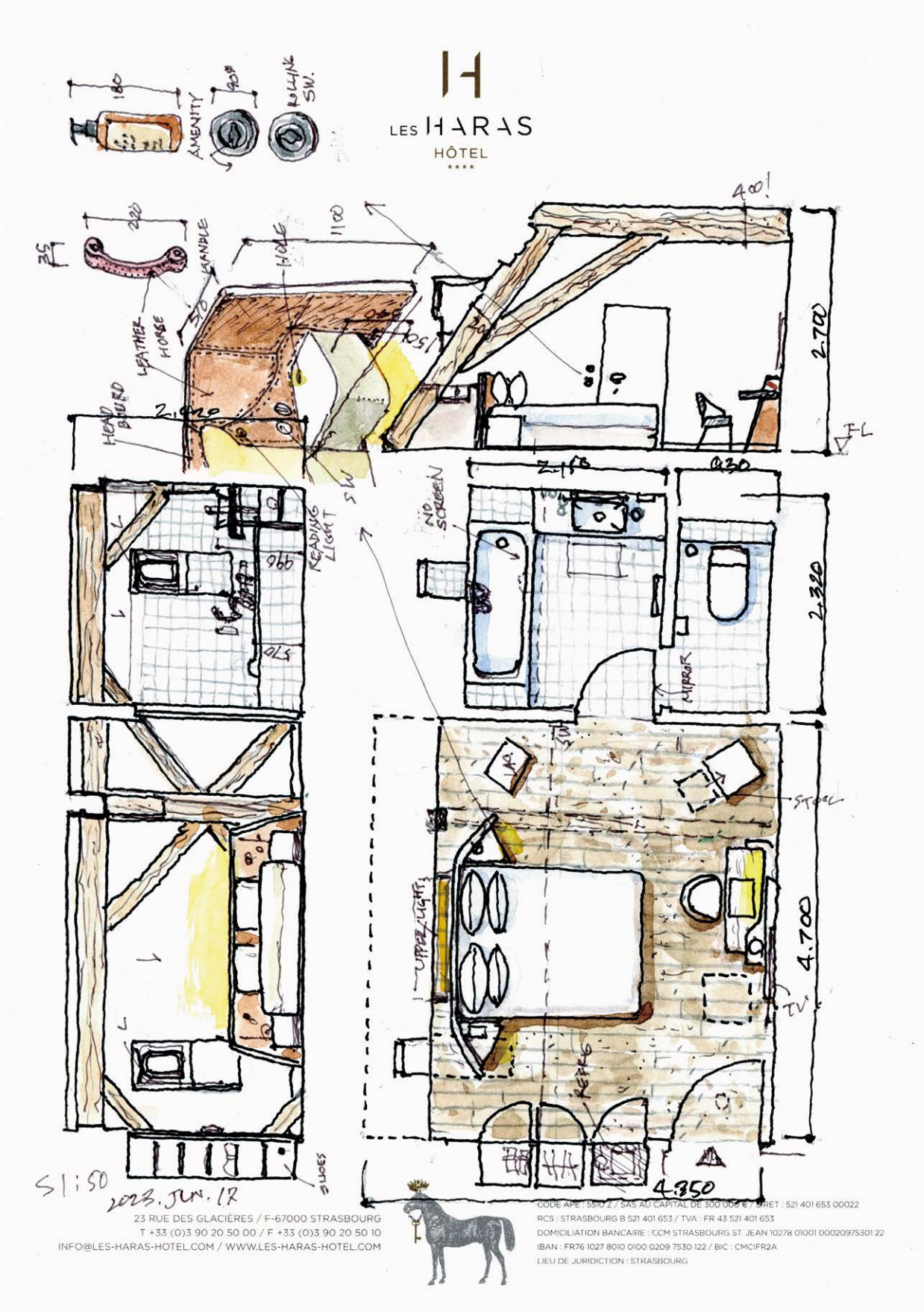
馬が好きな方にはとくにお勧め。

＊1　ブラッスリー：おもにフランスのアルザス地方でビールなどの「醸造所」を指す、やや軽めのカジュアルなレストラン。

＊2　ドーマー窓：勾配のある屋根から垂直に突き出した窓。

＊3　Jouin Manku Agency（ジュアン・マンクエージェンシー）：ヨーロッパを中心に活動するフランスの建築家・インテリアアーキテクト集団。パトリック・ジュアン、サンジット・マンク、Jacques Goubin（ジャック・グバン）を中心に50人規模。たくさんのユニークなプロジェクト実績がある。

浦一也（うら・かずや）
建築家・インテリアデザイナー
1947年北海道札幌市生まれ。72年東京藝術大学大学院美術研究科修了。日建設計入社。94年日建スペースデザイン。2012年より浦一也デザイン研究室主宰。おもな作品：「日建設計飯綱山荘」（1991）、「日本銀行氷川分館」（94）、「京都迎賓館」（2005）、「TWILIGHT EXPRESS瑞風」（17）、「資生堂パーラー原宿店」（21）ほか。
おもな著書：『旅はゲストルーム・同Ⅱ・同Ⅲ』（東京書籍、光文社）、『測って描く旅』（彰国社）など。



Text & Sketch by Ura Kazuya

古材が適度に残り
「時間」を感じさせるゲストルーム。
白いバスルームは隅々まできれいに
デザインされている。

LES HARAS STRASBOURG

Add／23 rue des Glacières 67000 Strasbourg
Phone／+33 3 90 20 50 00
URL：https：//les-haras-hotel.com

チャールズ・イームズは受話器を置いた。ツーツーと寂しく鳴るその発信音は、受話器の対岸にいるエーロ・サーリネンにも聞こえていた。最後にチャールズが発した言葉は、辛辣だった。「もういい、もう聞きたくない。切るからな！」。しかし、エーロはそれでもぶつぶつとおまじないのように独りで話しつづけているのだった。

イームズの名前を世界に馳せたのは、1940年にMoMAが開催した「オーガニック・デザインコンペ」という室内家具のコンペにおいて6部門中2部門で優勝したときだ。このコンペは、エーロ・サーリネンとの共同制作だった。エーロ・サーリネンとは、TWAターミナルなどの建築を手がけ、チューリップチェアに代表される家具でも知られる建築家である。この個性豊かなふたりが組むのだから、両者の辞書に妥協の文字はなかったことだろう。結果的にふたりが出展した椅子の作品は、当時MoMAのキュレーターであったアーサー・ドレクスラーに、三次元に曲がる合板が彫刻のようだと高く評価された。

イームズ・オフィスの歴史を紐解くには、イームズがその成形合板の技術を有していたことが重要である。事務所のはじまりは米軍の負傷した兵士用に5,000本の添え木を製作することを目的とした「プライフォームド・ウッド社」を設立したことが起源だ。それまではリチャード・ノイトラが設計したアパートに居を構え、自宅兼事務所としていたが、受注数の増加に伴い州内のヴェニスへと工房を移転した。しかし海軍からの支払いが遅延したことで、43年に添え木の製造権をエヴァンス・プロダクツ社に売却せざるをえず、イームズ本人は同社の成形合板部を担当する研究開発部長として残るなど波瀾万丈なスタートだった。その後、同エヴァンス社が成形合板部を再受注したことで、ワシントン通り901番の自動車工場へとオフィスを移転させ、そこが生涯のイームズ・オフィスとなった。

この海軍との共同制作はイームズの技術躍進の秘訣となった。飛行機の垂直・水平安定板、機体の底部の部品、パイロット座席、燃料タンク、ヒンジなどを研究し、担架や腕の添え木も製作しており、戦争終了時には、イームズには大量生産可能な合板の知識と技術が残り、後年の創作活動の糧となったのだ。

イームズ・オフィスは、古写真から天井が簡素な鉄骨の小屋組が構成されていることが見え、自動車工場の名残が想像される。その空間構造を逆手にとったかのごとくオフィスは一室の大空間となっており、パーティションで自由に空間が仕切られている様子がわかる。最も目を引くのは天井から吊るされたスケール・バーだろう。スケールはイームズ・オフィスにおいて重要なテーマであった。それはスケールを何重にも横断するイームズの映画作品「POWERS OF TEN」を見てのとおりだ。オフィスの風景は一見楽しそうに見えるが、そこに張り詰めていた空気は緊張感で充満していたようだ。チャールズは、つねに限界まで可能性を追求した。答えを見つけたら完成というタイプではなく、試行錯誤をやめないアプローチを好んでいた。そのため、寄り道、間違い、やり直しの連続で、スタッフは憔悴することが多く、かつマルチタスクであることも求められた。オフィス内は部署がなく、家具デザイナーがグラフィックを作成し、グラフィックデザイナーがソーラーマシーン製作をすることが日常であった。「チャールズは、誰でもいろいろなことができるはずだと思っていた」とイームズ・オフィスで働いていたマリリン・ニューハートの証言に裏づけられている。しかし現実は難しく、自分が得意とする（専門とする）作業がまわってくるまで辛抱強く待つ必要があった。そのためスタッフの出入りは多かった。結果的にマルチタスクな才能が開花したデザイナーたちだけが長く残ることができた。チャールズはデザインにおける専門性を信じずにほかの領域に積極的に飛び込んでいくことを求めていたのだ。その結果が、今日われわれが目にする椅子であり、添え木であり、建築である。

家具も
グラフィックも。
ソーラー
マシーンまで
つくる。

チャールズの名言に「椅子も建築だし、映画も建築だ」がある。映画にも構造があり、椅子はミニチュアの建築だという理解だ。現代は建築家の職能が拡張している。建築家はもはや建物だけでなく、椅子や映画、さらに街灯や新幹線もデザインするネオ・マルチタスクな思考力を発揮せねばならない時代である。そのとき、イームズの「すべては建築だ」という考えが、デザインの地平を闊歩する道標となるべきものか。

チャールズ・イームズ
Charles Ormond Eames Jr.

1907年アメリカのセントルイスにて生まれる。30年に同僚とGray and Eamesを開設するも34年に閉室。メキシコへの旅に出る。帰国後の35年、別の同僚とEames and Walsh事務所を開設。38年よりクランブルック・アートアカデミーに就学。40年にサーリネン事務所でアルバイト。41年にレイ・カイザーと結婚してカリフォルニアへ移住。リチャード・ノイトラ設計のストラスモア・アパートにてふたりで創作活動開始。42年プライフォームド・ウッド社設立。サンタ・モニカ通りからヴェニスのローズ通り555番地に移転。さらにその後、ワシントン通り901番の車工場へ移転し、以後45年間イームズ・オフィスとなる。49年にケース・スタディ・ハウス#8としてイームズ・ハウスが完成。一棟は自邸併設のスタジオとして設計され、暗室なども完備されていた。78年逝去。

やまむら・たけし／1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年ドミニク・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士（建築学）、一級建築士。

古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第6回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

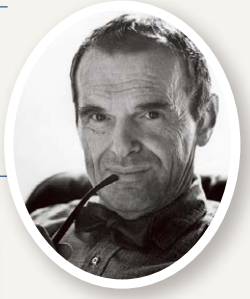
マルチタスクな工房

文／山村 健
Yamamura Takeshi

写真4点／ ©Eames Office LLC (eamesoffice.com). All rights reserved.

↑ワシントン通り901番のイームズ・オフィス。車工場を転用し、天井のスケール・バーやパーティションによる自由な間仕切りが特徴。

チャールズ・イームズ
Charles Ormond Eames Jr.



米軍のためにデザインした添え木の製作風景。

イームズ・ハウス内のチャールズとレイ。おもちゃのモックアップを検討中。

白井のレアリスム

1

1／入口の踊り場（ステージ）から見下ろすと、低く力強い空間がわだかまり、正面に火が燃えている。

歓帰荘　設計／白井晟一

Shirai Seiichi × Fujimori Terunobu

シュール

連載 現代住宅併走 第五十七回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均

戦後の日本の建築界は、アントニン・レーモンドや前川國男、坂倉準三といったモダニズム建築家によりリードされ、丹下健三の活躍で世界のトップを走ることになるが、そうした大勢にくみせず独自の非モダニズムのデザインを貫いた一群がいた。村野藤吾、今井兼次、そして今回の白井晟一である。

白井は戦前に設計を開始しているがすぐ忘れられ、戦後の1950年代に建築ジャーナリストの川添登に〝再発見〟され、当時の若手の磯崎新らに強い刺激を与えていた。

そうした最中に建築界に足を踏みこんだ私にとって白井は最も興味深い存在にほかならず、戦後すぐ秋田につくられた白井建築を見歩いたりしていた。

しかし、当時、日本の近代建築史研究は明治の最初期までで止まっており、昭和戦前段階の白井作品がどうなっているのかに関心をもつ者はいなかった。

そんななか、戦前の小冊子のごとき『新建築』誌を通読して〈歓帰荘〉なる一風変わった小住宅が伊豆長岡の古奈温泉の白石館に建てられていたことを知り、私と建築探偵仲間の堀勇良で、伊豆の韮山の「江川邸」(1600年頃／重要文化財)と「韮山反射炉」(江戸時代末期／世界遺産)見学のついでに温泉に立ち寄った。すでに白石館は営業をやめ、建設工事関係者の宿舎のようになっていたが、庭を挟んだ山側にひっそり残っているのを発見した。

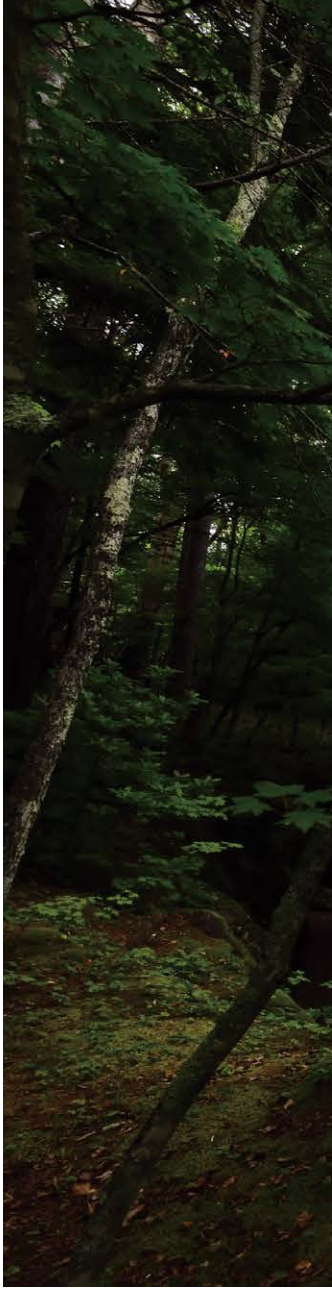
この発見の後、何年かして、〈歓帰荘〉が取り壊されるというので、建築ジャーナリストの石堂威さんと一緒に見に出かけ、現場で、白井晟一の子息の白井彪介さんと会った。そのとき、彪介さんは小学生の子どもを連れていた。

旧白石館跡地を含め、村野藤吾が「三養荘」(1929)の新

2／かつては温泉宿の庭の向こうにあったが、今は森のなかに立つ。
3／暖炉側から入口のステージを見る。

3

4



2

現代住宅併走

Shirai Seiichi × Fujimori Terunobu

4／バルコニーから入ると、そこにステージがある。
5／サロン。右手にステージと入口。

5

6

7

8

6／天井はチョーナのナグリ仕上げ。
7／床。ナグリの跡は白井好み。
8／入口アーチの上部にサインが。

館を計画中で、現地を訪れた白井晟一に村野が残すかどうか聞くと、白井は「だいぶくたびれたナァ、もういいよ」と言い、結局、取り壊された。

はずだったが、しかし、あるとき、「移築したのでお招きしたい」との連絡があり、出かけると、八ヶ岳東麓の別荘地のなかに〈歓帰荘〉は昔のままに立っていた。白井のパトロン的存在であった横山達雄が、名作の消失を惜しんで移築したのだった。しかし横山夫人の「移築したことは内密にしてください」との意向に従い伏せてきたが、数年前、横山さんから今のオーナーの中森隆利さんに手渡された。

そして今回、取材を兼ねての訪問となった。同行は、白井晟一の孫にあたる建築家の白井原太さんで、その昔、現地に出かけたときに会った小学生にほかならない。

オーナーの中森さんに案内していただいての久方ぶりの印象は、

〝空間の濃さ〟

である。外観は樹々に囲まれて中和されているが、中は濃い。住宅としてはあまりに濃い。

伊豆長岡で2度、今の場所で2度、計4度の来訪で初めて寝室を見せていただいたが、同じ濃さでもちょっと異質というか、この寝室のつくられた事情を知る歴史家には妖しささえ含むような濃さを感じる。

白井が付けた〈歓帰荘〉の名は字のとおり歓びの帰る家を意味し、実際、発注者と白井のふたり、というより正確には発注者の〝女の歓び〟が帰ることを白井が願った小住宅であった。

事情を話せばあまりに長くなるから飛ばして、隣の主室に移る。もちろんこちらも十分に濃い。

まず入り方が変わっていて、2階の主室に、外階段を上がってから入るが、玄関の扉を開けると狭い踊り場（ステージ）があり、そこから数段の階段を踏んで沈むようにして入る。こんなヘンな入り方は世界にも例はない。入った時点で訪問者は、濃すぎる内部空間を目撃する。

まず正面には、2本の欅の床柱状の角柱に挟まれて石造の暖炉が立ちはだかり、右手にはアーチの窓。左手にはベイウィンドウ状のベンチが付き、背にはステンドグラス。

と書くと当時の洋館一般と同じように思われるかもしれないが、部屋の広さの割に石の暖炉は大きすぎるし、アーチの窓も、大きいのがひとつというのも床からじかに立ち上がるのも例を知らない。左手のベンチもその背の色彩豊かで細かい細工のステンドグラスも珍しい。そして、こうした暖炉、アーチ窓、ステンドグラス付きベンチが、チョーナで斫（はつ）られた大梁の支える三角の化粧天井の下にひしめいている。

当初、この三角屋根が茅葺きだったことを知り、縄文時代の竪穴住居に想を得た小住宅であることを理解し、納得した。

白井は、戦後、丹下の「広島ピースセンター」（55）の完成に合わせて川添登が仕掛けた「伝統論争」に論者として登場し、江川邸を実例に、日本には縄文時代の竪穴住居に発する〝縄文的なるもの〟の系譜があることを主張し、それまで弥生的なるものしかないと思っていた建築界の丹下らに衝撃を与えているが、白井は白石館長期滞在時に江川邸の存在とその魅力を知ったばかりか、その特徴を〈歓帰荘〉の主室で試みていたのだった。

主室の屋根と室内の発想のもとは縄文住居にあるとしても、謎は続く。ではなぜ全体としては洋風にしたのかとか、洋風のうちでもなぜハーフチンバー形式を外観でとったのかとか、そもそも全体を統合するスタイルが欠けているのはなぜか。縄文的なるものと洋風の統合などありえないだろうに。

若いときから白井に関心をもちながら話す相手もないまま過ごしてきた建築史家は、最晩年の磯崎新と白井について対談する機会を得た。磯崎は、デビュー後しばらくして川添を通じて知った白井の作風に衝撃を受け、以後の自分の表現方法の核に置いている。

対談のなかで磯崎は「白井建築にはシュールレアリスムの何かがある。建築的ルール違反です」と言い、その言葉に喜寿も近い建築史家の永年の疑問は氷解した。本来、統合しようもない造形を承知のうえでのひとつ画面に収めることでもうひとつの別の現実、シュールレアリスム絵画でいうと「夢の領分」などを表現する方法を白井はとっていた。白井がヨーロッパ（ベルリン・パリ・モスクワ）に学んだ時期、印象派以後の絵画は、ピカソのキュビスム、カンディンスキーのアブストラクト（抽象表現）、そしてマックス・エルンストやダリのシュールレアリスムに分かれて進んできたが、白井はシュールレアリスムを、自覚的にか無自覚的にか受け入れ、自分の造形の血肉としていた。

なお、同時代の建築の流れはデ・ステイルの後は絵画とはほとんど重ならず、デ・ステイル→バウハウス→ル・コルビュジエと続き、それが日本にも伝わっている。

9

9／1階の廊下。窓は手吹きのクラウンガラス（小円ガラス）。

10

10／近年改修された茶室（茶室設計：吉野弘）。

写真提供／白井晟一研究所（アトリエ5）

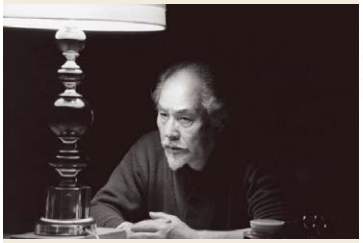
竣工時の２階寝室。

歓帰荘

建築概要（移築後）	
所在地	長野県南佐久郡南牧村
主要用途	別荘
設計	白井晟一
施工	東海興業
建築面積	125.60㎡
延床面積	220.90㎡
階数	地上2階
構造	木造
竣工年	1937年
移築年	1987年
図面提供	『白井晟一 建築とその世界』（世界文化社）

白井晟一

1928年、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）の図案科を出て、以後、建築設計と本の装丁を業とする。若き日にベルリンに留学して、マルクス主義活動に加わり、ロシア亡命を企てたりしている。帰国後、建築家としては「歓帰荘」を発表したが注目されなかった。戦後すぐ手がけた作品は、ジャーナリストの川添登によって建築界に伝えられ、磯崎新など脱モダニズムを目指す若い世代に衝撃を与え、その衝撃は神話化して今におよんでいる。1983年、78歳で没す。



写真／白井彪介

Shirai Seiichi

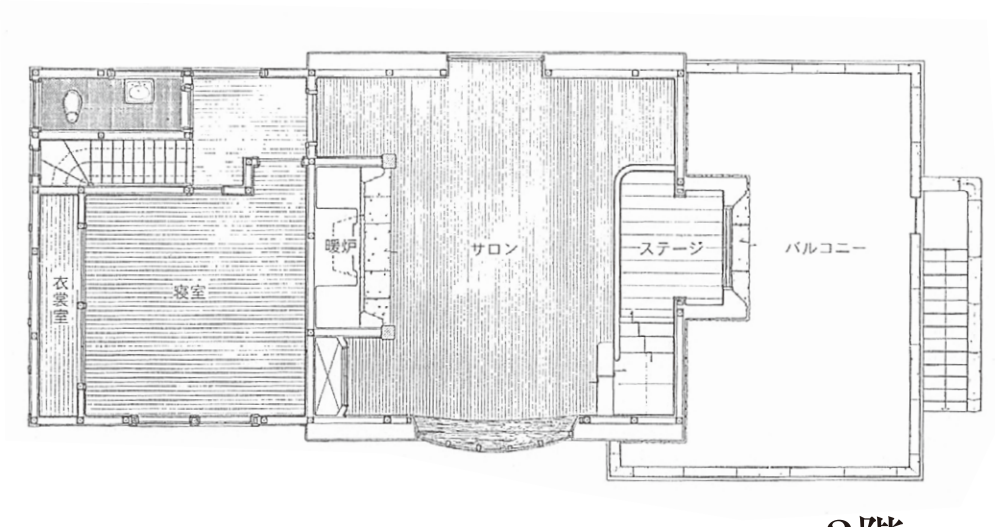
藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」（15）で日本芸術院賞。

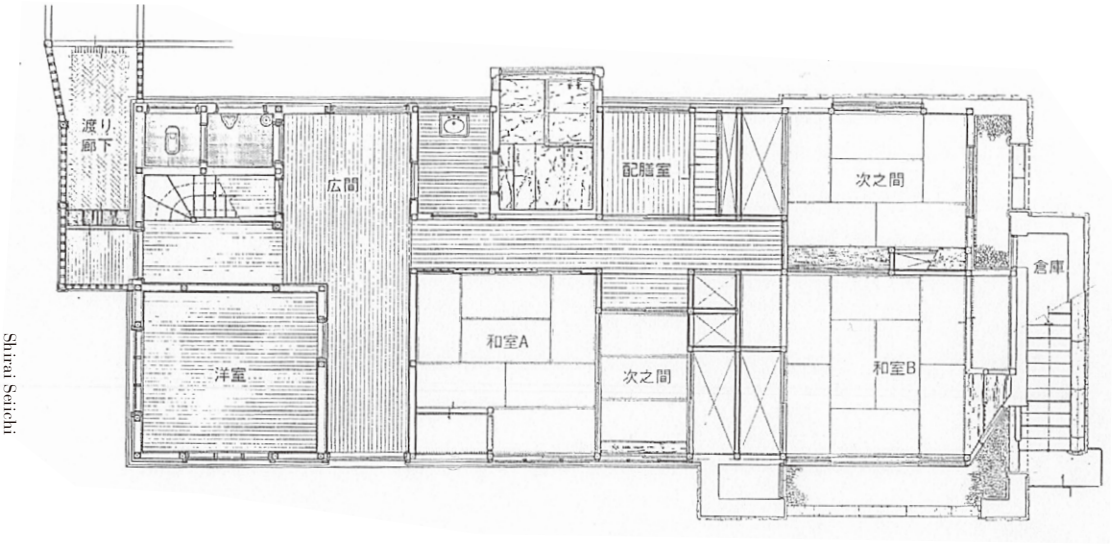
Fujimori Terunobu

竣工時平面図

N 1/150　0 1 2m



2階



1階

現代住宅併走

Shirai Seiichi × Fujimori Terunobu

敦賀駅

Tsuruga Station

再び交通の結節点に

天然の良港である福井県の敦賀港は古来、日本とアジア大陸を結ぶ海の玄関口として栄え、江戸時代には北前船の寄港地でもあった。一方、敦賀は背後に京阪神と名古屋が控えていることから、陸の交通の要衝としても発展した。明治時代には東京とのあいだにいち早く鉄道が敷かれ、敦賀港から船でウラジオストクに渡り、東京と欧州を1枚の切符で結ぶ「欧亜国際連絡列車」なる路線まで登場。日本の表玄関として活躍していた。

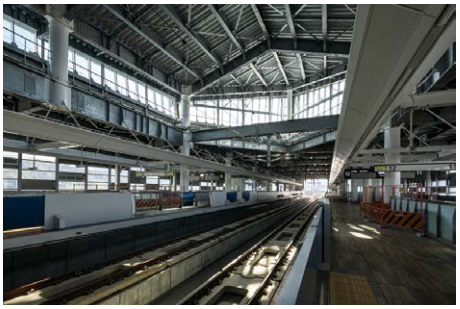
そんな敦賀が今また交通の結節点として脚光を浴びている。金沢・敦賀間が延伸工事中だった北陸新幹線が2024年3月、開業を迎え、真新しい巨大な駅が姿を現したからだ。駅舎の高さは12階建てのビルに相当する約37m。国内の整備新幹線中、最大規模だという。白とブルーを基調にそびえ立つ外観は、迫力のスケールだ。

そもそも、なぜこれほど巨大になったかというと、駅近くでは、JR北陸線の上を国道8号のバイパスが交差し、新幹線はその上を通す必要があることから、線路は高架となった。その高さから新幹線が地面近くまで急こう配とするのは難しく、おのずと高架駅になったのだ。また、北陸新幹線は将来、新大阪まで延伸される計画がある。敦賀は当面、終着駅となるため、乗務員や列車清掃員などの宿泊エリアも必要で、駅舎の幅も長大になった。

敦賀駅が日本一なのは高さばかりではない。駅舎内のエスカレータ26基と、乗り換え改札19通路も整備新幹線駅では最多とのこと。「ここまで完備したのは、在来線への乗り換えのスムーズさを追求した結果です」と語るのは、鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）の阿部祐介さん。もともと新幹線と従来の在来線のホームが離れていたため、少しでも移動時間を短縮すべく、乗り換え客が最も多い特急列車のホームを新幹線ホームの真下に新設することになったという。この縦移動をできるだけ迅速にし、混雑を緩和するために、十分な数のエスカレータや改札機を用意したというわけだ。

駅舎は1階が特急ホーム、2階が乗り換えコンコース、3階が新幹線ホームという構成。鉄道・運輸機構の大江英誠さんによれば、こうした3層構造の駅というのも全国初だそうだ。

敦賀駅外観。手前に木ノ芽川。



敦賀駅新幹線ホーム。ハイサイドからの光があふれる。

敦賀駅新幹線コンコースのトイレ入口。

多くの乗り換え客を受け入れるトイレ

港町・敦賀をモチーフに

まずは初めてづくしの駅舎の最上階、新幹線ホームを見学した。大屋根の下に広がる空間は明るく開放的で、日本一の高さを誇るだけに眺望も抜群。ガラス張りのホーム中ほどからは敦賀湾も望める。床は船の甲板を思わせる木調タイル張りで、船のキャビンに見立てた待合室を配するなど、全体を港町・敦賀を象徴する船をモチーフにしたデザインでまとめている。

1層下のコンコースも、北前船の帆をイメージした白い膜天井の下に広がる大空間。19通路ある中央の改札を挟んで、新幹線と在来線のコンコースが連続しており、全長は200m。一方からもう一方を見通した全景は壮観だ。

長いコンコースの両端にはアイストップとなるレンガの間仕切り壁があり、その奥にそれぞれトイレがある。敦賀港には明治時代に外国人技師が設計した赤レンガ倉庫があり、観光スポットになっているため、レンガを採用したという。透かし積みにした理由は「プライバシーに配慮する一方、ほどよく気配を

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸

男性トイレ

個室と小便器

個室

フィッティングボードやベビーチェアなどの豊富な設備が設けられた個室群。

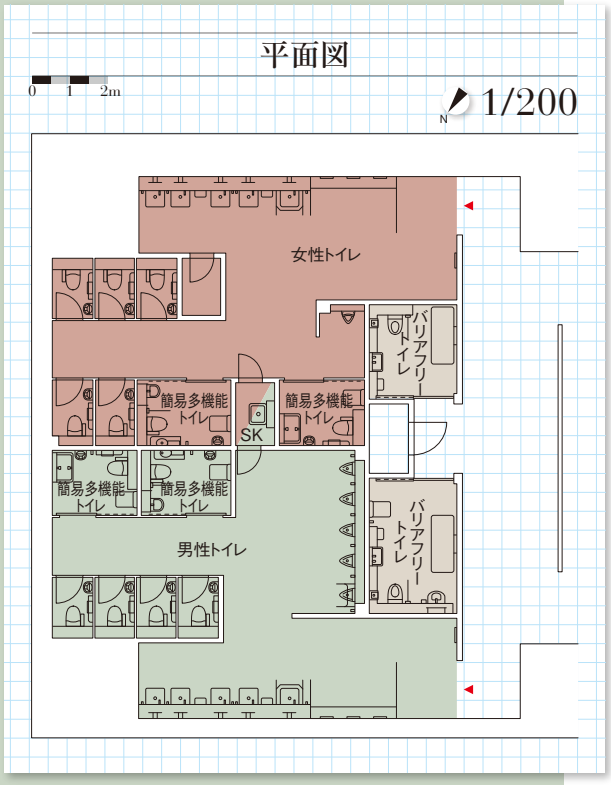
おむつ交換台など、女性トイレと同様の設備。

パウダーコーナー

女性トイレと同じ広さで用意されている。

トイレ入口

港の倉庫をモチーフにしたレンガの目隠し。



女性トイレ

全景

車いすでも通りやすい広い幅の通路。男女同設備を徹底しているが、女性トイレには幼児用小便器が設置されている。

個室

→ 広い個室。オストメイト対応にもなっている。

← すべての個室にベビーチェアが設置されている。

個室

バリアフリートイレ

入口

→ オストメイト対応。フィッティングボードやフラットシートなどの豊富な設備が設けられている。

← 入口には、対応している機能がわかるようなサインが明示されている。

内部

感じさせることで安心感を与えたかった」と大江さん。阿部さんも「死角をつくらないのが防犯上の基本です」と話す。

男女どちらも同じ設備に

今回撮影したのは、新幹線コンコース側のトイレ。レンガ壁のすぐ裏手に大小ふたつのバリアフリートイレがあり、その左奥に男性トイレ、右奥に女性トイレがある。トイレの内装も白とブルーが基調で、濃い青と白い器具のコントラストが際立ち、各ブースの扉に大きく描かれたピクトサインも見やすい。

阿部さんによると、今回のトイレのおもな特徴は「機能分散」と「施設の男女差をなくす」「インバウンド対応」の3点。機能分散とは、車いす使用者やオストメイト向けの機能をバリアフリートイレだけに集約するのではなく、一般トイレ内にも手すりや汚物流しなどを備えた広めのブースを設けることで、バリアフリートイレの混雑を避け、どちらでも自由に選んで気がねなく使ってもらうためだ。

施設の男女差をなくすことは、明快に2分割された平面図からも読み取れる。パウダーコーナーの広さも男女平等なら、内部の設備も完全に平等で、ベビーチェアやフィッティングボード、擬音装置の「音姫」までを女性用だけでなく男性用にも完備。ここまで徹底したのは、LGBTQ対応でもあると阿部さんは言う。確かにすべての設備が両方に揃っていれば、どんな人にも使いやすいといえるだろう。

独立行政法人
鉄道建設・
運輸施設整備
支援機構
北陸新幹線建設局
建築部
建築第二課長

阿部祐介

Abe Yusuke

5言語対応でインバウンド向け

駅全体のサインと同じく、トイレ内の機能説明も5言語対応（日本語、英語、中国語繁体字、中国語簡体字、韓国語）で、インバウンド対策も万全だ。「フィッティングボードは外国の方は見慣れないので、見学会の際に、何のために使うのかと聞かれましたね」と笑う大江さん。着替えるためだけでなく、子どものパンツタイプのおむつを立ったまま着替えさせたり、床にじかに置きたくない荷物を置いたりと、幅広く活用できるため、外国人も使い途がわかると、これは便利だと喜んでいたそうだ。

ちなみに、各ブースの鍵は上下2カ所に付いているが、これはベビーチェアに座らせた子どもが解錠してしまうのを防ぐためで、過去のトラブル例を参考にした対策。また、大江さんによると、当初は新幹線と在来線のトイレは男女のトイレの配置が逆だったが、事前に現場でモックアップを組んで検証した際、入りまちがえないよう、同じ配置に揃えたほうがいいという意見が出て、変更したという。駅を新設するたびにノウハウが蓄積され、トイレ空間も着実に進化していることがうかがえる。

阿部さんは「女性の方から女性トイレを男性トイレより広くするべきだという意見も出ましたが、われわれはこれが今の時代に合った最新のトイレだと考えています」と自負を語る。

ひと昔前は男性トイレに比べて女性トイレのほうが広く、充実したパウダーコーナーがあるなど、男女に格差のあるトイレが多かったため、それが常識だと思う人はまだ多いだろう。だが、どんな人も使いやすい真のユニバーサルデザインを突き詰めていくと、ぐるっと一周まわって、性差がないトイレこそ時代の最先端を行くかたちなのかもしれない。次なる駅の最新トイレがどう進化するのか、見学できる日を楽しみに待ちたい。

独立行政法人
鉄道建設・
運輸施設整備
支援機構
北陸新幹線建設局
敦賀鉄道建築建設所
担当副所長

大江英誠

Oe Hidenobu

Tsuruga Station

敦賀駅

外観。在来線と通路でつながっている。

建築概要

所在地	福井県敦賀市津内
事業主	独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 北陸新幹線建設局
主要用途	交通施設
設計	独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 大阪支社、ジェイアール西日本コンサルタンツ株式会社
施工	鹿島・竹中土木・前田産業北陸新幹線・敦賀駅新築特定建設工事共同企業体
敷地面積	17,688.03㎡
建築面積	13,397.10㎡（内建築基準法対象9,203.51㎡）
延床面積	28,664.93㎡（内建築基準法対象12,054.86㎡）
階数	地下1階、地上3階
高さ	約37m
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
設計期間	2016年10月～2019年9月
施工期間	2020年1月～2023年12月

おもなTOTO使用機器

● 男性トイレ
壁掛フラッシュタンク便器　UAXC3CL1
ウォシュレットPS2　TCF5534AUY
コンパクトオストメイトパック　UAS81LDB1N
マイクロ波センサー壁掛小便器　XPU21A
壁掛ハイバック洗面器　LSE135CB　自動水栓
間接LED照明付鏡　EL80014
クリーンドライ高速両面タイプ　TYC420W
ベビーチェア　YKA15S
フィッティングボード　YKA41R

● 女性トイレ
壁掛フラッシュタンク便器　UAXC3CL1
ウォシュレットPS2　TCF5534AUY
コンパクトオストメイトパック　UAS81LDB1N
マイクロ波センサー壁掛小便器　XPU21A
壁掛ハイバック洗面器　LSE135CB　自動水栓
間接LED照明付鏡　EL80014
クリーンドライ高速両面タイプ　TYC420W
ベビーチェア　YKA15S
フィッティングボード　YKA41R

● バリアフリートイレ
フラットカウンターバリアフリートイレパック　XPDA5RS6111
多目的シート　EWC520ARS
クリーンドライ高速両面タイプ　TYC420W
フィッティングボード　YKA41R

福岡大名ガーデンシティ

FUKUOKA DAIMYO GARDEN CITY

ホテル客室の中心に光るバスルーム

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸

元校庭のまわりを囲む建物。右手がタワー棟。

小学校の跡地に新しい複合施設

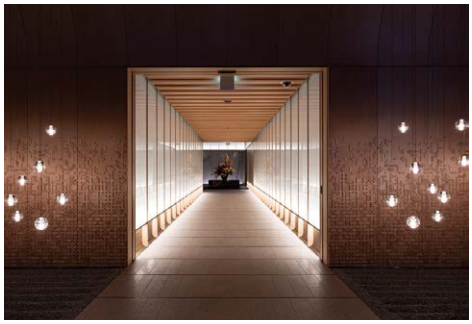
福岡の新たなランドマークとして話題の複合施設「福岡大名ガーデンシティ」が2023年6月、全面開業した。福岡市では天神地区において民間ビルの建て替えを促進するプロジェクト「天神ビッグバン」を進めており、同施設はその中核となる再開発事業。航空法の高さ制限緩和の特例承認を受けたメインタワーは地上25階建て、高さ約111m。周辺の高層ビル群と比べても群を抜いている。

敷地は140年続いた歴史ある旧大名小学校の跡地で、2014年の閉校後、市は地域のコミュニティとグローバルな人材が交流する場の創出を目指し、住民や有識者と検討を重ねたうえで公募型プロポーザルを実施。積水ハウスを代表とする事業者チームの案が選定された。土地は市が所有し、70年の定期借地契約を設定。積水ハウスほか計5社で構成する大名プロジェクト特定目的会社が開発運営を担当する。建築設計は、久米設計と地元の醇建築まちづくり研究所によるJV。

敷地内には、校庭を再生した広場を囲むように、オフィス・ホテル・商業施設から成る福岡大名ガーデンシティ・タワー棟（以下タワー棟）、公民館・創業支援施設・賃貸住宅などがある福岡大名ガーデンシティ・テラス棟（以下テラス棟）、イベントステージなどを配置。さらに、本事業敷地に隣接する南側の旧校舎の一部は保存・再生され、2017年から官民協働型スタートアップ支援施設として市から委託された福岡グロースネクストが運営している。

高層ビルの足元に元校庭の広場

貫通通路。奥に校庭。1～2階に商業エリアがある。



1階のホテルエントランス。

北側の表通りに面したタワー棟はふたつのボリュームに分割したうえで前後に雁行させ、あいだに裏通りへと抜ける貫通通路を設けた。表通りの手前から見ると、分節により圧迫感が軽減されただけでなく、雁行によって通路の入口となるスリットが見えやすくなり、かつ人を誘引するような動きのあるデザインが生まれていることがわかる。

大名地区は江戸時代には「大名」と呼ばれた藩政の重臣が構える屋敷が立ち並んでいたことから、その名がついたというが、「町割には今もその名残で、敵からの侵入を防ぐかぎ型の路地が多く見られます。立体的に雁行させた外観は、そのかぎ型に由来しています」と語るのは、久米設計の柳下元宏さん。このかぎ型のモチーフは天井材や床材の割り付けなど、施設内の随所で繰り返されている。

トンネル状の貫通通路を抜け、南側の広場に出ると、北側の都会的でクールな風景とは一転した、温かみのある憩いの場が広がる。かつて校庭だった広場のまわりを旧校舎や大小さまざまな建物が取り巻くさまは、どことなく小学校を彷彿とさせ、親しみやすいスケール感だ。また、広場だけでなく、周囲の建物の中低層部にも壁面緑化や植栽など、立体的な緑化が施され、いっそう表情を和らげている。

積水ハウスの近藤祐浩さんによれば、地域行事に開放していた校庭と同様に、今後も年5回は広場を夏祭りや運動会など地域のイベント会場として無償で貸し出すという。

タワー棟、テラス棟、スタートアップ支援施設のある旧校舎（別事業）の3棟は2階レベルでつながっており、近藤さんは「南側の旧校舎でスタートした企業が、テラス棟のシェアオフィスでさらなるランクアップを経て、最終的にはタワー棟の最先端オフィスに入居していただくよう

ホテル・スタンダード

バスルーム

建具を閉めるとバスルームを閉ざすこともできる。織り竹の隙間から光が漏れて行灯のよう。

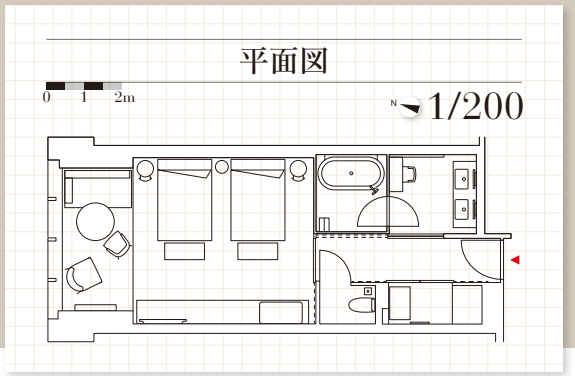
ほぼ同じ仕様のアクセシブルルーム。バリアフリー対応の浴槽になっている。

バスルーム。ガラスで囲われ、点検口が目立たないシームレスな天井などが特徴的。

全景

全景（アクセシブル）

アクセシブルルームのトイレ。引き戸を閉じると壁と一体化したようにシームレス。



トイレ（アクセシブル）

ホテル・プレミアムスイート

バスルーム

シャワーとトイレ

↑

浴槽は窓際に置かれ、景色を望みながら入浴できる。部屋とのあいだには引き戸。

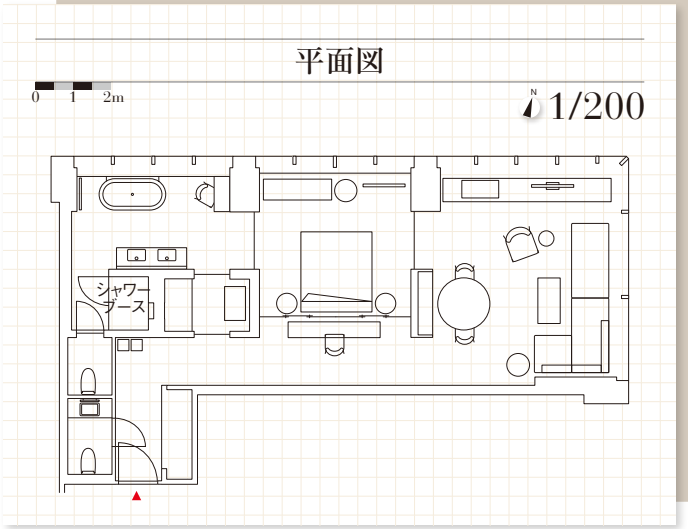
→

個室内にも洗面台が設けられている。

←

左手にシャワーブース。右手にトイレ。

トイレ

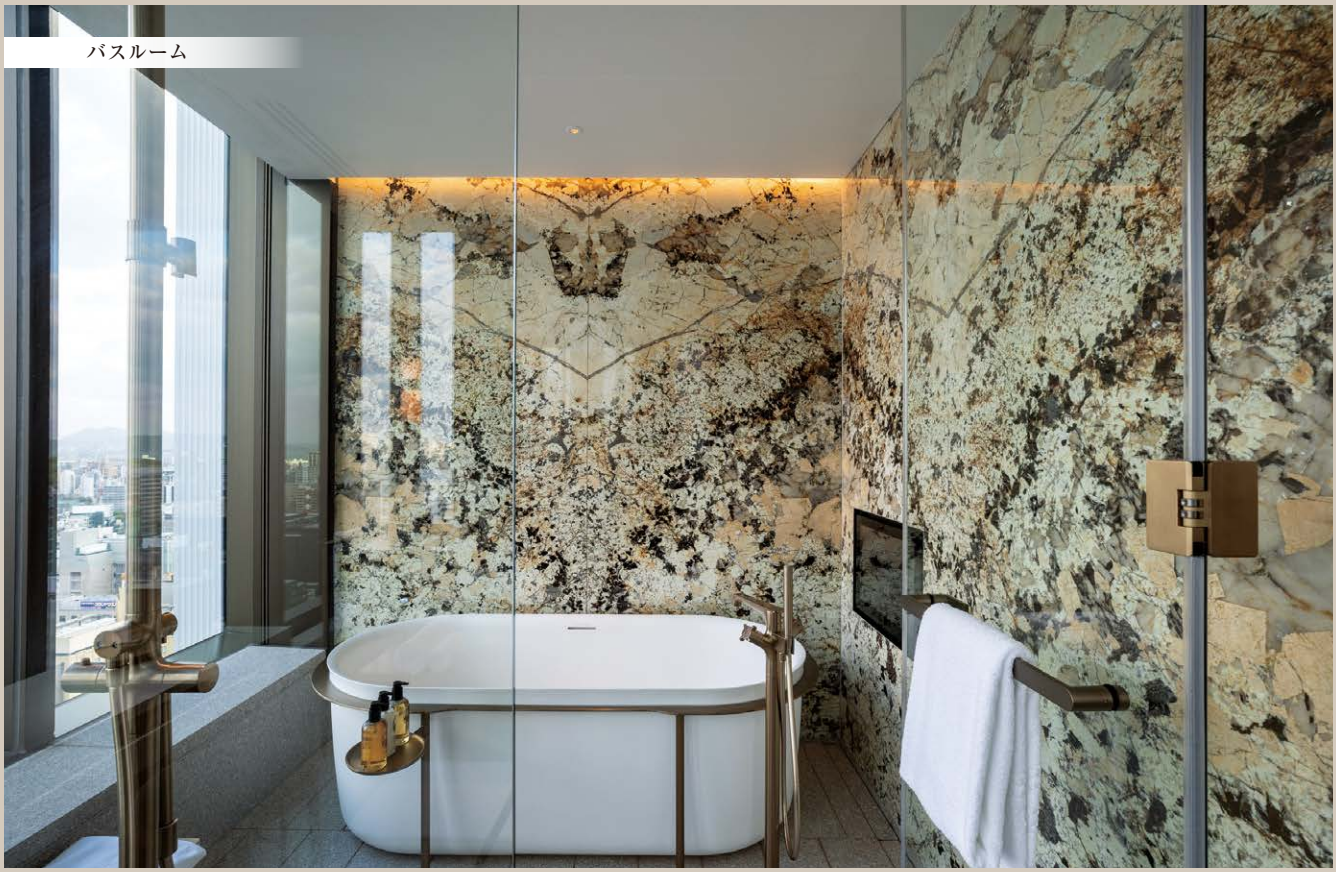


→

絶景に囲まれた角地の空間。

リビング

ホテル・ジュニアスイート


バスルーム

トイレ

↑ 壁面は、モンテカルメロという希少な大理石。

→ バスルーム前の洗面台。同様に大理石が用いられている。

← トイレの壁に福岡の上野焼が飾られている。

洗面

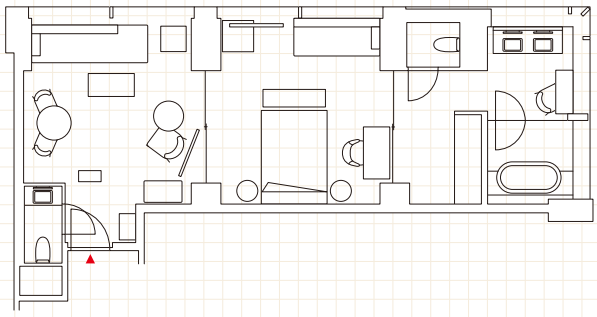
全景

← バスルーム、寝室のいずれの部屋からも景色を望むことができる。

平面図

0 1 2m

N 1/200



ホテル・レセプション

バリアフリートイレ

広い洗面台。右手に個室群。

間接照明にて、空間が演出されている。

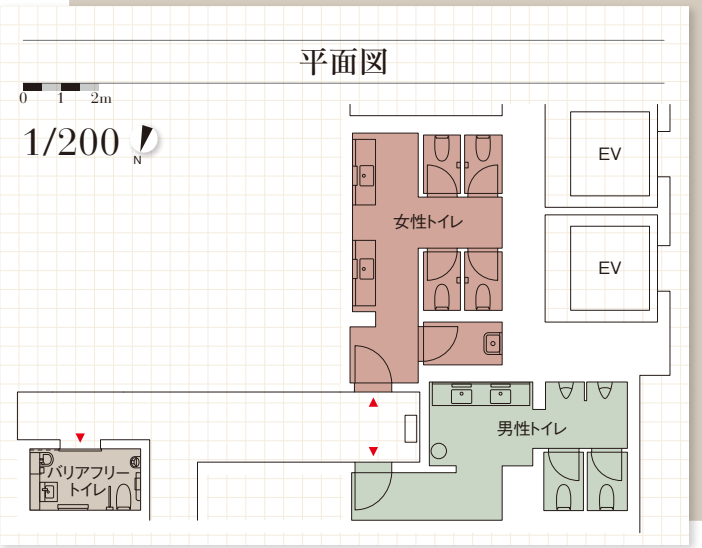
壁の目地が少なく、すっきりとまとめられたディテール。

女性トイレ

男性トイレ

トイレ前の通路も間接照明と端正な仕上げで空間を演出。

通路



オフィス階

女性トイレ

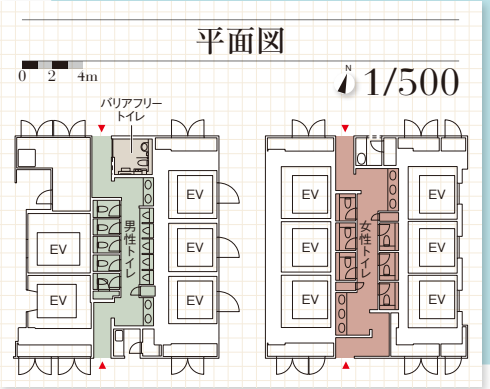
→ オフィスらしく、書類などが置けるような低いライニング。ライン状にするなどして照明がきれいに納められている。

個室

↑ 便器が見えない造りになっているが、わずかに扉が開いていることで空室とわかる。

↓ 小便器のあいだには仕切り板。小便器が露出しない空間に。

男性トイレ



な好循環が生まれてほしいものです」と抱負を語る。

ホテルや水まわりには職人泣かせのディテール

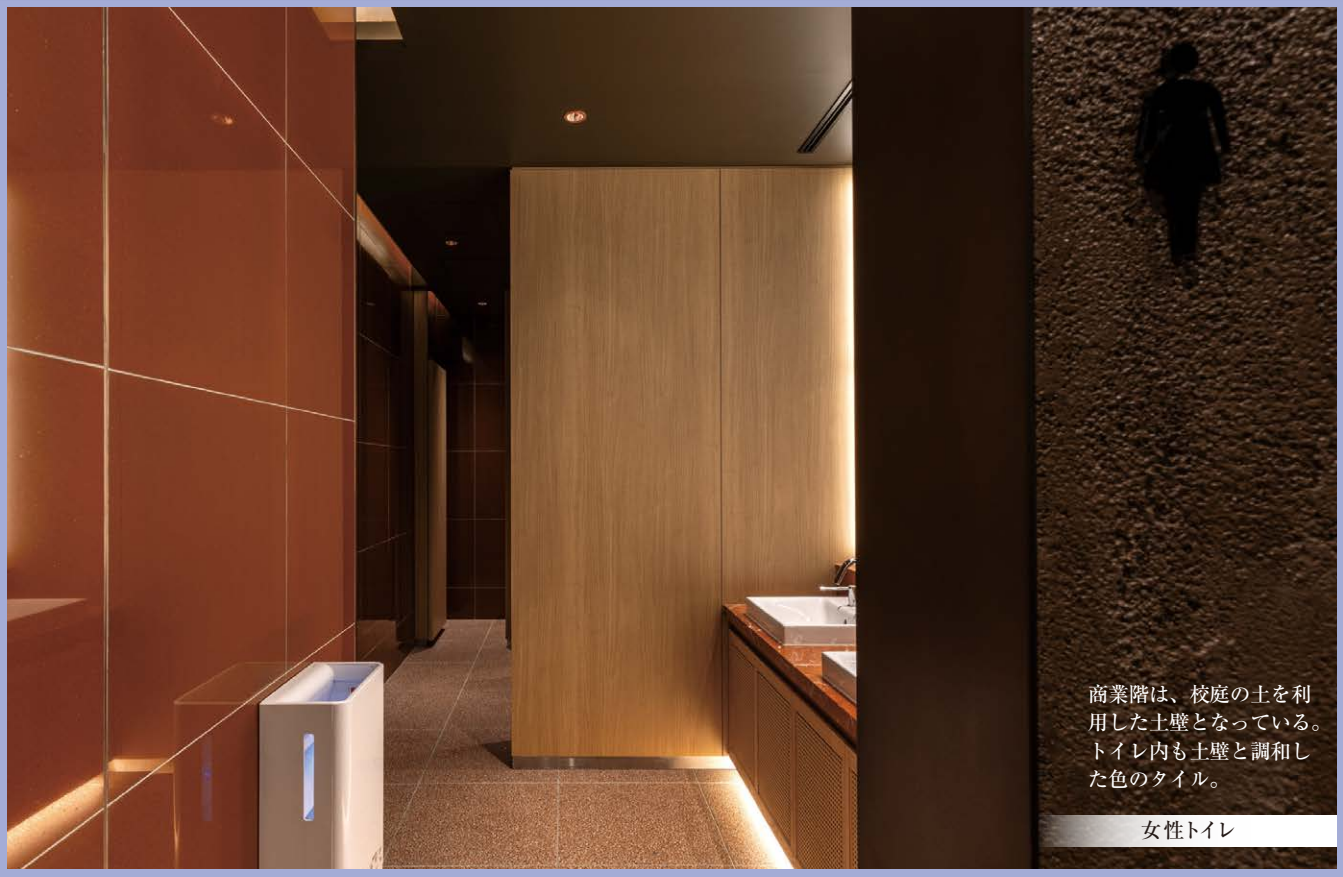
さて、最新施設の水まわりはどんなものか、まず九州初進出の五つ星ホテル「ザ・リッツ・カールトン福岡」を取材した。

ホテルは眺めのよいタワー棟の18～24階を占め、客室は全室50㎡以上の167室で、うち20室がスイート。客室と共用部分のインテリアデザインはオーストラリアのメルボルンに拠点を構えるLayan Architects＋Designersが手がけた。日本のリッツ・カールトンをデザインするのは、日光に次いで2例目。

久米設計の田中敬さんによると、同事務所の代表、ヨハネス・ハートさんは最初に福岡県内の伝統工芸の工房を見てまわり、博多織をはじめ、籃胎（らんたい）漆器や久留米絣などからインスピレーションを得て、「織る」を今回の全体コンセプトに定めたそうだ。客室や共用部の内装には金属や竹など、多種多様な素材を織り込んだ仕上げが多用されている。

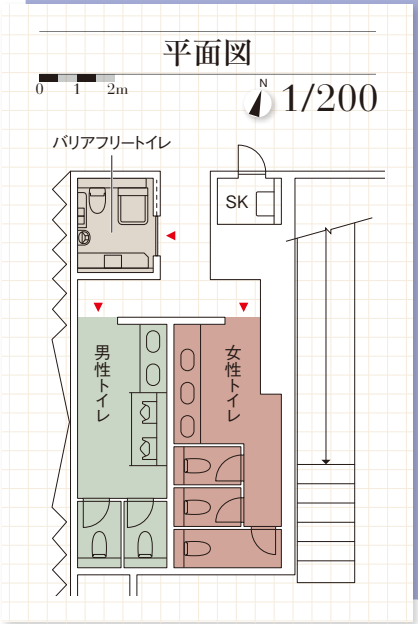
また、日本の建築に造詣が深

商業階



商業階は、校庭の土を利用した土壁となっている。トイレ内も土壁と調和した色のタイル。

女性トイレ



男性トイレ

男性トイレも土壁と調和した色のタイル。

おむつ交換台やベビーチェアが設けられている。

バリアフリートイレ

個室

ベビーチェアが設置されている。

い同氏が今回、客室のデザインにおいて徹底的に追求したのが、日本建築が古来基本としてきた尺モジュールを厳密に守った設計手法。それが如実に表れているのが、スタンダードと車いす対応のアクセシブルの客室だ。

アクセシブルのスタンダードとの違いは、浴槽がオリジナルの楕円形ではなく、四角い既製品である点と、トイレの扉が開き戸ではなく引き戸である2点。浴槽を既製品にしたのは、楕円形の浴槽には移乗台が設置できないためだという。

撮影した部屋では、室内に入ると通路の右手にガラス張りの浴室があり、正面奥の全面開口から博多湾が一望できる。つい景色に見とれてしまうが、振り返ると水まわりには驚きの仕掛けが隠されている。

まず壁同然に見えた通路には引き戸が仕込まれ、開けると内部にはトイレがある。壁にアートとして飾られているのは、福岡の上野焼の皿だ。

一方、浴室は2面を各2枚の織り竹の引き戸で囲うことができる。閉じると浴室全体が行灯のようになり、これまた美しい。寝室との境に建て込む扉はトイレの手前の壁に納まっており、通路をまたいで引く仕組み。つまり、どの部屋も幅を正確に4分割し、トイレと通路と浴室の

幅を1対1対2にし、それに合わせた建具をつくることで初めて、開けても閉じてもぴたりと納まるわけだ。

さらには、通常の点検口を設けたくないと、照明やオーバーヘッドシャワーを避けつつ、天井全体を3分割し、中ほどの1枚をはずすことで点検口代わりにしたという徹底ぶり。「どこも逃げがない、非常に職人さん泣かせのディテールで、モックアップをつくって何度も検証し、なんとか納めることができました」と田中さんは苦笑い。

印象的な壁面の石はモンテカルメロというブラジル産の希少な大理石。今回スイートも2室見学したが、ジュニアスイートの浴室は2面の壁がこの石張りで、しかもスライスした石を左右対称に張り合わせたブックマッチの仕上げ。窓からの景色といい、なんとも贅沢なバスタイムが楽しめそうな空間だった。

オフィスや商業のディテールもみどころ

タワー棟の5〜16階にあるオフィスの執務室はセンターコアの共用部を取り囲む無柱空間で、複数階に入居するテナントは内部階段や吹抜けを設けることも可能。奇数階の南には、広場の緑と連続する植栽を設けたリフレッシュテラスを備えている。

トイレは南北の両方向に抜けられる細長い空間で、内装はシンプルなモノトーンで統一。ブースの中と外に同じ壁面材を使うなど、「要素をなるべく減らしてすっきり見せたかった」と柳下さん。見逃せないのは施錠していないブースの扉の開き方で、空いていることはわかり、かつ内部が丸見えにならぬよう、絶妙な角度に調整。ブース内には間接照明が美しいブラケットを採用するなど、こまやかな配慮が上質な空間を演出している。

最後に見学したのは、タワー棟2階の商業施設のトイレ。インテリアデザインは、商業施設の設計を得意とする株式会社スペース。近藤さんによれば、商業エリアの土壁風の左官壁には大名小学校の校庭の土が混ぜてあるとのこと。トイレ内の壁面には赤茶色のタイル、洗面カウンターにも赤茶系の大理石が用いられているが、これはその土壁風の雰囲気を踏襲しつつ、空間全体が暗くならないよう明るめの色を選んだ結果だという。

全体の取材を通じて印象に残ったのは、最高級ホテルの完成度もさることながら、緑豊かな広場と貫通通路という、街に開かれた外部空間の魅力だ。今後、天神ビッグバンによる高層化が進むなか、各再開発計画がこうした新たな公共空間をいかに盛り込むかは、街の価値を左右することになるだろう。誰もが使える憩いの場とともに、快適なパブリックトイレが増えていくことを期待したい。

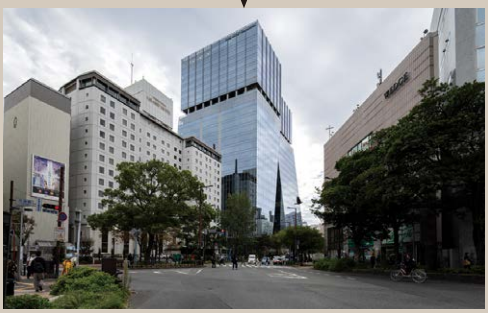
積水ハウス株式会社
福岡マンション事業部
企画開発課
近藤祐浩
Kondo Masahiro

株式会社久米設計
設計本部
九州支社
柳下元宏
Yanagishita Motohiro

株式会社久米設計
九州支社
田中 敬
Tanaka Kei

FUKUOKA DAIMYO GARDEN CITY

福岡大名ガーデンシティ



道路側から見た外観。

建築概要

所在地	福岡県福岡市中央区大名2-6-50
事業主	大名プロジェクト特定目的会社（積水ハウス、西日本鉄道、西部ガス、西日本新聞社、福岡商事）
主要用途	事務所、ホテル、飲食物販店舗、共同住宅、公民館、認可外保育園、診療所
設計	久米設計、醇建築まちづくり研究所
施工	清水・鴻池・積和建設九州特定建設工事共同企業体
敷地面積	9,999.87㎡
建築面積	5,469.28㎡
延床面積	91,423.13㎡
階数	地下1階、地上25階
高さ	約111m
構造	鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄筋コンクリート造
設計期間	2018年5月〜2019年11月
施工期間	2019年12月〜2023年3月

おもなTOTO使用機器

● ホテル（ザ・リッツ・カールトン福岡）レセプショントイレ
ウォシュレット一体型便器（ネオレスト）　CES9898WS特（中水仕様）#NW1
壁掛小便器　US900JCS #NW1
ウォシュレット一体型便器（ネオレスト）　CES9898WS特（中水仕様）#NW1
コンパクトオストメイトパック　UAS82LDB2NW #NW1
壁掛洗面器　LSG722AP #NW1
台付自動水栓　TLE26SS1
オートソープディスペンサー　TLK07S01JA
ベビーチェア　YKA15S
ベビーシート　YKA25S

● ホテル客室
ユニットバス　EBE1821/1822/2023T
ウォシュレット一体型便器（ネオレスト）　CES9898WS特（中水仕様）#NW1

● オフィス階トイレ
壁掛大便器ユニット　UTNCAA
ウォシュレットPS　TCF5523YR #NW1
小便器ユニット　UTNUBN
カウンター洗面器ユニット　UTNLAC
クリーンドライ　TYC420W
コンパクトオストメイトパック　UTNDBA

● 商業階トイレ
大便器　UAXC2CS1B1 #NW1
ウォシュレット　TCF5523YR
小便器　UFS900JCS
ベッセル形洗面器　LS722CM #NW1
クリーンドライ　TYC420W
ベビーチェア　YKA15A

都市を編む

Re-Weaving Urban Fabrics

魚谷繁礼氏は、リサーチをベースに京町家の改修を120件以上手がけるなど、
京都をはじめ各都市の文脈の継承について問題意識をもちながら建築の実践に取り組んでいます。
本展のタイトル「都市を編む」には、「都市の時間を重ねること」と「都市構造を読み解き再編集すること」という、
魚谷氏の都市と建築に向けた視座が表現されています。
展覧会を通して、歴史と未来をつなぐ現代建築の可能性を感じ取っていただければ幸いです。

都市を編む

魚谷繁礼

歴史ある都市で建築する際、どのような態度で臨めばいいでしょうか。古いものは遺したい。同時にこれからの時代にふさわしい建築もつくっていくべきなのではないか。町家のような建築はどうすればいいでしょうか。復元？保存？或いは大胆に改修してもいいのでしょうか。流石に町家は遺したほうがいいのでしょうけど、それでも何故、遺したほうがいいのでしょうか？

僕らはこれまでたまたま京都を拠点にして仕事してきました。京都は794年に建造されたグリッド都市です。およそ千二百年のあいだ、人びとが棲みつくことで、都市はグリッドという形式を変えることなく、しかしその構造を変容させながらも現在に至るまで生きつづけてきました。さまざまな事象が幾重にも重なりながら、現在が現れています。そして現在も都市は変わりつづけています。都市はこれからも生きつづけるでしょう。僕らは、そのような都市の時間のなかで建築しているということを意識します。

僕らは地域性や歴史性といった都市のコンテクストを、設計のコンセプトに利用するに留まらず、できれば空間として享受できるような建築をつくりたいと考えています。そして千二百年という時間の積層したうえに、また新たな意味を重ねることで、これからのより豊かな都市居住の実現につなげたいと思います。僕はグリッドパターンこそが京都の重要なアイデンティティだと考えており、また、整然とした街路とは対照的に雑多な街区中央に可能性を見出します。

以上のようなことをなんとなく考えながら、これまで取り組んできたプロジェクトと、現在進行中のプロジェクトを今回の展示で紹介したいと思います。

京都で仕事をしているなかで、少なくない数の町家や長屋を改修してきました。町家や長屋は、グリッドパターンで形成された都市に人びとが棲みつくなかで、中世に生み出され、近世にかけて洗練され、近代においても更新されつづけてきた都市型住居タイプです。その町家が近年、急速に失われています。

今回、事務所の近くで解体されることが決まってしまった町家について、所有者のご理解によりその軸組みを展覧会場に移設します。軸組みは伝統木造建築のスケルトンであり、都市と建築をつなぐものです。先日、軸組みだけの状態になった様子を確認しに現場に行きました。そこにあったのはか細く、部分的に腐朽し、そして継ぎ接ぎだらけの木材がなんとか家型の形態を保っているという状況でした。僕らがこれまで継承しようと必死に尽力していたものは、じつはこんなにどうしようもないものだったのか、と愕然としました。建築はその場所に在りつづけることで形を変えつつも都市とさまざまな関係が重ねられていくのであり、移設してしまったら都市との関係は断ち切られただのモノになってしまうと考えると、貧弱な木材の集積に見えたのは当然かもしれません。

それでも今回の移設を通し、その有意性について探ってみたいと思います。そもそも路地奥のバラックのような長屋の軸組みを構成する部材は、火災現場跡など、そこらから寄せ集められたものだったということも思い返しながら。

©笹の倉舎／笹倉洋平

ガムハウス

京都府、2019年

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

次回予告

大西麻貴+百田有希 ／ o+h展

2023年度の日本建築学会賞を受賞した児童遊戯施設「コパル」など、かかわる人びとの声に耳を澄まし、理論と感覚の往復運動から多様な存在を包摂する建築を生み出す建築家、大西麻貴と百田有希の展覧会。人文学的視点を交えながら、o+hの建築がもつ豊かな世界観を紹介します。

会期
2024年9月4日（水）～11月24日（日）

TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03（3402）1010
ファクス／03（3423）4085
開館時間／11：00～18：00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

https://jp.toto.com/gallerma

TOTO GALLERY・MA

会期：2024年5月23日（木）～8月4日（日）

魚谷繁礼
Uoya Shigenori

©吉田祥平

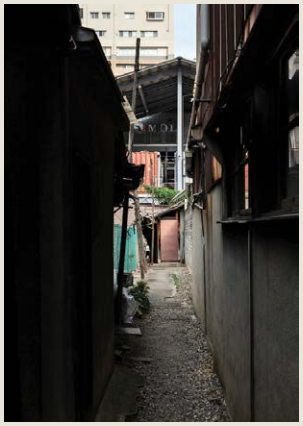
うおや・しげのり／1977年生まれ。兵庫県出身。2001年京都大学工学部卒業、03年同大学大学院工学研究科修了。現在、魚谷繁礼建築研究所代表。京都大学などで非常勤講師。20年より京都工芸繊維大学特任教授。京都をはじめとする国内外の歴史都市において街路街区の構造の変容と現況に関する調査研究を行う。おもな建築に「京都型住宅モデル」（京都府、07年、池井健建築設計事務所と共同設計）、「西都教会」（京都府、11年）、「ガムハウス」（京都府、19年）、「SOWAKA（旧美濃幸）」（京都府、19年）、「コンテナ町家」（京都府、19年）、「郭巨山会所」（京都府、22年）。おもな著書に『住宅リノベーション図集』（オーム社、16年）。JIA新人賞（21年）、北陸建築文化賞（21年）、関西建築家大賞（22年）、日本建築学会賞（作品）（23年）など受賞。

©笹の倉舎／笹倉洋平

志積プロジェクト
福井県、2020年、
川上聡建築設計事務所と共同設計

©笹の倉舎／笹倉洋平

郭巨山会所（かっきょやまかいしょ）
京都府、2022年


©笹の倉舎／笹倉洋平

コンテナ町家
京都府、2019年

©杉野圭

京都型住宅モデル
京都府、2007年、
池井健建築設計事務所と共同設計

©池井健

もやし町家
京都府、2015年

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと、
お役に立つ情報を心がけています。
あわせてご注目ください。

N News

TOTOの最新情報

News 1

TOTOミュージアム企画展「快適な暮らしを追求するユニットバスルーム展～誕生60年の軌跡～」

TOTOミュージアムにて、2024年3月19日（火）より「快適な暮らしを追求するユニットバスルーム展　～誕生60年の軌跡～」を開催しています。1964年東京オリンピック開催の年、TOTOは過去の常識では考えられない短納期でのホテル浴室工事完成へ挑戦しました。この挑戦がきっかけで日本初（＊）のユニットバスルームが誕生し、今やホテルやマンションだけでなく戸建住宅へも広く普及しています。誕生から60年、「快適な暮らしの追求」のため進化を続けているユニットバスルームの軌跡をご紹介しています。

＊JIS規格に適合したユニットバスルームとして

詳細は
TOTOミュージアムウェブサイトを
ご覧ください。

ウェブ→
https://jp.toto.com/knowledge/visit/museum/

TOTO初代ユニットバスルーム

会期	2024年3月19日（火）～11月上旬予定
開館時間	10:00～17:00（入館は16:30まで）
休館日	月曜日・夏期休暇
会場	TOTOミュージアム 特別展示室内
所在地	福岡県北九州市小倉北区中島2-1-1

News 3

Bookshop TOTOへお気軽にお立ち寄りください

Bookshop　TOTOは、TOTO乃木坂ビル2Fにある建築・デザインを中心に扱う書店です。TOTO出版直営である強みを生かし、TOTO出版の僅少本や直筆サイン本も扱っています。また他社の自費出版書籍なども扱っているので、お客さまから「何時間でもいられる」という感想も。またスタッフのお勧め・売上ランキングも好評です。TOTOギャラリー・間の休館中もBookshop　TOTOは営業しております。お気軽にお立ち寄りください。

月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」
休館中の土曜日・日曜日・夏季休暇・
年末年始は休業です。
GWなどの不定期休業日は
ウェブにてご確認願います。

ウェブ→
https://jp.toto.com/bookshoptoto/index.htm

News 2

テクニカルセンター東京リニューアルオープン

TOTOは東京都渋谷区にある建築専門家向けショールーム「テクニカルセンター東京」を、2024年7月よりリニューアルオープンします。節水や防汚技術などを紹介する「技術展示コーナー」は新たにスペースを拡張し、DX推進による訴求力の強化と提案の均質化を実現します。また、エントランスにはデジタル化したブランドウォールを新設し、最新の現場事例やTOTOの歴史、企業活動を大画面モニターで投影。来館時より期待感の高まる施設に刷新します。

『TOTO通信』送付先の変更などはこちらへご連絡ください。→ Tel 093-563-2055 お問い合わせはTOTO通信データ管理室まで

B Book

TOTO出版のお知らせ

建築家・魚谷繁礼の作品集。魚谷氏は京都を中心に国内外の歴史都市において、町家改修や都市の再構築など、過去から未来に続く時間軸で建築に向き合っています。2023年日本建築学会賞（作品）を受賞した「郭巨山会所」ほか、国内外の数多くの作品を写真・図面・論考・ダイアグラムなどで紹介した、魚谷建築の真髄がわかる魅力満載の1冊です。

魚谷繁礼建築集
都市の時間を重ねる

present!→

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方のなかから、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

著者	魚谷繁礼
定価	4,730円（本体4,300+税10%）
体裁	B5判変型（250×190mm）、ソフトカバー、224ページ、和英併記
発行	2024年5月

ウェブ→
https://jp.toto.com/publishing/detail/A0409.htm

＊表紙は変更の可能性あり。

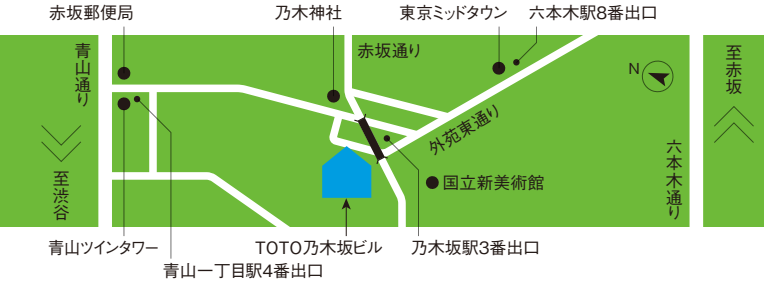
I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

3F TOTOギャラリー・間	電話／03(3402)1010 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 入場料／無料 ※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト(https://jp.toto.com/gallerma)をご参照ください。
2F Bookshop TOTO	電話／03(3402)1525 定休日／月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始 ※詳細はBookshop TOTOウェブサイト(https://jp.toto.com/bookshoptoto)をご参照ください。
2F TOTO出版	電話／03(3402)7138 全国の書店でお求めください。 直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。 ※最新情報は、TOTO出版ウェブサイト(https://jp.toto.com/publishing)をご参照ください。
B1・1F セラトレーディング	電話／03(3402)7134（東京ショールーム） 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 ※事前予約制。ご予約・展示品のご案内はウェブサイト(https://www.cera.co.jp/showroom)をご参照ください。

アクセス
- 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分

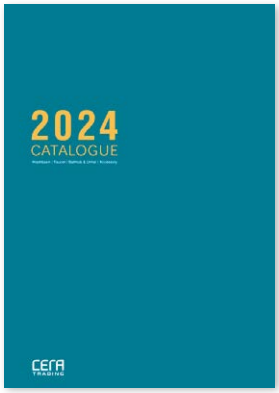


C Cera

セラトレーディングのお知らせ

「セラ総合カタログ 2024」を発行しました

セラトレーディングでは、2月に「セラ総合カタログ2024」を発行しました。現代デザイン界の巨匠マルセル・ワンダースが手がけ、クラシックデザインを再定義した洗面器「THE NEW CLASSIC」シリーズや、モデルチェンジでよりニュートラルな印象となった水栓「AVA 2.0」シリーズなど、空間デザインの可能性を広げるアイテムを多数ご紹介しています。ワンランク上の水まわり空間の計画に、ぜひご活用ください。



「セラ総合カタログ 2024」
発行 2024年2月1日
ウェブサイトよりご請求ください。

ウェブ→
https://www.cera.co.jp/catalogue

次号『TOTO通信』は2024年7月発行の予定です。

TOTO通信 2024年 春号

TOTO通信 2024年 春号 第68巻・第1号 通巻535号
発行日：2024年4月1日 発行所：TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

あしたを、ちがう「まいにち」に。
TOTO

THE CRASSO
ザ・クラッソ

SYNLA
シンラ

ESCUA
エスクア

NEOREST
ネオレスト

#水まわり嬉しい

キッチンがあかるいと、
浴室がきもちいいと、
洗面所が使い心地いいと、
トイレがいつもクリーンだと、
ひとは嬉しいものですね。
TOTOはかなえたい。
あなたの、水まわり嬉しいを。

商品のお問い合わせは TOTOお客様相談室 0120-03-1010
受付時間 9:00～17:00（夏期休暇・年末年始・当社所定の休日等を除く）

東陶屋キャンペーンサイト
https://jp.toto.com/pages/knowledge/campaign/totoya

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。

8248